

上田市文化財調査報告書第108集

# 史跡信濃国分寺跡

平成18(2006)年度～平成21(2009)年度記念物保存修理事業に伴う  
史跡信濃国分寺跡僧寺西門跡及び尼寺南東城並びに尼寺南西域発掘調査報告書

2010.3

上　　田　　市  
上田市教育委員会



# 序

史跡信濃国分寺跡は、古代信濃を代表する遺跡であるとともに、全国の国分寺跡のなかでも特に歴史的重要性の高い遺跡として広く認められています。

史跡指定は昭和5年（1930）に遡りますが、昭和38年から46年（1963～1971）にかけての発掘調査によって、僧寺跡と尼寺跡の伽藍の具体的構造とともに、それらが隣接して立地する特異性も明らかになりました。

遺跡の重要性に対する認識を受けて、同43年（1968）に史跡指定範囲の拡大と公有地化が推進され、伽藍の中核部分については史跡公園化されました。これは国分寺跡の本格整備としては、全国でも最も早い事例に属しています。史跡範囲は古代伽藍跡にとどまらず、八日堂縁日や蘇民将来講（国選択無形民俗文化財）でもつとに名高い現在の国分寺と、蚕室住居に代表される歴史的建物を残す門前の集落などをも含んでいます。このように、古代伽藍跡と、その法灯を伝えながら信仰の場として現在に息づいている寺院とが史跡内で併置していることも、信濃国分寺を際立たせている特徴です。

その一方で、史跡公園も開園から40年を経て、史跡の保存活用に対する考え方やそれを取り巻く社会状況も大きく変化してきている中で、信濃国分寺跡についても改めてその意義と現状を把握・分析するとともに、今後に向けてのあり方を検討すべき時期に来ました。

上田市では、史跡の保全に万全を図るとともに、郷土の歴史文化拠点として活かしていくことを目指し、平成14（2002）年度から、史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会によって、再整備を含む史跡地全体の保存整備活用に関する指針を示すとともに、平成元年以降の史跡公有化事業で取得した範囲を主たる対象として、改めて史跡の構造解明のために、発掘調査に着手しました。

今回は、平成18年度に僧寺の西築地廻跡と僧寺尼寺に挟まれた区域を、19年度には尼寺回廊南東部、20年度には尼寺南西域を対象に、従前の調査では未詳であった僧寺及び尼寺の区画施設について発掘調査による究明を図りました。残念ながら、築地廻等の区画施設はまたもや確認できませんでしたが、僧寺の西門跡が確認されたほか、基壇の造成痕など、新たな知見を蓄積することができました。

信濃国分寺跡の整備と調査は、全体から見れば、まだ緒に就いたところといえます。今回の調査にあたり、御指導をいただいた史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員会の委員各位と、ご協力をいただいた地元住民、調査作業員の皆さんに心から御礼申し上げ、序のことばといたします。

平成22年3月

上田市教育委員会教育長 小山壽一



H21 史跡信濃国分寺跡発掘調査詳細履歴図

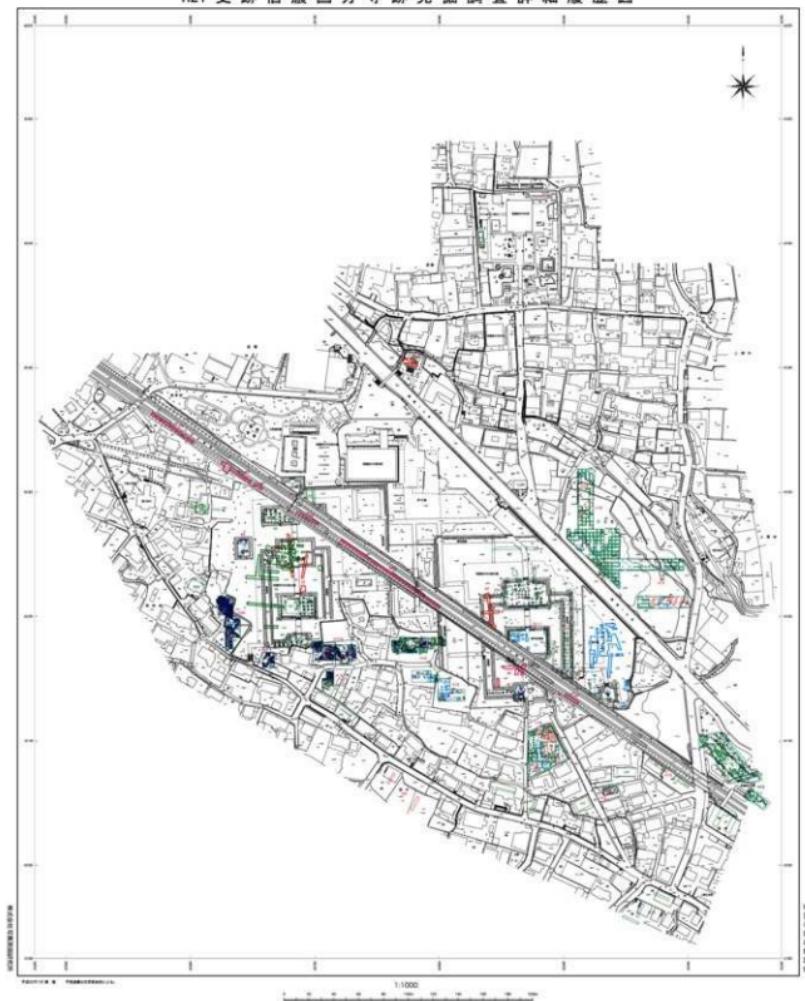
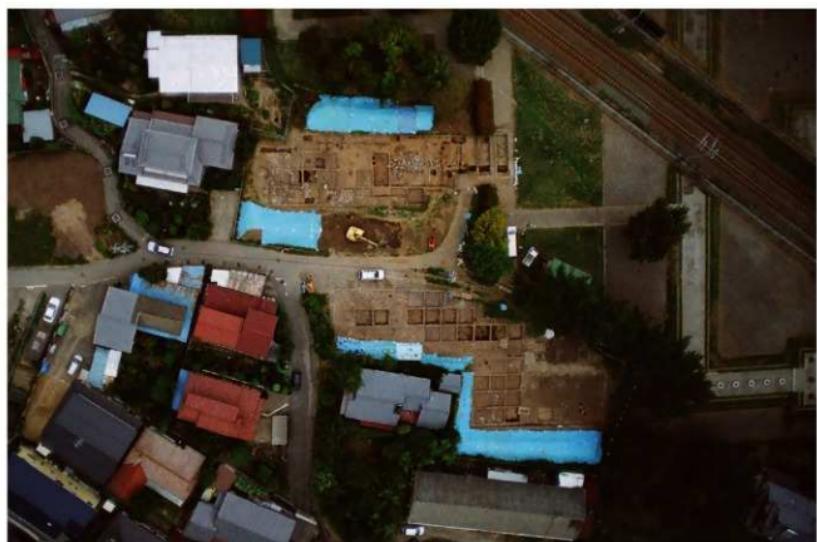


図1 史跡信濃国分寺跡調査履歴図



PL.1 平成18年度調査区全景(写真上が北)



PL.2 平成18年度北調査区全景(写真上が北)



PL.3 平成18年度調査区(南から)



PL.4 平成18年度調査区全景(西から)



PL.5 平成15年度北調査区僧寺西門跡（真上から・写真上が北）



PL.6 平成15年度北調査区僧寺西門跡（南から）



PL.7 平成19年度 尼寺航空写真(写真上が北)



PL.8 平成19年度調査区全景(写真上が北)



PL.9 平成19年度北調査区全景(写真上が北)



PL.10 平成19年度南調査区全景(写真上が東)



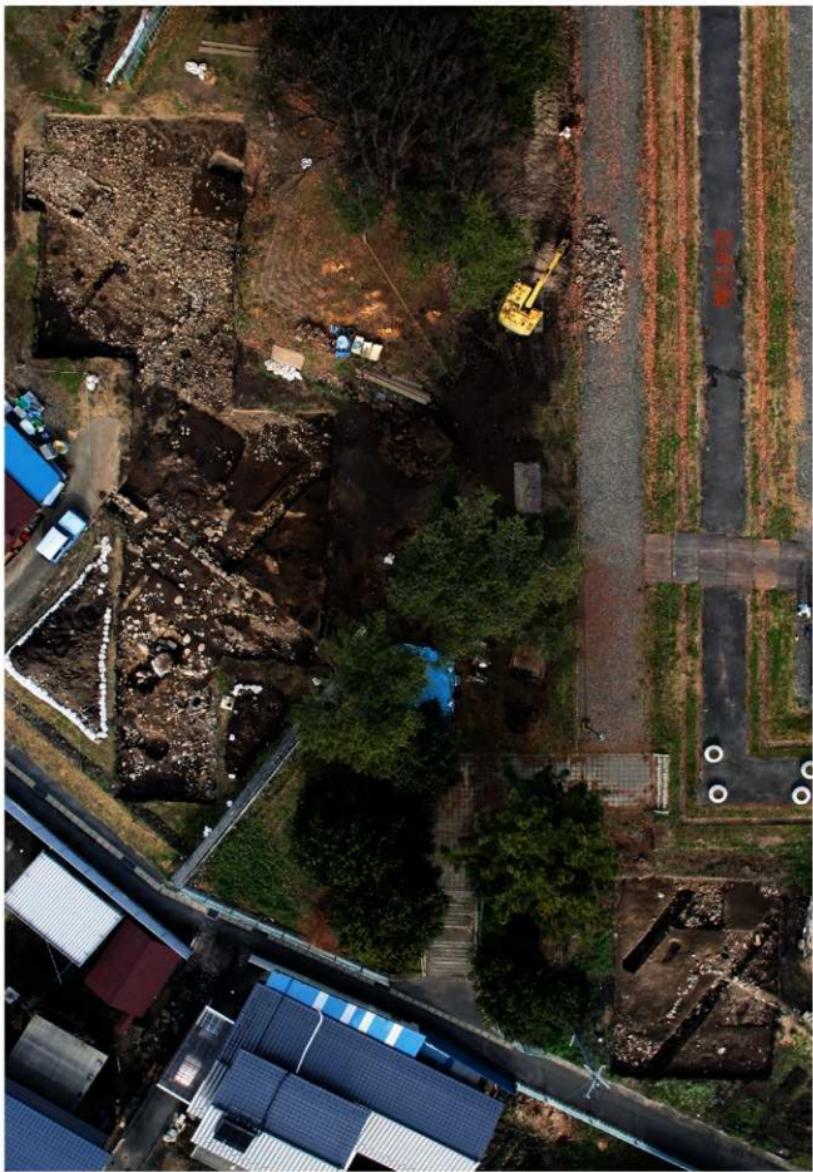
PL.11 平成19年度南調査区検出の石列(南東から)



PL.12 平成19年度調査区全景(南から)



PL.13 平成19年度調査区全景(北から)



PL.14 平成20年度調査区全景(写真上が北)



PL.15 平成 20 年度西調査区全景 (写真上が東)



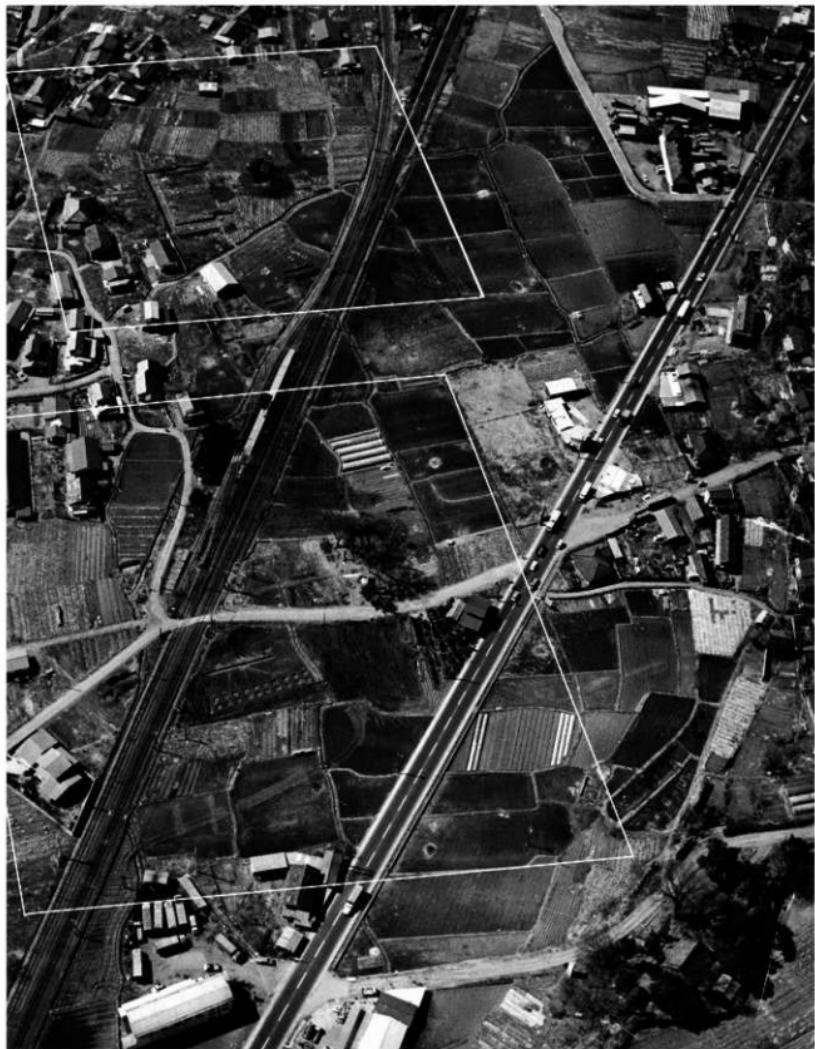
PL.16 平成 20 年度東調査区 (写真上が北)



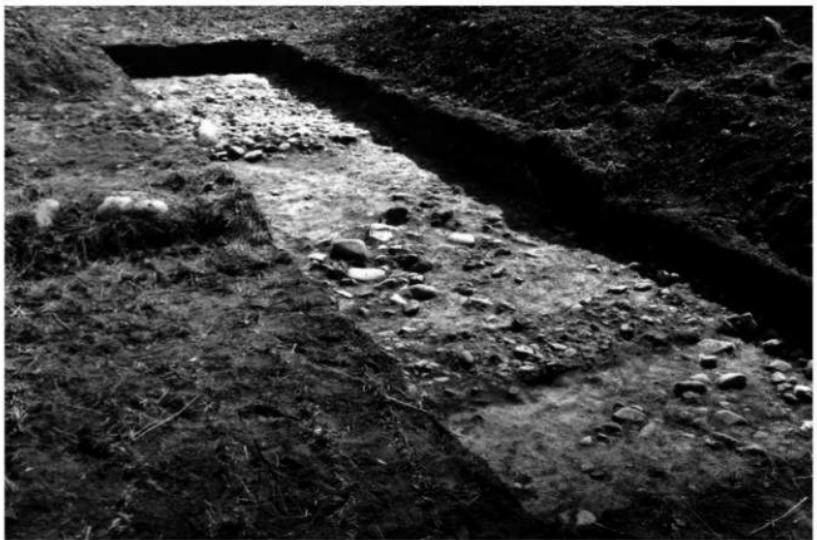
PL.17 平成 20 年度西調査区微段丘石垣（南東から）



PL.18 平成 20 年度西調査区微段丘石垣西端（北西から）



PL.19 昭和40年代初頭の国分寺跡航空写真(東から・手前区画が僧寺、奥が尼寺)



PL.20 昭和42年度尼寺東側築地塀付近の写真(南東から)



PL.21 信濃国分寺跡と推定東山道



## 信濃国分寺の寺域と推定東山道の位置関係について

朱線囲みの東側が僧寺、西側が尼寺で、朱線上に築地塀が推定されている。南東から北西に斜行する朱線が現段階の東山道推定ルートで、国分寺のある面から比高差約2m下の段丘下を通る。このルート推定の際、南東から北西に向かうルートが僧寺南大門前までは直線的に復原できたが、そのまま直進すると尼寺南西隅の寺域内を通ってしまうため、ルートを若干南に曲げ、尼寺に干渉しないように推定された。

尼寺寺域を80m方形とする従前の寺域想定で、南西隅が段丘下に飛び出してしまうことについて、創建当初は同じ段丘面が広がっていたが、後の「改変」によって現在のような「隅切り」のような状態になったと説明されている。この段丘を削り取る原因は、『類聚三代格』仁和四年(888)に記された「信濃国大水」もしくは寛保2年(1742)の「戊の満水」が想起される。

このうち、『類聚三代格』の「信濃国大水」は、国分寺周辺には大きな影響がなかったことが平成6～7年度に長野県埋蔵文化財センターによって実施された「国分寺周辺遺跡群」の発掘調査における該期の遺構分布や周辺の遺跡分布から類推される。また、「戊の満水」では、上田藩内でも各所で被害が出て、上流の大屋や下流の城下・常田・踏入地籍で被害が出ているが、国分村に関する記述はなく、現在のところ尼寺の南西段丘の崩壊の原因と時期は確定されていない。

平成19年度の尼寺南東域の調査で検出・想定された「微段丘に沿った区画」で尼寺南辺を示したのが黄色実線である。このように想定すると、黄色破線で示したように、東山道は尼寺に干渉することなく、より直線的に現道を踏襲して西行することができる。平成20年度の調査では、この区画を追求したのであるが、明らかにできなかった。また現段階では、尼寺南側の段丘直下の考古学的調査がほとんどないこと、推定東山道の道路遺構も明らかとはなっていないこと、「薰臭」の強いであろう人・物が行き交う官道が尼寺の区画に接することがあり得るのか、何より、その威容を誇るべき国分尼寺の正面が隅切りの体をなすことがありうるのか、等々課題は多く、飛躍に過ぎる想定であったかと思われる。

しかし、平成18年度の僧寺西門の検出位置からも、全国の国分寺跡の調査成果からも判るとおり、国分寺の区画が必ずしも方形を呈さず、地形や地勢の変化に柔軟に対応していることを改めて認識して、今後の調査に対応すべきである。

## 例　　言

- 1 本書は、長野県上田市国分に所在する史跡信濃国分寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助事業「記念物保存修理事業」及び長野県補助事業として上田市が実施した。調査及び調査に係る事務は、上田市教育委員会事務局文化振興課が行った。
- 3 現地調査は、平成18(2006)年度及び平成19(2007)年度並びに平成20(2008)年度に実施した。
- 4 整理作業は、平成18(2006)年度から平成21(2009)年度までの間に断続的に実施した。
- 5 報告書作成作業は、平成21(2009)年度に実施した。
- 6 基準・水準点設置、メッシュ（グリッド）設置に係る測量、調査前の微地形測量、調査の空中写真測量及び空中写真撮影は、株式会社写真測図研究所及びみすず総合コンサルタント株式会社並びに株式会社ユーチューブ測量設計上田支店、株式会社共栄測量設計社に委託して実施した。
- 7 遺構面等の実測作業は、養場奈那江・大井敬子・田村まり子・山本万里・丸田由紀子が行った。
- 8 整理・報告書作成作業は、養場奈那江・上原祐子・大井敬子・田村まり子・山本万里・丸田由紀子が行った。
- 9 本書に使用した写真は、主に中沢徳士が撮影し、航空写真は委託業者が撮影したものを使用し、一部は、小川忠博が撮影したものを使用した。
- 10 本書の編集は中沢が行った。
- 11 本調査に係る資料は上田市教育委員会の責任下に、上田市立信濃国分寺資料館に保管している。
- 12 本調査にあたり多くの方々の御協力をいただいた。芳名を記して感謝する。  
中山敏史（前独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所文化遺産部長・史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員長）、佐藤信（東京大学大学院人文社会系研究科教授・史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員）、櫻井松夫（上田市文化財保護審議会会长）、川上元（上田市文化財保護審議会委員）、下堀自治会のみなさん
- 13 作業員の皆さん  
養場奈那江、秋山八栄子、新井邦雄、上原祐子、内山仁志、梅田一男、大井敬子、川上京子、川上恒生、木本昭正、児玉和良、佐藤博、関昭二、竹内和好、田村まり子、中村房夫、原田二三夫、半田光男、保屋野友延、丸田由紀子、満木重雄、村田篤彦、村田宣子、村松秋恵、柳沢昇三、山本万里、横沢生枝、横沢昇、和田和英

## 凡　　例

### 遺構

- 1 遺構の略号は次のとおりで、続く番号は、本調査地内で任意に振ったものである。  
　　縦穴住居址…SB-、溝…SD-、土坑…SK-、集石…SX-、ピット…P-、縦穴住居址のピット…p
- 2 実測図については、国家座標の北を頁の上とし、例外は方位を示した。
- 3 縮尺は、原則として原図1/10と1/20に1/3縮小をかけて1/30、1/60とした。
- 4 レベルの標記はすべて海拔高（単位：m）である。
- 5 網点は焼土を示す。
- 6 遺構観察表の長さの単位はmで、主軸方位は国家座標の北からの角度で示した。

7 土屑の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1997 を用いて判別した。

8 遺構写真の縮尺は任意である。

遺物

1 土器・石器・鉄器実測図は、原図 1/1 に 1/3 縮小をかけて 1/3 とし、瓦実測図は原図 1/1 に 1/4 もしくは 1/6 縮小とした。

2 遺物観察票の「胎」は胎土を、「焼」は焼成を、「色」は色調を示し、色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1997 を用いて判別した。法量の単位はすべて cm である。

3 土器・石器・鉄器写真の縮尺は任意とし、瓦写真はおおむね 1/4 縮尺とした。

## 調査の体制

調査は、上田市教育委員会事務局文化振興課を事務局として実施した。体制は次のとおりである。

教育長

森大和(平成 21 年 4 月 28 日退任)、小山壽一(平成 21 年 4 月 29 日着任)

教育次長

中村明文(平成 19 年 3 月 31 日退任)、小菅清(平成 19 年 4 月 1 日着任・平成 21 年 3 月 31 日退任)、小市邦夫(平成 21 年 4 月 1 日着任)

文化振興課長

岡田洋一(平成 18 年 9 月 30 日退任)、伊藤正巳(平成 18 年 10 月 1 日着任・平成 20 年 3 月 31 日退任)、中部道男(平成 20 年 4 月 1 日着任)

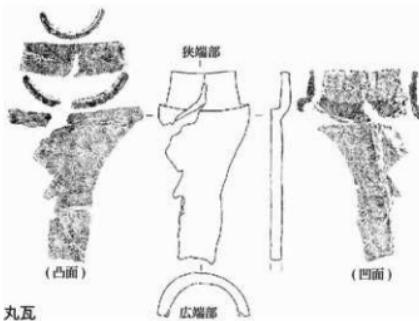
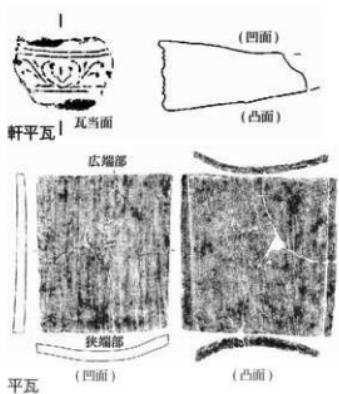
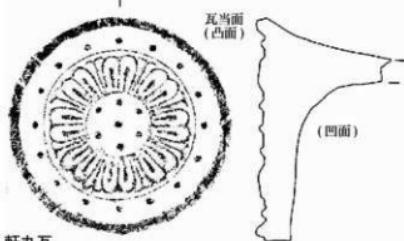
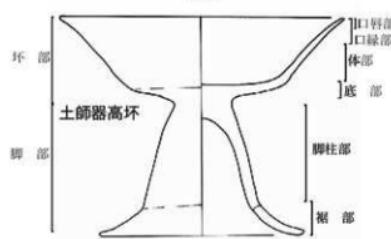
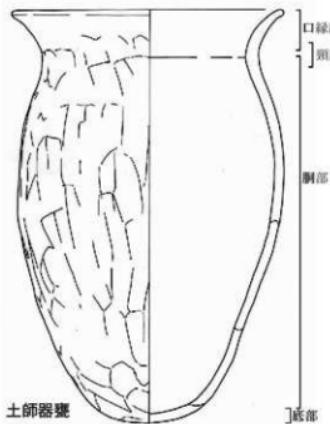
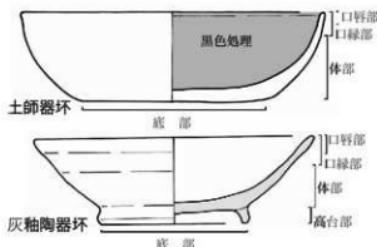
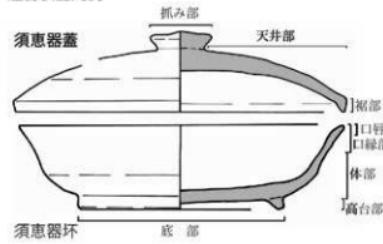
文化財保護係長

土屋俊彦(平成 18 年 9 月 30 日退任)、小林栄子(平成 18 年 10 月 1 日着任・平成 21 年 3 月 31 日退任)、尾見智志(平成 21 年 4 月 1 日着任)

文化財保護係

中沢徳士、尾見智志(平成 19 年 3 月 31 日退任)、小林伝(平成 18 年 3 月 6 日着任)、和根崎剛(平成 19 年 4 月 1 日着任)

遺物表記凡例



# 目 次

序

巻頭カラー図版

例言

凡例

目次

第一章 調査の経過	.....	1
第1節 調査に至る経過	.....	1
1 信濃国分寺・国分尼寺の歴史	.....	1
(1) 創建	.....	1
(2) 衰退と再興	.....	1
(3) 国分寺の現在	.....	2
2 研究史と保存運動	.....	2
(1) 信濃国分寺の研究史	.....	2
(2) 信濃国分寺跡保存に至る経過	.....	3
3 史跡指定と発掘調査の経過	.....	3
(1) 史跡指定と指定区域の拡大	.....	3
(2) 史跡公園化までの発掘調査	.....	4
4 環境整備事業	.....	4
(1) 事業の概要	.....	4
5 平成時代の信濃国分寺	.....	5
第2節 調査の方法	.....	6
1 遺跡名と略記号	.....	6
2 調査区の設定	.....	6
3 グリッドの設定	.....	6
4 遺構測量	.....	6
5 遺構の掘り上げ	.....	7
第3節 調査日誌	.....	8
第二章 遺跡の環境	.....	16
第1節 自然的環境	.....	16
1 上田の気候	.....	16
2 上田の地形と地質	.....	16
3 信濃国分寺跡周辺の地形と地質	.....	17

4	上田の植生	.....	18
第2節 歴史的環境			
1	先史～縄文時代	.....	18
2	弥生時代	.....	18
3	古墳時代	.....	19
4	律令期	.....	19
5	中世	.....	20
6	近世	.....	21
7	近代～現代	.....	22
第三章 調査の結果			
第1節 平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査			
1	調査の概要	.....	23
2	検出遺構	.....	25
3	出土遺物	.....	46
第2節 平成19年度尼寺南東域の調査			
1	調査の概要	.....	58
2	検出遺構	.....	59
3	出土遺物	.....	71
第3節 平成20年度尼寺南西域の調査			
1	調査の概要	.....	74
2	検出遺構	.....	76
3	出土遺物	.....	86
第4節 遺物観察表			
1	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物	.....	89
2	平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物	.....	92
3	平成20年度尼寺南西域の調査出土遺物	.....	96
第四章 考察			
第1節 僧寺西門跡の調査成果について			
第2節 西門西側の礎石建物跡について			
第3節 九九算の文字瓦について			
写真図版			
報告書抄録			

## 表 目 次

No	タイトル	頁
1	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(1)	89
2	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(2)	90
3	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(3)	91
4	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(4)	92
5	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(5)	93
6	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(6)	94
7	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(7)	95
8	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(8)	96
9	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(9)	97
10	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(10)	98
11	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(11)	99
12	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(12)	100
13	平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(13)	100
14	平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物(1)	101
15	平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物(2)	102
16	平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物(3)	103
17	平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物(4)	104
18	平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物(5)	104
19	平成20年度尼寺南西域の調査出土遺物(1)	105
20	平成20年度尼寺南西域の調査出土遺物(2)	106
21	平成20年度尼寺南西域の調査出土遺物(3)	107
22	平成20年度尼寺南西域の調査出土遺物(4)	107
23	平成20年度尼寺南西域の調査出土遺物(5)	108
24	長野県内の中世の主な小仏堂一覧	113

# 図版目次

No	タイトル	頁
1	史跡信濃国分寺跡調査履歴図	7
2	史跡信濃国分寺跡発掘調査メッシュ配置図	16
3	上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ	17
4	上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)	24
5	平成18年度調査区位置	25
6	平成18年度調査区実測図区割り図	26
7	平成18年度調査区実測図(1)	27
8	平成18年度調査区実測図(2)	28
9	平成18年度調査区実測図(3)	29
10	平成18年度調査区実測図(4)	30
11	平成18年度調査区実測図(5)	31
12	平成18年度調査区実測図(6)	32
13	平成18年度調査区実測図(7)	33
14	平成18年度調査区実測図(8)	34
15	平成18年度調査区実測図(9)	35
16	平成18年度調査区実測図(10)	36
17	平成18年度調査区実測図(11)	37
18	平成18年度調査区実測図(12)	38
19	平成18年度調査区実測図(13)	39
20	平成18年度調査区実測図(14)	40
21	平成18年度調査区実測図(15)	41
22	平成18年度調査区実測図(16)	42
23	平成18年度調査区実測図(17)	43
24	僧寺西門跡実測図	44
25	礎石建物跡実測図	45
26	礎石建物跡セクション実測図	46
27	SB-01出土遺物実測図	46
28	SD-01出土遺物実測図	46
29	SX-01出土遺物実測図	46
30	P出土遺物実測図	46
31	Po出土遺物実測図(1)	46
32	Po出土遺物実測図(2)	47
33	北調査区グリッド出土遺物実測図(1)	47
34	北調査区グリッド出土遺物実測図(2)	48
35	北調査区グリッド出土遺物実測図(3)	49
36	北調査区グリッド出土遺物実測図(4)	50
37	南調査区グリッド出土遺物実測図(1)	50
38	南調査区グリッド出土遺物実測図(2)	51
39	遺構外出土遺物実測図	51
40	SB-01出土瓦実測図	51
41	SD-01出土瓦実測図	52
42	P-22出土瓦実測図	52
43	北調査区出土瓦実測図(1)	52
44	北調査区出土瓦実測図(2)	53
45	北調査区出土瓦実測図(3)	54
46	北調査区出土瓦実測図(4)	55
47	南調査区出土瓦実測図	56
48	遺構外出土瓦実測図	56
49	石器・金属器実測図	57
50	平成19年度調査区位置図	58

No	タイトル	頁
51	平成19年度調査区実測図区割り図	59
52	平成19年度調査区実測図(1)	60
53	平成19年度調査区実測図(2)	61
54	平成19年度調査区実測図(3)	62
55	平成19年度調査区実測図(4)	63
56	平成19年度調査区実測図(5)	64
57	平成19年度調査区実測図(6)	65
58	平成19年度調査区実測図(7)	66
59	平成19年度調査区実測図(8)	67
60	平成19年度調査区実測図(9)	68
61	平成19年度調査区実測図(10)	69
62	平成19年度調査区実測図(11)	70
63	北調査区出土遺物実測図	71
64	南調査区出土遺物実測図(1)	71
65	南調査区出土遺物実測図(2)	72
66	遺構出土瓦実測図	72
67	北調査区出土瓦実測図	72
68	南調査区出土瓦実測図	73
69	南調査区出土土製品実測図	73
70	南調査区出土石器及び銅錢実測図	73
71	平成20年度調査区位置図	75
72	平成20年度調査区実測図区割り図	76
73	平成20年度調査区実測図(1)	77
74	平成20年度調査区実測図(2)	78
75	平成20年度調査区実測図(3)	79
76	平成20年度調査区実測図(4)	80
77	平成20年度調査区実測図(5)	81
78	平成20年度調査区実測図(6)	82
79	平成20年度調査区実測図(7)	83
80	平成20年度調査区実測図(8)	84
81	平成20年度調査区実測図(9)	85
82	出土遺物実測図(1)	86
83	出土遺物実測図(2)	87
84	出土瓦実測図(1)	87
85	出土瓦実測図(2)	88
86	出土土製品・石器実測図	88
87	出土銅錢実測図(S=1/1)	88
88	僧寺西門遺構図	109
89	僧寺西門跡西の礎石建物遺構図	110
90	千曲市五輪堂遺跡堂跡遺構図	111
91	大鹿村福德寺本堂実測図	111
92	長岡京市宝菩提院廃寺の湯屋遺構図	112
93	東大寺大湯屋実測図	112
94	僧寺西門跡付近出土九九算刻書平瓦	114

# 写真図版目次

No	タイトル	頁 巻頭
1	平成18年度調査区全景(写真上が北)	卷頭
2	平成18年度南調査区全景(写真上が北)	卷頭
3	平成18年度調査区(南から)	卷頭
4	平成18年度調査区全景(西から)	卷頭
5	平成18年度南調査区僧寺西門跡(真上から)	卷頭
6	平成18年度南調査区僧寺西門跡(西から)	卷頭
7	平成19年尼寺航空写真(写真上が北)	卷頭
8	平成19年調査区全景(写真上が北)	卷頭
9	平成19年度北調査区全景(写真上が北)	卷頭
10	平成19年度南調査区全景(写真上が東)	卷頭
11	平成19年度南調査区検出の石列(南東から)	卷頭
12	平成19年南調査区全景(南から)	卷頭
13	平成19年度南調査区全景(北から)	卷頭
14	平成20年度調査区全景(写真上が北)	卷頭
15	平成20年度西調査区全景(写真上が東)	卷頭
16	平成20年東調査区(写真上が北)	卷頭
17	平成20年西調査区微段丘石垣(南東から)	卷頭
18	平成20年度西調査区微段丘石垣西端(北西から)	卷頭
19	昭和40年代初頭の国分寺跡航空写真(東から・手前区画が僧寺、奥が尼寺)	卷頭
20	昭和42年度尼寺東側築地塀付近の写真(南東から)	卷頭
21	信濃國分寺跡寺域と推定東山道(写真上が北)	卷頭
22	史跡信濃國分寺跡航空写真(平成16年・写真上が北)	1
23	国分寺本堂(長野県宝)	2
24	国分寺三重塔(重文)	2
25	尼寺金堂東雨落溝(南東から)	4
26	6/19表土剥ぎ	8
27	6/30北調査区グリッド調査	8
28	7/7南調査区遺構検出	9
29	7/28北調査区グリッド調査	9
30	8/3南調査区築地塀ラインのグリッド調査	9
31	8/24北調査区礎石建物跡内集石が出始める	9
32	8/25北調査区礎石建物跡内集石が出始める	10
33	9/11北調査区礎石建物跡内集石検出	10
34	9/27北調査区礎石建物跡内集石検出	10
35	10/3南調査区保護砂埋め戻し	10
36	北調査区透水シート養生	11
37	10/17北調査区表土剥ぎ	11
38	10/24北調査区遺構検出	11
39	11/14南調査区石列検出状況	11
40	11/26北調査区作業状況	12
41	H19作業員記念写真	12
42	H20, 10, 8支障木伐採	12
43	H20, 10, 10表土剥ぎ	12
44	H20, 10, 16西調査区遺構検出	13
45	H20, 10, 22西調査区遺構検出作業	13
46	H20, 11, 10西調査区遺構検出作業	13
47	H20, 11, 12東調査区トレングリフ掘り上げ作業	13
48	H20, 11, 17西調査区遺構検出作業	14
49	H20, 11, 27西調査区礎敷き遺構検出	14
50	H20, 12, 3西調査区礎敷き遺構検出	14
51	H20, 12, 8西調査区石垣・版築箇所	14
52	H20, 12, 19透水シート上に排水埋め戻し	15
53	H20, 12, 15遺構実測作業	15
54	H20, 12, 16保護砂埋め戻し	15
55	常入遺跡群下町田遺跡航空写真	18
56	生島足島神社	19
57	中瀬寺薬師堂(最勝光院領塩田莊の中心的施設か)	20
58	国宝安楽寺八角三重塔	20
59	史跡上田城跡櫓門及び南北櫓	21
60	北国街道柳町の町並み	21
61	明治29年開業大屋駅舎	22
62	平成18年度調査区全景(写真上が北)	115
63	平成18年度南調査区全景(写真上が北)	115
64	平成18年度調査区(南から)	116
65	平成18年度調査区全景(西から)	116

No	タイトル	頁
66	平成18年度南調査区僧寺西門跡(真上から)	117
67	平成18年度南調査区僧寺西門跡(西から)	117
68	平成18年度南調査区僧寺西門祭祀跡(東から)	118
69	平成18年度南調査区僧寺西門祭祀跡(南から)	118
70	平成18年度南調査区僧寺西門跡北東控柱セクション(北から)	119
71	平成18年度南調査区僧寺西門跡南東控柱セクション(北から)	119
72	平成18年度南調査区礎石建物跡(西から)	120
73	平成18年度南調査区礎石建物跡(東から)	120
74	平成18年度南調査区礎石建物跡(南から)	121
75	平成18年度南調査区礎石建物跡東側凸部(写真上が東から)	121
76	平成18年度南調査区礎石建物跡東側凸部(西から)	122
77	平成18年度南調査区礎石建物跡東側凸部(南から)	122
78	平成18年度南調査区礎石建物跡西側火焔(東から)	123
79	平成18年度南調査区礎石建物跡西側火焔(西から)	123
80	平成18年度南調査区礎石建物跡西側火焔(南から)	124
81	平成18年度南調査区礎石建物跡西側火焔(北から)	124
82	平成18年度南調査区從前築地跡想定ライン(南から・造成土下に西下がりの硬化面)	125
83	平成18年度南調査区從前築地跡想定ライン(南から・造成土下に西下がりの硬化面)	125
84	平成18年度南調査区西門跡表土剥直後(北から・ライフライン布設跡周辺から硬化面が検出される)	126
85	平成18年度南調査区西門跡硬化面(北から・ライフライン布設跡周辺から硬化面が検出される)	126
86	平成18年度南調査区尼寺築地跡想定ライン(東から・画面奥に明黄褐色の客土)	127
87	平成18年度南調査区尼寺築地跡想定ライン(南から・画面奥に明黄褐色の客土)	127
88	平成18年度南調査区尼寺築地跡想定ライン(西から・明黄褐色の客土断ち割り)	128
89	平成18年度南調査区尼寺築地跡想定ライン(東から・明黄褐色の客土断ち割り)	128
90	平成18年度南調査区溝跡検出状況(南から・平安期の住居址にきられている)	129
91	平成18年度南調査区溝跡セクション(北から)	129
92	平成19年度尼寺空窓写真(写真上が北)	130
93	平成19年度調査区全景(写真上が北)	131
94	平成19年度北調査区全景(写真上が北)	131
95	平成19年度南調査区全景(写真上が東)	132
96	平成19年度南調査区検出の石列(南東から)	132
97	平成19年度調査区全景(南から)	133
98	平成19年度調査区全景(北から)	133
99	平成19年度南調査区石列検出状況(東から)	134
100	平成19年度南調査区石列検出状況(西から)	134
101	平成19年度南調査区石列トレンチ掘削状況(南から)	135
102	平成19年度南調査区石列トレンチ掘削状況(北から)	135
103	平成19年度北調査区湿地状構造検出状況(北から・中央の石列は暗渠排水)	136
104	平成19年度北調査区中門東回廊想定部検出状況(東から)	136
105	平成20年度調査区全景(写真上が北)	137
106	平成20年度西調査区全景(写真上が西)	138
107	平成20年度東調査区(写真上が北)	138
108	平成20年度西調査区微段丘石垣(南東から)	139
109	平成20年度西調査区微段丘石垣西端(北西から)	139
110	平成20年度東調査区Tr-01(南西から)	140
111	平成20年度東調査区Tr-01(北東から)	140
112	平成20年度西調査区着手前(南から・石垣が微段丘のライン)	141
113	平成20年度西調査区表土剥ぎ後(南から・石垣の下部が残る)	141
114	平成20年度西調査区石垣下部(東から)	142
115	平成20年度西調査区石垣下部(南西から)	142
116	平成20年度西調査区右垣裏の状況(北西から)	143
117	平成20年度西調査区Tr-03セクション(東から)	143
118	平成20年度西調査区北西部集石(南西から)	144
119	平成20年度西調査区北西部集石(北西から)	144
120	平成20年度西調査区北西部集石(北東から)	145
121	平成20年度西調査区北西部集石部分除去(北西から)	145
122	平成20年度西調査区井戸跡(北から)	146
123	平成20年度西調査区竪穴住居跡_P-05, P-06(北西から)	146
124	史跡信濃国分寺跡出土土器写真(1)	147
125	史跡信濃国分寺跡出土土器写真(2)	148
126	史跡信濃国分寺跡出土土器写真(3)	149
127	史跡信濃国分寺跡出土土器写真(1)	150
128	史跡信濃国分寺跡出土土器写真(2)	151
129	史跡信濃国分寺跡出土土器写真(3)	152



# 第一章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

### 1 信濃国分寺・国分尼寺の歴史

#### (1) 創建

天平 13 年（741）聖武天皇により国分寺建立の詔が下され、地方ごとに官立寺院を置いた隋や唐の制度に倣ったとみられる僧寺、尼寺の建立が全国に命じられた。仏法の守護による国家安泰を祈願して、各国に金字の金光明最勝王経一部を安置した七重塔 1 基を造り、僧寺を「金光明四天王護國之寺」、尼寺を「法華滅罪之寺」とすることなどを命じている。国分寺の僧寺には僧侶 20 人が置かれ、封戸 50 戸と水田 10 町が支給された。また、尼寺には 10 人の尼が置かれ、水田 10 町を支給された。僧や尼は毎月 8 日に最勝王経を転読することなど、定められた規則に従って生活することが義務づけられていた。

天平 19 年（747）には郡司の協力を命じ、墾田を追加寄進するなど、国分寺の造営を督勤する詔が発されている。このことは逆に、各地の国分寺造営が期待したようにはかどらなかつたことを示している。天平勝宝 4 年（752）に總国分寺である東大寺の大仏開眼供養が執り行われ、總国分尼寺の法華寺も建立されたが、天平勝宝 8 年（756）に聖武天皇が死去するまでに完成した国分寺はわずかであったとみられる。天平宝字 3 年（759）になっても国分寺造営を督促する記事が「統日本紀」にみられるが、770 年前後に至ってようやく大半の国の国分寺が完成したと考えられている。

信濃国分寺がいつ完成したのかを伝える史料は残されておらず、建立に関わる詳細や、その後の活動についてもほとんどわかっていない。所在についても現国分寺の近くが有力視されていたものの、ながらく明確にはならないままであった。

#### (2) 衰退と再興

律令制度が崩壊すると諸国の国分寺も次第に衰退に向かう。信濃国分寺でも、尼寺跡近傍で発掘された 10 世紀後半頃の堅穴住居跡に国分寺の平瓦が用いられており、このころには国分寺の建物の一部が失われていたことを示すものと思われる。一方、「將門記」には、「以二月廿九日追着於信濃



PL.22 史跡信濃国分寺跡航空写真（平成 16 年・写真上が北）

国少懸郡国分寺之辺 便帶千阿川彼此合戦間無有勝負」という記事があり、承平8年（938）に平将門と平貞盛の軍勢が信濃國分寺周辺で戦ったという。さらに信濃國分寺の寺伝ではその兵火のため伽藍を焼失したというが、この記事は「將門記」などの史料には見えず、発掘調査でも確認されていない。いずれにせよ、当時には寺院の衰退が進んでいたことを物語っているものと考えられる。

11世紀に関しては、堅穴住居における国分寺瓦の用例や、僧寺回廊跡での墓地としての利用を示す骨壺の出土など、国分寺の衰亡を示唆する発見もさらに多くなる。

一方、信濃國分寺の寺伝では建久8年（1197）に源頼朝が善光寺参詣の帰途、衰退した国分寺の再興を命じ、堂塔を修復したと伝える。現在の国分寺境内は、古代の伽藍中心から北に300mほど離れた一段高い段丘上にあり、本堂の薬師堂付近からは平安時代の瓦が発見されている。また、現存する室町時代建立の三重塔も寺伝では源頼朝が発願して建立したとされており、平安末から鎌倉時代の初期にかけての時期に信濃國分寺が現在地に移転・再興された可能性が高い。

### ③ 国分寺の現在

現在の信濃國分寺は天台宗に属する。薬師如来を安置する本堂、あるいは寺全体を八日堂とも呼ばれるが、これは毎月8日の最勝王經転読という天平創建以来の伝統によるもので、このように法灯が受け継がれていることは歴史的文化的にもきわめて価値が高い。

国分寺の檀家は上堀・下堀・国分・山口・岩門地区がほとんどで、戦前は80軒ほどだったが、戦後はかなり増加している。また、他寺の檀家ながら信徒に含まれる人々が50軒ほどある。正月の修正会では元旦から8日まで金光明経や薬師経の転読が行われたが、現在は元旦から3日までとなっている。

国分寺で行われる行事としては、施餓鬼会、灌仏会、大般若経会などがあるが、八日堂縁日が何といっても有名である。1月7日の宵祭りから8日にかけて蘇民将来符の領布のほか、福だるま市も開かれ、県内だけでなく関東地方から多くの参詣者でにぎわう。蘇民将来符については、寺に加えて伝統を守る蘇民講の存在が大きく、これに関する習俗は国の無形民俗文化財に選択されている。また蘇民将来符そのものは市の有形民俗文化財に指定されている。国分寺ではこのほか大黒堂の縁日もあり、現在では3月8日に行われている。

境内には本堂（長野県宝・万延元年（1860））、三重塔（国重要文化財・室町時代）、石造多宝塔（市指定・鎌倉時代）などの指定文化財や、鐘楼、客殿などの堂宇が建ち並んでいる。



PL.23 国分寺本堂（長野県宝）



PL.24 国分寺三重塔（重文）

## 2 研究史と保存運動

### ① 信濃國分寺の研究史

史跡信濃国分寺跡の所在地は、上田市大字国分字仁王堂と字明神前にわたっている。現在の国分寺と同じ北側の段丘上に古代の伽藍地もあったと考えるのがかつては一般的だったが、大正11年（1922）刊行の「小県郡誌」で著者的小山真夫氏が「仁王堂跡」という場所に残る礎石群に着目し、この付近に古代国分寺伽藍があったとの推定をはじめ明らかにした。そこに参考として掲載された重田定一氏の調査記録（大正3年）によれば、多数の礎石が残るこの場所を金堂跡ではないかと考察している。

このような研究調査の成果により、昭和5年（1930）には小字仁王堂の礎石群を中心とする4178mが文部省指定史跡となった。

昭和6年（1931）には、藤沢直枝氏による「信濃国分寺之研究」が刊行された。同氏は現地の精密な実測や調査を踏まえて、1、「仁王門跡」は金堂跡と推定されること、2、この北方に講堂跡と想定される場所があること、3、南方の鉄道通過地点に中門跡と考えられる場所があること、4、金堂跡の南西方100mに塔跡とみられる場所があり、南東方にも同様の場所があって東西2塔の可能性があること、などを推定している。

なお、小山氏も藤沢氏も尼寺については丸子町内の古瓦出土地に比定していた。しかしその後、昭和19年（1944）に国分地区に保存されていた古文書の調査が行われた結果、江戸時代初期の土地台帳に「にぢ之だう」の地名がみられることなどがわかった。このため地元では僧寺跡の西方に尼寺跡が存在すると推定する見方が有力となっていた。

## （2）信濃国分寺跡保存に至る経緯

信濃国分寺跡が所在する大字国分はかつて小県郡神川村に属していたが、昭和31年（1956）9月に神川村が上田市に合併したため、上田市の一部となった。昭和30年代も中頃になると、国道18号線に沿ったこの地域にも開発の波が及んで、工場や住宅建設の兆しが現れてきた。貴重な遺構が破壊されるのを防ぐため、早急に本格的な学術調査を実施して、地中の国分寺遺構の実態を解明する必要が生じた。上田市では僧寺跡と推定されていた2町四方を中心とする範囲の実測図を作成するとともに、国や県に対して学術調査の働きかけを行った。このような運動の結果、昭和37年（1962）には文化庁補助による調査が予算化されて調査会も発足し、翌38年（1963）3月より信濃国分寺の第1次緊急発掘調査がようやく実施の運びとなった。

その一方で、地権者をはじめとする地元住民からは反発の声が上がり、ついには信濃国分寺跡緊急発掘および史跡指定反対同盟会を設立するに至った。しかし、その後の折衝もさることながら調査が進展して大きな成果を収めるにつれ、文化財の重要性に対する住民の意識も急速に醸成されていった。八日堂復興会等では遺跡の総合的保存を求める声も高まり、金堂跡を国分寺の法人所有地として買取るなどの動きとなって現れてきた。そして、昭和41年度（1966）には市の教育文化都市建設新5ヶ年計画の中で史跡公園の整備を目指すこととなった。

## 3 史跡指定と発掘調査の経過

### （1）史跡指定と指定区域の拡大

上述のように、信濃国分寺跡の史跡指定は昭和5年（1930）に行われたが、これは土地の高まりや大きな礎石群などが存在する字仁王堂の一帯を僧寺跡と想定した結果であった。一方、当時は尼寺跡の所在については諸説あっていずれも決め手に欠け、のちの発掘調査を待たねばならなかつた。

昭和38年3月からの第1次調査を皮切りに、昭和41、42年と調査が続行され、さらに昭和46年に至るまで数次にわたる史跡整備に伴う発掘調査が並行して行われ、僧寺・尼寺の伽藍の全容と、これに伴う多くの資料を検出することができた。このため、昭和43年（1968）3月には現国分寺を含む寺

域のほぼ全域、129,339.7 m<sup>2</sup>に史跡指定区域が拡大された。その範囲は、北は現国分寺、東は国分神社、南は当時の推定東山道、西は下堀の権川神社までである。なお、この時点で史跡の指定理由も「僧寺跡と尼寺跡の伽藍が近接して発見され、しかも両遺構の保存状態が比較的良好であり、古代の寺院跡研究に欠くことのできない重要な遺跡」とされた。

## (2) 史跡公園化までの発掘調査

昭和30～40年代に実施された発掘調査の経過は以下の通りである。

第一次発掘調査：昭和5年の指定時には金堂跡と推定されていた土壇を調査した結果、これは僧寺講堂跡の基壇であることが解明された。その南方には金堂跡の基壇も発見され、いずれも雨落溝に見事な敷石列があることが確認された。軒丸瓦、軒平瓦や全国的にも珍しい素文の鬼瓦を含む大量の瓦をはじめ、鉄釘や須恵器、土師器なども発見された。

第二次発掘調査：僧寺跡の伽藍地が確認された。また、この西方の宇明神前において尼寺跡が確認された。これは地元に伝わる古文書の記載を実証するために実施した調査の結果で、尼寺金堂跡の雨落溝も三方で確認された。さらには、多量の瓦類・鉄釘・古銭や円面鏡なども発見され、大きな成果をあげた。

第三次発掘調査：中門と講堂跡を結ぶ僧寺の回廊跡が発見された。また、信濃国分寺の補修用の瓦を焼いた瓦窯跡が尼寺跡の北方で2基発見された。一方、尼寺跡では金堂跡の再確認と講堂跡の調査が行われた。さらに尼寺東門跡や四至の調査も行われた。

昭和43年(1968)から46年(1971)までの調査は史跡保存環境整備の事前調査として実施された。範囲確認はほぼ完了していたため、過去3回の発掘調査で確認できなかった各遺構の内部調査と未調査の建物の検出が中心となった。

第四次発掘調査：僧寺講堂の内部と北側雨落溝の確認などが行われ、講堂跡の解明がなされた。

第五次発掘調査：尼寺跡において、金堂跡の内部や講堂跡、中門跡、回廊跡、尼坊跡、北門跡などの詳細調査が実施された。

第六次発掘調査：僧寺金堂跡内部の規模が明らかになったほか、塔跡、僧坊跡が確認された。

第七次発掘調査：僧寺中門跡と回廊跡、金堂南西角の雨落溝のほか、尼寺跡の尼坊、経蔵などの遺構を確認した。

## 4 環境整備事業

### (1) 事業の概要

上田市では、一連の発掘調査で確認した寺域のうち約55000 m<sup>2</sup>を公有化し、昭和43年から47年(1968～72)にかけて整備を行った上で、一帯を史跡公園として公開した。これは全国の国分寺史跡でも初めての事例であった。また、昭和55年(1980)には信濃国分寺資料館を開館し、国分寺跡を中心とする考古資料を収蔵展示している。以下では、この史跡保存環境整備事業の概要を述べる。

対象となる土地が広大な面積にわたることから、史跡指定範囲の全てを文化庁補助事業で買い上げ、



PL.25 尼寺金堂東雨落溝 (南東から)

整備することは困難であったため、事業地は僧寺と尼寺の寺域にかかる範囲に限定された。そこで、残る周辺の史跡公園予定地については都市計画公園用地として決定し、建設省（当時）の補助事業として実施することとなった。用地買収、整備事業ともに文化庁と建設省とで計画地が線引きされており、各々の国庫補助を得ながら上田市が実施するという形がとられた。

このように事業は史跡整備としての部分と一般都市公園としての部分からなるが、両者を一体の史跡公園として利用公開することがもとより前提であった。都市計画決定に基づく事業認定の性格は史跡保存を中心とする公園整備という趣旨であったため、建設省の補助事業の内容についても文化庁の認定する基本設計に基づいて補助するよう、省庁間の調整が図られた。

設計ではまず、地下遺構の保護を万全にすることを第一に、僧寺と尼寺の両寺域にかかる範囲は他の平地より区分し高くすること、各伽藍地は遺構埋戻しの上で基壇を盛土によって復元整備し、これらの整備遺構を歩きながら回遊見学できるようにすること、これ以外の公園用地には駐車場・便所・広場・休憩所等の便益施設を配置できることなどが基本方針として決定された。

敷地は東南から北西に平行して走る国鉄信越本線（当時）と国道18号線とによって分断されている。両者の間は水田、鉄道線路より南は畑と桑園に利用されていた。国鉄に平行して旧上田丸子電鉄の廃線跡と廃駅が残り、この東方には南北に敷地を縦断する市道があったが、後者については整備計画の中で路線変更された。敷地境界の南と西側は村落と新興宅地に取り囲まれ、僧寺・尼寺ともに伽藍の南端はそれらの民地に入り込んでいた。

公園敷地は、1、埋蔵物保存を第一に考慮しながらその中で歴史的イメージを作り出す区域（僧寺遺構、尼寺遺構、瓦窯跡）と、2、史跡見学者その他市民の休息利用にあてる区域、の2地区に区分される。僧寺と尼寺の各寺域については全面に盛土を行い、周囲より高くすることで範囲の明示と地下遺構保護が図られた。

## 5 平成時代の信濃国分寺

信濃国分寺伽藍跡の中心部分 55,275.45 m<sup>2</sup>は、昭和45年の史跡公園整備事業により公有化と公園整備が実施され、昭和55年には信濃国分寺資料館が開館し、一定の整備ははかられた。しかし、僧寺南大門想定地から中門跡にかけての僧寺跡エントランス部分が住宅地となっていたほか、国道18号線北東の僧寺北東域や尼寺の南東域など、伽藍跡の大きな範囲が民有地であり住宅地となっていた。

その後、経済成長とともに史跡指定地及びその周辺における各種の開発事業や住宅の建て替えなどが盛んとなり、信濃国分寺跡の保存計画について再検討が必要とされてきた。

平成に入ると再び開発の波が押し寄せ、史跡の保護に影響する事態が危惧された。このため、平成元年から文化庁・県教委の補助を受けて史跡の計画的公有化を開始し、これまでに 19,249.78 m<sup>2</sup>を追加購入、公有化面積は 74,525.23 m<sup>2</sup>となっている。現行の公有化計画総面積は 80,762 m<sup>2</sup>で、残る 6,236.27 m<sup>2</sup>を順次公有化の予定である。公有化計画地のうち、国道18号線より北側については平成5年度までに公有化が完了しており、残る未買収地の大半はしなの鉄道より南側の僧寺跡および尼寺跡の南辺付近に位置している。

上田市教育委員会事務局では、昭和60年代に計画された僧寺北東域約 10,000 m<sup>2</sup>の自動車展示場建設計画を機に、保存管理と公有化計画の再検討に着手した。平成3年には文化庁・長野県教育委員会事務局と協議のうえ、保存管理の指針となるゾーニングを作成し、住民説明会も実施して、以降の保存管理と公有化の指針としてきた。

史跡公園用地の一定の公有化の進捗と、史跡公園も開園から30余年を数え、史跡の保存活用に対する考え方やそれを取り巻く社会状況も大きく変化してきている中で、信濃国分寺跡についても改めてその意義と現状を把握・分析するとともに、今後に向けてのあり方を検討すべき時期に来ていることも事実であった。特に課題となる点を列挙すれば、

- ・史跡保存管理に関する全体計画の不在
- ・公有化進展とともに計画的調査・整備推進の必要性
- ・旧整備範囲の老朽化とともに更新整備の必要性
- ・最新の調査研究成果、保存整備活用における新しい考え方の反映
- ・住民参加とまちづくりの視点の導入

などである。

上田市では、信濃国分寺史跡の保全を万全を図るとともに、郷土の歴史文化拠点として活かしていくことを目指し、再整備を含む史跡地全体の保存整備活用に関する指針＝基本計画を策定した。

今回の発掘調査は、今後の整備に向けて、その基礎的な資料を収集することを目的として実施したものである。

## 第二節 調査の方法

### 1. 遺跡名と略記号

調査では、遺跡の略号として「国分僧寺」「国分尼寺」と付した。また、昭和の過去の調査では、国家座標にもとづく調査区域の設定がなかったため、今回新たに史跡指定地内を別紙のとおりのメッシュによって位置を設定し、各種の記録や遺物の注記等に用いた。

### 2. 調査区の設定

調査区域は、僧寺の西域における区画施設(築地塀等)の確認と未知の遺構の確認、及び尼寺南東並びに尼寺南西の区画施設の確認を目的として調査区域を設定した。

### 3. グリッドの設定

調査においては、国家座標に則ったメッシュを切り、1単位の大きさが45×45mの大グリッドを設定し、その中に縦横各15分割した3×3mの小グリッドを設定した。大メッシュ交点には記号を与え、座標値X=43,200.00、Y=-18,651.00をA01a01として、北から南方向にA、B、C、D…、東から西方向に01、02、03、04…という順に進むものとした。また、小メッシュにも北から南方向にa、b、c、d…、東から西方向に01、02、03、04…という記号を与え、大メッシュ・小メッシュの組み合わせでグリッドを設定した。例えば、基準点から南に180m、東に210mの地点はE05a11と表される。各種の現地平面測量には、このメッシュ番号が用いられている。また、グリッド番号は、北東の交点のメッシュ番号を用い、遺物の取り上げに用いた。

### 4. 遺構測量

遺構の平面測量は、前述のメッシュを基準に1/20縮尺で行った。また、現地調査終了時には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量も行っている。断面図や土層図は手取りによるものである。

### 5. 遺構の掘り上げ

現地調査における表土の除去は、主に重機によって行い、その後遺構検出作業、遺構掘り上げ作業はすべて人力で行った。



第2図 史跡信濃国分寺跡発掘調査メッシュ配図

### 第3節 調査日誌

#### 概要

本調査は、史跡信濃国分寺跡保存整備基本計画に基づき、史跡整備と並行して、史跡の構造、特に僧寺・尼寺の四至を把握するために平成14年度から実施している発掘調査である。

その第一期とも言うべき平成14年度から16年度まで実施した発掘調査については、平成17年度に『史跡信濃国分寺跡 平成14(2002)年度～平成17(2005)年度記念物保存修理事業に伴う史跡信濃国分寺跡僧寺北東域及び僧寺南大門推定地発掘調査報告書』として報告している。

この調査は、主に僧寺の北・東・南の区画施設の確認を主眼として実施したものであったが、北と東の区画施設については、まったく確認できなかった。ただ、南の区画については、従前から想定されていた箇所に南大門の遺構が確認され、僧寺南限について大きな指標を得ることが出来た。ただやはり、この南大門につながる区画施設は確認できなかった。

今回は、第二期として平成18年度から20年度まで実施した発掘調査について報告するものである。調査は、18年度には僧寺西築地堀想定ラインと尼寺東築地堀想定ラインにまたがる範囲を調査した。その結果、僧寺西門の遺構を確認できたほか、尼寺東築地堀とその外側の溝ではないかと思われる遺構が確認された。特に、僧寺西門の確認は、従前の僧寺区画の平面形について見直しを迫る結果となった。19年度には尼寺南東域において尼寺南築地堀想定ラインを調査し、尼寺の区画も従前の方形の想定とは異なり、千曲川の微段丘に沿った地形なりのものではないか、と推測される石列を検出し、20年度にはその延長線上の尼寺南西城の調査を実施したものである。

#### 平成18年度



PL.26 6/19 表土剥ぎ

6/15 僧寺金堂真西地域の区画施設確認のための現地調査に着手。重機による表土剥ぎを始める。

6/19 僧寺築地堀跡表示のドウダンツツジを移植する。

6/20 作業員を入れて僧寺築地堀想定ライン東側の歩道石板を外し、歩道下を掘り出す。重機は、北調査区の表土剥ぎを続ける。

6/26 北調査区遺構検出作業。公有化前に建っていた住宅関係の攢乱が多い。

6/27 北調査区遺構検出作業。歩道下から電車の枕木を組んだ水槽跡が検出される。旧上田丸子電鉄八日堂駅に関連したものと思われる。

6/28 北調査区遺構検出作業、グリッド掘り。想定されていた僧寺・尼寺間を南北に通過する道路遺構は確認されない。

6/29 北調査区遺構検出作業、グリッド掘り。南調査区の重機による表土剥ぎを開始する。

7/5 降雨により、作業棟内で出土遺物の洗浄を



PL.27 6/30 北調査区グリッド調査

行う。南調査区の重機による表土剥ぎ。排土置き場がなくなったため、ダンプカーで近在の公有地へ排土を搬出する。

7/7 南調査区の遺構検出作業に着手。北調査区拡張のため重機による表土剥ぎを行う。

7/10 調査区周りと排土置き場の雑草や転がり出した石の除去を、公園管理事務所作業員に実施してもらう。

7/27 南調査区グリッド掘り、土層実測。南調査区グリッド掘りは、僧寺築地塀想定ライン上を重点に行なうが、包含層が厚く、遺構面に達しない。北調査区北端にサブトレンチを入れたところ、幅2m程度の落込みが検出される。

7/28 北調査区のU字溝西側6mの範囲は、堅く叩きまとめたような面が掘がっている。

7/31 歩道下から、公園にも示されていた水路跡の石垣が検出される。

8/2 南調査区北端のグリッドでは、ようやく地山が検出される。ただ、古墳時代の小型丸底土器が出土し、古墳時代の溝跡のようである。

8/8 北調査区東端の堅緻面南端にサブトレンチを入れる。堅緻面下にピット検出。北側のサブトレンチの落込みを掘りあげると、古墳時代後期の遺物が出土し、堅緻な床面も検出される。住居址だったようである。

8/10 北調査区の尼寺築地塀想定ライン上の集石に東西方向のサブトレンチを入れる。石は拳大のものが主体で一層だけ。その下は黒色の沖積層となっている。軟弱な沖積層の上に築地塀を築くために礫を敷いた地業の痕跡か。

8/23 北調査区東端の堅緻面のサブトレンチで、石組み状の遺構が確認されたため、トレンチを延長すると、人頭大の川原の平石が集中して検出される。

8/24 北調査区では、石組み遺構を追求すると、石組み遺構の箇所で堅緻面が切れていることが判明する。また、尼寺築地塀想定ライン上の集石遺構を明らかにするため、グリッド単位で覆土を除去する。



PL.28 7/7 南調査区遺構検出



PL.29 7/28 北調査区グリッド調査



PL.30 8/3 南調査区築地塀ラインのグリッド調査



PL.31 8/24 北調査区礎石建物跡内集石が出来始める



PL.32 8/25 北調査区礎石建物跡内集石が始める



PL.33 9/11 北調査区礎石建物跡内集石検出



PL.34 9/27 北調査区礎石建物跡内集石検出



PL.35 10/3 南調査区保護砂埋め戻し

8/25 北調査区東端の石組み遺構はいよいよ拡がり、幅0.7mの出入口状の遺構も検出される。位置的には僧寺西築地壠想定ラインの中央、金堂跡の真西に位置している。

8/31 北調査区石組み遺構の追求を続ける。南北方向に確認された石列は、長さ6~7mで両端が西に折れている。西門に関わる施設か。

9/1 石組み遺構とその東の堅縫面がある段とは別遺構であると判断される。堅縫面は西門跡の基壇と思われる。

9/4 排土置き場がいっぱいになったため、ダンプで運び出しを行う。南調査区は僧寺築地壠想定ライン上のグリッドで築地壠の痕跡を追求、南調査区は石組み遺構の追求と、西門跡基壇の追い出しを引き続き行う。

9/4 北調査区の石組み遺構の追求に集中する。また、僧寺と尼寺の間に想定される道路遺構は北調査区北端のサブレンチでは確認できなかつた。

9/20 北調査区石組み遺構の検出を継続するとともに、北調査区のセクションや石の出土状況の実測を行う。石組み遺構は、 $6.8m \times 6.7m$ の規模の方形を呈し、その四隅には礎石が三箇所、礎石痕が一箇所確認され、宝形造りの建物が想定される。石組み遺構・石列内の土層観察ベルトをすべて外し、石列内の精査を行う。

9/21 奈良文化財研究所の山中敏史遺跡整備研究室長(当時)と、東京大学大学院の佐藤信教授(いずれも史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員)に現地指導を受ける。

9/30 現地説明会

10/3 保護砂による埋め戻し・透水シート保護をして遺構の埋め戻しをはじめる

10/23 埋め戻し終了。本日で18年度の現地調査をすべて終了。

以降、出土遺物の洗浄・注記・接合・図化、測量図面の整理等を行う。

## 平成19年度

10/16 0.4 バックホーにより、尼寺中門東の回廊延長線上から表土を剥ぎ始める

10/19 重機による表土剥ぎ。排土は僧寺南西の公有地に運ぶ。

10/23 本日から作業員を現場に入れて遺構検出にかかる。

10/29 国家座標準拠のメッシュにあわせて調査区域の調整を行うため、重機による表土剥ぎを改めて行う。あわせて遺構検出作業を行う。

10/30 遺構検出作業。測量業者のメッシュ杭打

11/1 遺構検出作業。南調査区のトレーニチに拳大の礫が並んで検出され、その北側が叩き締められている。このグリッドを平面的に拡げて確認する。

11/5 遺構検出作業。南調査区南端のグリッドからは、斜めに礫が並び、その北側全面が叩き締めらる遺構が検出される。この叩き締めた層がどこまで拡がるか、ひとつ北側のグリッドを拡げて確認する。

11/9 南調査区の礫列と硬化面の広がりを把握するため、2 グリッド分調査区を拡げることとし、重機による表土剥ぎを行うとともに、遺構検出作業を行う。北調査区では、北側に回廊跡が想定されているが、礫の集中以外、特に回廊跡と断定できるだけの遺構は確認されない。また、回廊に葺かれていたはずの瓦の出土もほとんどない。

11/15 遺構検出作業。南調査区の礫列はさらに西に延びている。この礫列の向きは、ほぼ微段丘の地形と一致しており、西の延長線上には尼寺南大門が想定されている。この礫列が尼寺の区画施設で、従前の方形の築地壝による区画ではなく、地形なりの区画施設であった可能性も想定される。

11/21 遺構検出作業。北側調査区の回廊推定ライン上のグリッドで、ほとんど回廊跡の痕跡が確認されないため、もう 5 cm ほど土を落としてみることとする。



PL.36 10/3 北調査区透水シート養生



PL.37 10/17 北調査区表土剥ぎ



PL.38 10/24 北調査区遺構検出



PL.39 11/14 南調査区石列検出状況



PL.40 11/26 北調査区作業状況



PL.41 H19 作業員記念写真



PL.42 10/8 支障木伐採



PL.43 10/10 表土剥ぎ

11/22 南調査区の硬化面の広がりを確認するため、調査区を拡張する。バックホーで表土をはねた後、遺構検出作業を行う。北調査区では、櫻乱の除去を行う。北側調査区の東側は、礫とともに砂質土が拡がる。

11/29 北調査区の尼寺中門から東に延びるはずの回廊の推定ラインには、相変わらず明確なプランが確認できない。いくつかの集石が栗石かとも思われる一方、出土すべきはずの回廊に葺いた瓦の出土がほとんどない点が不審である。

12/17 明日の空撮に備えて、遺構検出作業の仕上げと同時にセクション・断面を中心に遺構の実測を行う。

12/18 遺構の空撮・空洞を行い、あわせてセクション等の実測を行う。空撮後、埋め戻し保護砂を検出面に敷く作業を始める。

12/20 遺構保護砂敷き詰めが終了し、その上に保護用のPPシートを全面に被せる。さらに、表土の埋め戻しを借り上げ重機・ダンプによって行う。

12/21 表土の埋め戻しを、借り上げ重機・ダンプによって行う一方、機材の撤収を行い、作業員の作業は終了する。

12/28 埋め戻し終了。整地作業を行い、すべての現場作業を終了。

以降、出土遺物の洗浄・注記・接合・図化、測量図面の整理等を行う。

#### 平成20年度

9/29 公園内の重機やダンプの通る通路に養生の鉄板を敷き、排土を置くスペースの支障となる樹木の枝を伐採するとともに、重機による表土剥ぎに着手する。

9/30 調査区の直上で、航空写真撮影に支障となる樹木の枝を刈り払う。重機による表土剥ぎ。

10/3 東調査区の北で、調査に支障となる松を伐採する。また、東調査区西側に長らく積み上げられ、放置されていた礫が調査の支障となる

ため、重機による搬出を行う。

10/6 本日から現場作業員を投入する予定であったが、明け方の雨のため現場作業は断念し、作業員2名により、午前中だけ一輪車等機材の整備をする。また、3日に伐採した樹木のこなしを行う。

10/7 本日から作業員全員がそろって作業に着手。朝一番で資料館から機材を搬入し、西調査区の遺構検出にかかる。また、東調査区の西側の樹木が支障となるため、伐採しこなすとともに、重機による表土剥ぎを行う。

10/10 西調査区の遺構検出と東調査区の重機による表土剥ぎを行う。西調査区は、ゴミ投棄による攪乱が著しい。

10/16 遺構検出作業と攪乱除去作業。昨年の調査で尼寺南側の区画施設ではないかと想定された西調査区の推定ライン上の石垣下の攪乱を除いたところ、版築状の土層が現れる。また、東調査区の推定ライン上にも叩き締めたような土が検出される。

10/22 遺構検出と攪乱除去。西調査区中央の攪乱は深い。北側の礫集中は、僧寺南大門で検出された暗渠排水遺構とよく似ている。東調査区西側のトレーニング掘り下げ。公園造成時の埋め土はかなり深い。

10/28 東調査区では、引き続きトレーニングを掘り、Tr-01は地山の砂礫層まで掘り上げるが、区画施設を示す遺構は確認されなかった。西調査区でも引き続き攪乱の除去と北側の礫面の検出を行う。排土置き場がいっぱいとなったため、搬出を行う。

10/30 東調査区では、引き続きトレーニングを掘る。Tr-01南端部の礫が暗渠排水遺構らしく見えるので、断ち割ってみる。西調査区でも引き続き攪乱の除去と北側の礫面の検出を行う。西調査区中央の攪乱の下には硬化面が検出され、昨年調査の硬化面とよく似た様相を呈している。

11/10 東調査区トレーニング掘り上げ。西調査区遺構検出作業と攪乱除去作業及びトレーニング掘り上



PL.44 10/16 西調査区遺構検出作業



PL.45 10/22 西調査区遺構検出作業



PL.46 11/10 西調査区遺構検出作業



PL.47 11/12 東調査区トレーニング掘り上げ作業



PL.48 11/17 西調査区遺構検出作業



PL.49 11/27 西調査区疊敷き遺構検出作業



PL.50 12/3 西調査区疊敷き遺構検出作業



PL.51 12/8 西調査区石垣・版築箇所

げ。西調査区の硬化面に入れた Tr-03 では、版築状の土層が確認される。

11/14 東調査区トレント掘り上げとグリッド掘り。東調査区の尼寺区画想定ライン上の石垣では、特に版築や硬化面は認められなかった。西調査区遺構検出作業及びトレント掘り上げ、グリッド掘り。

11/20 東調査区グリッド掘り。東調査区の掘り上げは終了し、結果として目立った遺構は確認されなかった。西調査区遺構検出作業及びトレント掘り上げ、グリッド掘り上げ。

11/21 西調査区遺構検出作業及びトレント掘り上げ、グリッド掘り。北半の疊敷きは調査区北限まで広がっており、何段かに分けられるようである。ただ、その性格は不明である。

12/2 西調査区遺構検出作業及びトレント掘り上げ、グリッド掘り。北半の石敷きは二段に分けられるように、人頭大の川原石で区画をついている。この区画がはっきりと出るように余分な疊を除去するとともに、トレントを入れてその厚さや性格を把握することとする。

12/3 西調査区遺構検出作業及びトレント掘り上げ、グリッド掘り。北半の石敷きに入れたトレント Tr-06 では、さらにその中にもう一段の区画の川原石列が検出される。また、石敷きから南西部の疊混土層、黒色土層にいたるそれぞれの性格を把握するためのトレント Tr-05 を設定して掘り出す。

12/4 西調査区遺構検出作業及びトレント掘り上げ、グリッド掘り。奈文研山中先生に現地指導を受ける。西調査区の版築は、何か建物を造るために行った地業ではないかと指摘していくだく。結果として、H19 調査で検出された石列から続く、尼寺南側の区画施設の想定は白紙となる。

12/8 西調査区遺構検出作業及びトレント掘り上げ、グリッド掘り。石敷きから南西部の疊混土層、黒色土層にいたるそれぞれの性格を把握するためのトレント Tr-05 では、疊じり土

層が地山となり、その下には自然堆積の川原石による礫層が確認された。また南西隅の黒色土層は古墳時代後期の堅穴住居址である。

12/10 西調査区遺構検出作業及びトレーニング掘り上げ、グリッド掘り、遺構清掃。並行して除伐した樹木や枝の片づけを行う。東京大学佐藤先生に現地指導を受ける。西調査区の版築は山中先生の指摘と同じ。尼寺の南側区画については、指定地南側の指定地外の調査が必要との指摘をいただく。

12/11 西調査区遺構検出作業及びトレーニング掘り上げ、グリッド掘り、遺構清掃の後、空中写真測量を行う。撮影の間、除伐した樹木や枝の片づけを行う。

12/15 セクション・エレベーションを中心とした遺構実測を行うとともに、遺構保護砂の埋め戻しを開始する。

12/17 保護砂の埋め戻し、透水シート養生、排土埋め戻し、機材撤収。

12/25 埋め戻し後の整地。現地調査終了。

以降、出土遺物の洗浄・注記・接合・図化、測量図面の整理等を行う。

#### 平成21年度

埋蔵文化財整理室において、遺構図等の実測図面や遺物の整理作業、報告書編集作業を行い、平成22年3月25日に調査報告書を刊行し、すべての調査事業を終了した。



PL.52 12/19透水シート上に排土埋め戻し



PL.53 12/15遺構実測作業



PL.54 12/16保護砂埋め戻し

## 第二章 遺跡の環境

### 第1節 自然的環境

#### 1 上田の気候

長野県は本州中央部に位置し、周囲を山に囲まれている。このため上田の気候には内陸性の特徴がみられる。夏には日中の気温は東京よりも高温になることが多いが、乾燥しており、夕方から明け方までは気温が下がるためしのぎやすい。冬期間には県北部に比べて上田・佐久は降水量が少なく、太平洋側気象区の特徴を示している。

上田市の年間平均気温は $12.1^{\circ}\text{C}$ で、県下では飯田地方に次いで暖かい。気温の年較差は $25.8^{\circ}\text{C}$ で札幌の数値に近く、寒暖の差が大きい。市内でも場所による気温の差が大きいが、市街地が最低、最高気温ともに最も高い。年平均湿度は66%で、東京などと並んで全国でも最も低い類に入る。

上田では平均年間降水量が878.7mmと1,000mmに達せず、全国的に見ても雨の少ない土地である。これは海からの湿った空気が周囲の高山に遮られて雨や雪を降らせ、上田上空に達するまでに乾燥した空気となってしまうためである。降雨は年間を通じて少ないので特徴である。市内では山に近い地域ほど雨が多いが、平地では塩田平に比べて千曲川右岸の降水量が少ない傾向がある。

冬季は西南西と東の風が多く、夏には南東の風が卓越風である。年間を通じて北及び南からの風が大変に少なく、東や西の風が多い特徴がある。これは地形の影響によるもので、南と北に山が連なり、千曲川に沿った東西方向に風が吹き抜けるためである。

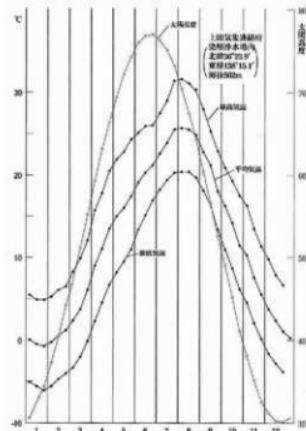
日照時間が長いのも上田の特徴で、年間2000時間以上というのは長野県下のみならず、全国的にも高い数値である。快晴日数の平均は年80日前後に達する。

#### 2 上田の地形と地質

上田は盆地状の地形で、周囲を独鉱山・大林山・太郎山といった標高1200-1300m級の山々に囲まれている。千曲川は市内で標高465mから417mまで流れ下り、この右岸に中心市街地が広がっている。また、左岸側では、海拔450-500mほどの塩田平が水田地帯を形成している。塩田平には寡雨に備えた灌漑用の溜池が多く見られる。

上田市を東西に流れる千曲川は奥秩父の甲武信ヶ岳付近を水源とし、長野県土の北半を貫いて新潟県に入ると信濃川と名を変え、日本海に注ぐ全長367kmの日本一大河である。上田市内でこれに注ぐ主な支流としては、右岸から神川・矢出沢川などがあり、左岸からは塩田平を流れる産川水系が浦野川に合流している。千曲川の市内中心部での川原は幅400-600mにわたって広がる。

上田地域の地層は海成層の上に湖成層があり、さらに約1万年前頃からは湿地性や扇状地の堆積物が形成した地層がある。これに火山に由来する貫入層や堆積物が加わり、市内でも地域によって多様な



第3図 上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ

地質が分布している。古い時代の地層は山地に見られ、太郎山などに産する緑色凝灰岩は古くから礫石などの建材として利用されてきた。上田でとりわけ特徴的なのは千曲川流域に発達している階段状の地形で、これには河岸段丘の段丘崖と断層で形成された断層崖がある。また、扇状地地形は山を下った急流が緩斜面に出る山際に形成され、大小さまざまに見られる。

盆地内の地層や地形は、おもに第四期（170万年前まで）に形成された。厚く堆積した湖成層のほかに、川や谷の底を埋めて堆積した染屋層が広く分布しているが、このうち千曲川に沿った地域が断層によって落ち込み、段丘状の崖地形が形成されている。

### 3 信濃国分寺跡周辺の地形と地質

信濃国分寺跡は上田市東部の千曲川右岸に位置しており、北から神川が千曲川に合流する点の西方にある。地形的には染屋層と千曲川が形成した河岸段丘の段丘面に広がっている。

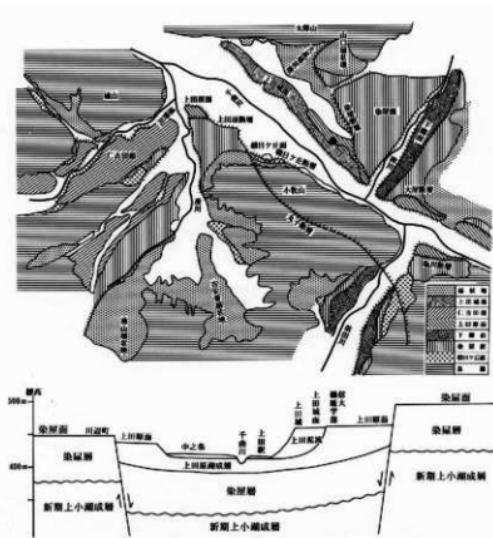
染屋層全体の厚さは約40~50mあり、主に礫岩層からなる。この堆積物からできている平坦な地形を染屋面（第1段丘面）と呼ぶ。この台地上では地下水が得にくいため、古来集落は台地の周縁に形成され、中央部は灌溉水田として利用されてきた。染屋面周囲の断層崖には樹木が育ち、豊かな緑地を形成している。千曲川右岸ではこの染屋面の下方に上田原面が広がる。これは染屋面の一部が落ち込んで生まれた小規模な湖に堆積した湖成層でできている。

上田原面から国分付近で3~4mの段差をもって低く位置するのが上田城面（第2段丘面）である。これは火山活動による泥流の堆積物で、縄文時代草創期頃に形成されたとみられる。千曲川との比高は15~17mにも及ぶ。現国分寺はこの上田城面に所在し、このほか多くの古代遺跡がこの面上に分布している。

信濃国分寺跡の付近では、上田城面と千曲川との間にさらに第3段丘面があり、古代国分寺伽藍はこの面上に所在している。神川の左岸では狭い幅しかないが、国分寺跡付近では最大300mほどまで拡大し、西は下堀地区の西方で終わる。河床からの比高は2~3mほどである。

これより南は千曲川の氾濫原であるが、治水工事の結果生まれた土地が農地として利用され、堤防沿いの北国街道沿道には集落が点在する。

上田市域は山に囲まれるが、面積的には低地や台地・段丘の占める割合が高く、表層地質では堆積物が大半である。染屋面には灰色台地土と台地褐色森林土が分布する。上田城面の表層も灰色台地土が主



第4図 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)

だが、これより千曲川沿いには灰色化低地水田土が分布する。

#### 4 上田の植生

植物区系の上では、上田は太平洋区系区と日本海区系区の境目に当たり、またフォッサマグナ亜区系区と中部山岳区系区にも重なっている。このように多様な植物分布が見られるのが上田の植生の特徴である。市内の平地は標高 500 m 前後に位置し、垂直分布では丘陵帯から低山帯へと移る付近に相当する。山地にはアカマツが多いが、里山ではコナラやクヌギ林が多く見られる。千曲川の段丘沿いにはケヤキ林が帶状に続いて特徴的な景観を呈している。このケヤキ林は遷移を経て安定した自然林で、ここでは古来から段丘の景観を形作っていたものと考えられている。

上田市内には文化財に指定されているものを含めて名木が少なくないが、信濃国分寺資料館には「カバンのフジ」と呼ばれる木がある。明治期に南佐久郡の農家からカバンに入れて持ち帰られた苗を上田の第十九銀行（現・八十二銀行）に植えたもので、昭和 51 年に現在地に移植された。5 月中旬過ぎに見事な花を咲かせることで知られる。

## 第 2 節 歴史的環境

### 1 先史～繩文時代

上田盆地周辺に人の居住が始まったのは、およそ 2 万年前頃と考えられている。この時代の遺跡は菅平高原や和田岬周辺などの高地に集中して分布するが、塩田平などの平坦地でも人の活動を示唆するような遺物の発見が徐々にみられるようになってきている。

繩文時代には、山裾の扇状地が主要な生活の場となっているほか、千曲川をはじめとする河岸段丘の縁辺部も盛んに利用されている。これに対して河岸段丘の内部や氾濫原の沖積地には繩文人の活動痕跡は見られない。千曲川右岸一帯では、染屋面にも上田城面にも繩文遺跡はわずかしか発見されておらず、左岸側やその他の支流域とはやや異なる様相を示している。

### 2 弥生時代

千曲川流域では、弥生時代の中期後半から長野地方や佐久地方などで大規模な集落が営まれるようになった。上田地方ではこれより遅れ、弥生時代の後期後半から終末期にかけて集落遺跡が出現し、全域に分布する。このような時期差の理由は現時点で必ずしも明らかでないが、降水量の少ない当地方でも灌漑技術による稻作が可能になったことなどが想像されている。上田の弥生時代における集落の立地は、河岸段丘上や自然堤防など冠水しにくく、水田に適した



PL.55 常人遺跡群下町田遺跡航空写真

低湿地を近くに伴う場所がおもに選ばれている。塩田平の産川流域などが最も利用されており、千曲川右岸でも上田城面に遺跡が分布している。集落は數軒を単位とする小規模なものがほとんどだが、居住域以外を含めた全体像が明らかになった例はまだなく、実態には不明な点も多い。

千曲川右岸の段丘上に位置する弥生遺跡としては、国分寺周辺遺跡群や常入遺跡群などが市街地の東方にある。常入遺跡群に含まれる下町田遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代初期にかけての集落遺跡で、90軒の密集した堅穴住居と大量の遺物が出土している。また、上田原遺跡における周溝墓のように地域の有力者の存在を窺わせる発見などから、上田小県地方がこのころ一つの勢力圏を形成しつつあったと想像する見方もある。

国分寺周辺では、史跡の東方に隣接するしなの鉄道信濃国分寺駅の開業に伴う発掘調査で、中期初頭、中期中葉に属する土器と、中期中葉の住居址が確認されている。

### 3 古墳時代

4世紀後半の大藏京古墳に始まる上田地方の古墳は、5世紀後半まで方墳のままで、他の千曲川流域のような前方後円墳への変化が大きく遅れる。このことは当方が中央政権の支配下に置かれるのが他に比べて遅かったことを物語ると考えられている。古墳時代前期の集落は小規模なものが多いが、後期には建物が集中して建てられ、大規模なムラが出現する。その代表的な例が国分寺周辺遺跡群である。ここでは方形の溝の一部が発見され、居館の濠である



PL.56 生島足島神社

可能性があることから注目を集めている。東信地方で唯一の前方後円墳である二子塚古墳は黄金沢川扇状地の扇尖部に位置しており、6世紀前半から中頃の築造と考えられている。

上田にある古墳ではこのほかに、帆立貝式の王子塚、円墳の吉田原、神川流域の新屋古墳群、他田塚古墳や塚穴原一号墳をはじめとする下之郷古墳群などが代表的な例として市の史跡に指定されている。

「科野国造」は古事記の神武天皇条が初見であるが、中央集権的支配体制のもとに国県制が整備されたのは7世紀の前半頃とみられる。当時の国造の本拠地には諸説あるが、生島足島神社の存在などから小県郡にそれを求める説もある。国造は大和平野の中心に勢力を持っていた多氏の系統と考えられており、そこから他田氏や金刺氏などに分かれたものとみられる。

### 4 律令期

大宝律令のもとで信濃国にも国衙が設置され、中央から国司が派遣された。この信濃国府がどこに所在したかは今もって明らかになっていないが、「和名類聚鈔」には筑摩郡に在りと記されている。しかし、国府と国分寺は近接して置かれるのが通例であることから、当初小県郡に置かれた国府が9世紀頃に筑摩郡に移ったと考えるのが現在の通説となっている。上田における国府の所在地としては、条里的遺構が今も残る神科台地と、常田の信州大学織維学部敷地周辺に推定されている。

信濃国分寺跡が立地する千曲川右岸に存在する奈良・平安期の代表的遺跡としては、染屋台上の大規

模集落である宮平遺跡や、上田城面の殿田遺跡、国分尼寺跡の西側に隣接する明神前遺跡などがある。国分寺周辺遺跡群も平安時代までの遺構を含んでおり、掘立柱建物跡などが確認されている。また、染屋面の台地上には上記のように条里的水田の跡が広範囲にわたって見られる。東山道の経路については諸説あって、発掘調査でも道路遺構そのものは確認されていない。初期の東山道は伊那郡から直線的に佐久方面へと抜け

ていたようだが、官道として整備されてのちは筑摩郡を経由するようになり、この時点で上田地方を通過するようになった。詳細な位置は不明ながら、信濃国分寺跡に近い千曲川沿いを東に向かって上野国へ抜けていることは確かで、当時の上田盆地は信濃国の政治・経済・軍事などの重要な中心としての地位を占めていた。

## 5 中世

律令制度が崩壊に向かうと、上田小県地方でも開発領主の寄進により貴族や寺社が經營する荘園が数多く成立した。「吾妻鏡」には12世紀末の信濃国における荘園の名を記した書付が収められているが、これによれば当地方には八条院領常田庄や最勝光院領塩田庄など6つの荘園と3ヶ所の牧の名が見られる。

源氏の世となると、武士達は鎌倉御家人を指向するようになった。このような武士としては、海野氏、祢津氏、泉氏、浦野氏などが代表的である。一方、それまで有力者だった塩田氏などは義仲に与したために所領を失う結果になったかとみられる。鎌倉時代の塩田平では幕府の重臣である島津氏、その後は北条氏が地頭職をつとめ、北条義政がここに遁世してからは塩田北条氏が三代60年間にわたりて仏教文化を花開かせた。今日でも安楽寺三重塔をはじめとする数多くの歴史的建造物、史跡が残されている。なお、国分寺郷は荘園化されることなく、終始公領であった。

鎌倉幕府が滅亡して信濃から北条氏の勢力が消滅すると、当地方も地方領主による争乱の時代に入る。荘園の消滅と並行して守護と国人領主の対立が激化するなか、塩田城を本拠とする村上氏が支配を拡げたが、天文20年(1551)に甲斐の武田勢によって攻略された。

地主の真田氏は同じ頃に武田氏に仕えるようになり、次第に頭角を顯わしていくが、武田滅亡後は、乱世のなか、主家を次々と変えることで巧みに切り抜けたことで知られる。

天正11年(1583)真田昌幸は上田城の築城を開始し、間も



PL.57 中禅寺薬師堂 (最勝光院領塩田庄の中心的施設か)



PL.58 国宝安楽寺八角三重塔

なく小県郡一円を支配下に収めた。また、現在の市街地の骨格をなす城下町も形成された。

上田城は、真田昌幸が豊臣方の上杉氏に臣属したために徳川方から攻められ、関ヶ原合戦でも昌幸・信繁父子が西軍に加わったために上田城は徳川勢の攻撃にさらされたが、よくそれをしのいだ。

東軍勝利の後は、徳川方に加わった昌幸の子、真田

信之が沼田・小県を合わせた9万5千石を領して上田城主となり、領域支配を確固たるものにした。

## 6 近世

徳川幕府の時代には、城主が真田氏から仙石氏、松平氏と代わる中、城下は物資の集散地として栄えた。現在見る上田城はおもに仙石氏の時代に修築されたもので、城下町の整備もこの時期、寛永頃までには概ね完成したようである。上田は城下町であると同時に北国街道の宿駅を兼ねており、流通の拠点であった。様々な産業が育ち、特に上田紬は養蚕とともに大きな発展をみせた。

国分は城下からはや離れた村方であるが、北国街道にもほど近く、国分寺は庶民の信仰を集めて賑わった。その様子は、江戸中期頃に描かれた「八日堂縁日図」からも知られる。室町時代に成立したと考えられる蘇民将来信仰も門前の村人がつくる講中によって組織化されるようになった。

「信濃国分寺勧進帳」は、現存する本堂を江戸時代末期に再建するにあたって集められた寄進の内容を書き上げたものである。そこには藩主松平氏をはじめ、城下の有力商人たちの名が見える一方で、信濃一円から上州、江戸までの庶民の名前もあって、信濃国分寺に対する信仰の広がりを知ることができる。ちなみに本堂は文政12年（1829）に発願され、30余年を経た万延元年（1860）に竣工している。長野の善光寺本堂に通じる様式を持ち、東信地方では最大の近世仏堂建築として、長野県宝に指定されている。



PL.59 史跡上田城跡櫓門及び南北櫓



PL.60 北国街道柳町の町並み

## 7 近代～現代

上田小県地方は、廃藩置県によって明治4年（1871）には上田県となり、のち長野県に統一された。上田の城下町は、明治22年（1889）に市町村制が施行されて上田町となった。大正8年（1919）には市制を施行、同10年（1921）には城下村を編入し、蚕都として栄えた。昭和期には、29年（1954）の塩尻村・川辺村に始まって周囲の町村をたびたび編入しながら48年（1973）には人口10万を擁する都市となった。

なお、国分は昭和31年（1956）に上田市に合併するまで小県郡神川村の字で、とくに明治末期から大正時代にかけてはここでも養蚕が盛んに行われるようになった。また、上田からは数多くの著名人を輩出しているが、農民美術を興した山本鼎は国分に近い集落に居住した。

現在のしなの鉄道、旧信越本線は明治18年（1885）に高崎から横川まで、同21年（1888）に直江津から軽井沢までが開通し、同26年（1893）に碓氷峠を越える難事が完成したことにより全通した。上田駅は明治21年（1888）8月に直江津線の仮終点として開業し、同年12月に軽井沢まで延長された。一方、上田から軽井沢までの間には田中・小諸の2駅しかなかったため、地元の利便と養蚕・製糸業発展のため大屋駅開設の請願が出され、明治29年（1896）1月に新駅が実現した。さらに大正7年（1918）には大屋と丸子を結ぶ丸子鉄道が開業するが、同14年（1925）にはこれが大屋から上田東まで延伸された。

その後、昭和16年（1941）に上田電鉄と合併して上田丸子電鉄となったが、昭和44年（1969）に廃止された。大屋から国分付近まで丸子線は信越本線と並走し、ちょうど史跡信濃国分寺の場所には八日堂駅があった。この廃線跡を利用して昭和46年（1971）には大屋～上田間の信越本線が複線化されている。

信越本線は北陸（長野）新幹線の開業に伴って平成9年（1997）に横川～軽井沢間が廃線となり、同時に軽井沢～篠ノ井間が第3セクターのしなの鉄道として引き継がれた。平成14年（2002）には上田市が信濃国分寺駅を新設、開業している。



PL.61 明治29年開業大屋駅舎

\*なお、史跡信濃国分寺跡周辺の発掘調査の履歴等については、「国分寺周辺遺跡群」（2002年3月上田市教育委員会）に詳細にまとめられている。

## 第三章 調査の結果

### 第1節 平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査

#### 1 調査の概要

##### (1) 目的と経過

昭和40年代の発掘調査で確定できなかった国分僧寺の西及び国分尼寺の東の区画施設（築地塀）の確認を行うため、平成18年6月下旬から発掘調査を実施した。その結果、北調査区の東側で、地山層に約30cmの東高西低の段差があること、東側の高い範囲は、叩き締められた地盤であることが確認され、掘立柱建物跡が検出された。同時に、この掘立柱建物跡の西側に拳大の川原石を6.8m×6.7mの方形に並べた遺構が確認された。

この遺構の性格究明や調査全体の指導を受けるため、9月21日～22日の両日、奈良文化財研究所の中山敏史遺跡整備研究室長（当時）と、東京大学大学院の佐藤信教授（いずれも史跡信濃国分寺跡保存整備計画策定委員）の教示をいただいた。

##### (2) 僧寺西門

掘立柱建物跡は、僧寺の西門と推定された。それは、この位置が僧寺金堂の真西に位置していること、想定されている僧寺築地塀西辺のほぼ中央に位置していること、そして、西の寺域外よりも一段高い場所にある掘立柱建物跡、という諸条件による。

建物主屋の規模は、桁行5.1m(17尺)、梁行2.7m(9尺)で、検出された柱穴は四脚門の控え柱で、梁行の中間には、礎石の上に立ち扉が付く親柱があったと推定された。さらに、この門の西側1.8m(6尺)の箇所には、並列する2個の柱穴が同じ桁行で検出され、廂の付属も推定された。

廂の付属は、祭儀の時に、役人や僧が着座するスペース・空間があったことを示し、門が祭礼空間として重要な機能を有していたことを示す。なお、この門は、礎石建ちではなく掘立柱であることや、出土する瓦の量がきわめて少ないとから、檜皮葺や板葺きの屋根であったと考えられる。

この西門の確認は、従前はその存在が未確認であった僧寺の西の入口が明らかになったこと、僧寺築地塀のラインが、従前の想定ラインより5m西に振れていること、そして、この門が尼寺と接続する出入口であり、今回は確認できなかった僧寺と尼寺の間を南北行する道路、または中間域から入る入口であることなど、多くの情報が提供された。また、全国で実施されている他の国分寺の調査でも、南大門を除く門の確認は意外に類例が少なく、そうした意味でも今回の確認は意義あるものである。

また、門の中央には、焼土や炭化物を含んだ甕があり、その中央には奈良時代の皿が出土している。これは、門が外界からはいる不吉・不淨なものを塞ぐため、建て方工事の前に祭祀（地鎮祭）を行った跡と推定される。

##### (3) 磚石建物跡

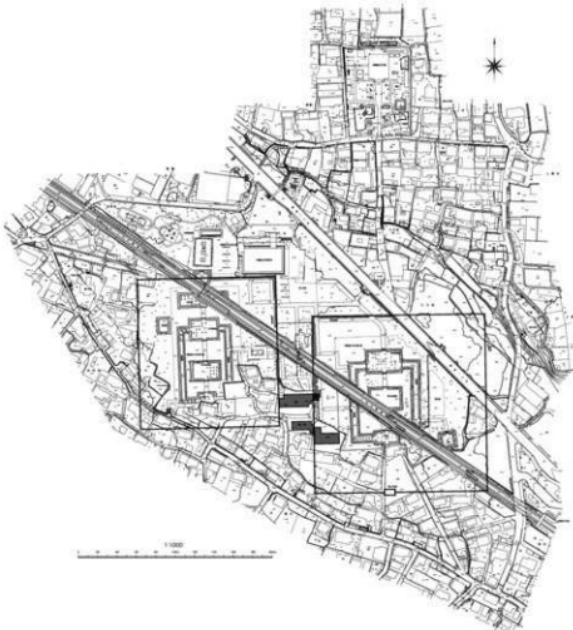
この西門の西側に隣接して検出された磚石建物跡は、建物の四周を拳大の川原石や割石で囲み、床面の四隅には径約0.8mの礎石が据えられていた。この建物は、四周の石列の上に根太を敷き、ここから柱と板壁を立ち上げ、屋根は礎石上の柱によって支えられる宝形造りと推定される。また、石列は東側に凸形を呈しており、ここが建物への出入口と思われる。西壁は中央で石列がとぎれ、その内側に焼土が広く括がっていることから、西壁中央には大型の甕が存在していたことが推定される。このような建物跡は他に類例がなく、現段階では何であるのかは確定できない。また、立派な礎石を有してはいるが、

瓦の出土がほとんどなく、この建物も檜皮もしくは茅等の植物性の葺き屋根であったことが想像される。建物の時期では、西門との位置関係でみると、復元すると廟が重なってしまうことや出土遺物から、おそらく西門廃絶の後にこの建物が建てられたようであるが、主軸方位が僧寺伽藍と一致していることや、西門の前面に建てられていること、宝形造りという特殊な構造であることは、国分寺に付帯する建物の可能性も大きいかと思われる。

#### (4) 僧寺・尼寺区画施設(築地跡)

尼寺築地跡の東辺推定ライン上で、川原石を敷いた遺構が、ところどころを攢乱されてはいるものの、総体として幅 4.5m 長さ 9m(調査範囲)にわたって検出された。この疊層は堅緻な黄褐色の土層下から検出され、築地跡の下部構造かとも思われたためトレンチを入れてみたが、これより下に掘り込み地業等は確認されなかった。この遺構が築地跡の下部構造であるのかは今後の調査によるが、昭和 42 年(1967)の調査では、尼寺の東限について「60 センチ幅の疊列」としており、これとは規模から見ても異なるものようである。

また、これと平行して幅 1.2m、深さ 0.6m の溝が 12m(調査範囲)にわたって検出された。断面は逆不等辺三角形を呈し、最深部は尼寺寄りにある。溝跡の中軸線からは頭大の川原石が大量に出土しており、溝の機能がなくなり埋まっていく過程で、人為的にこの川原石を埋め立てとして放り込んだようである。溝内部からの出土遺物は土師・須恵等の小破片で時期の特定は困難であるが、12 世紀末の住居址にきられており、この時期には区画溝が機能を失っていたことが伺われる。

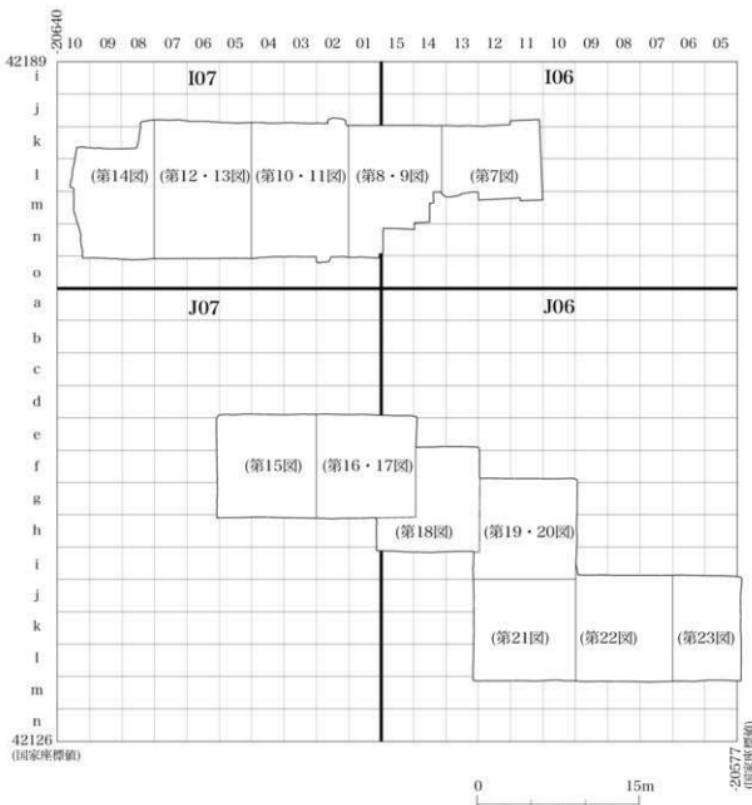


第 5 図 平成 18 年度調査区位置図

## 2 検出遺構

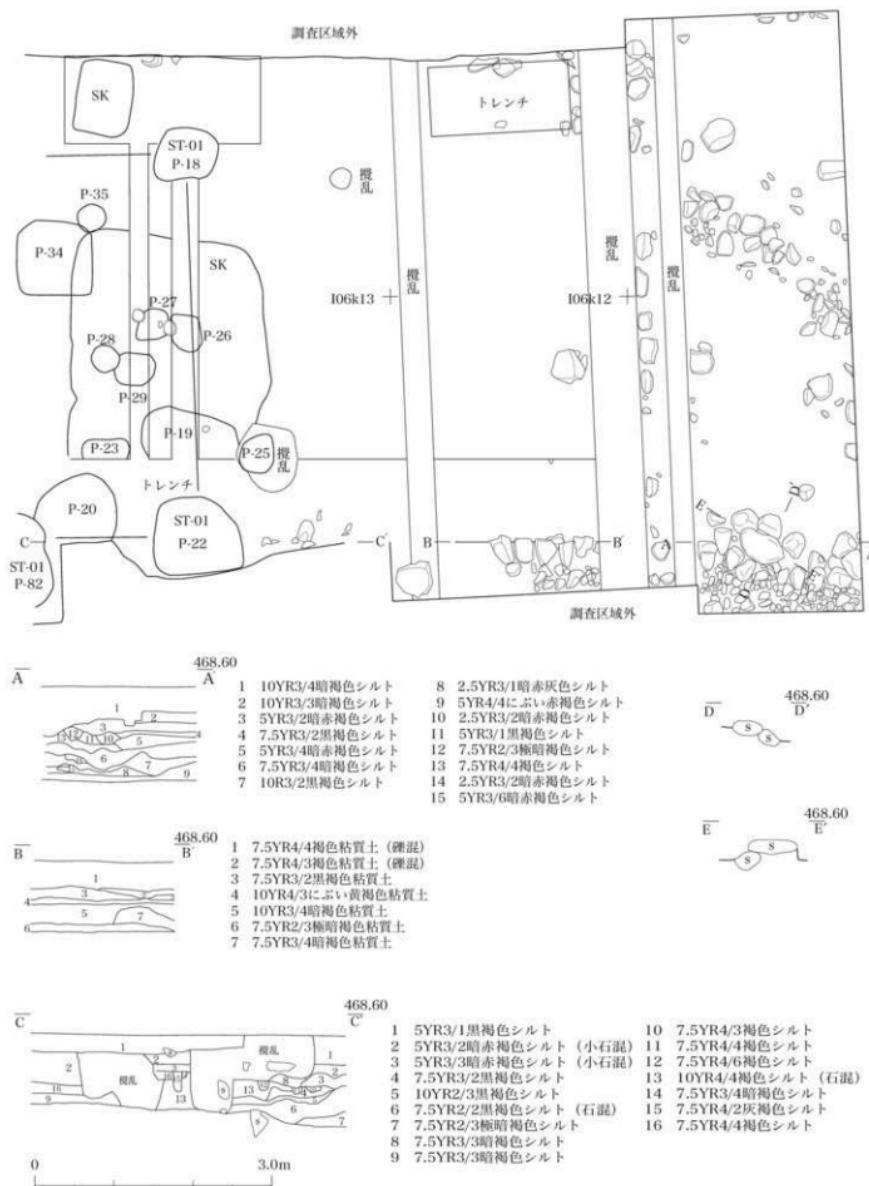
調査は僧寺西辺の区画施設及び尼寺東辺の区画施設並びに寺域間に推定される道路遺構の確認を主たる目的とし、第6図のとおり調査範囲を設定した。

結果、僧寺西門跡、尼寺区画かと思われる溝跡が検出されたが、築地塀等の区画施設と道路遺構は確認できなかった。

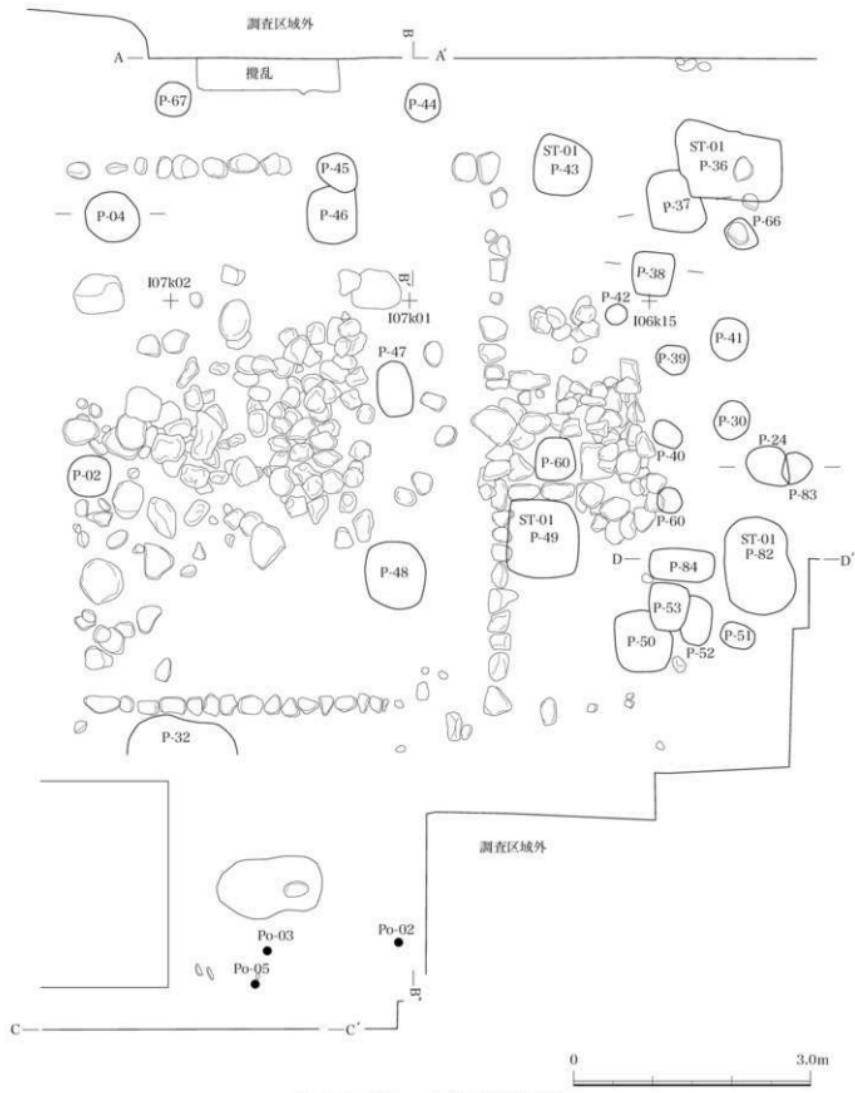


第6図 平成18年度調査区及び実測図区割り図

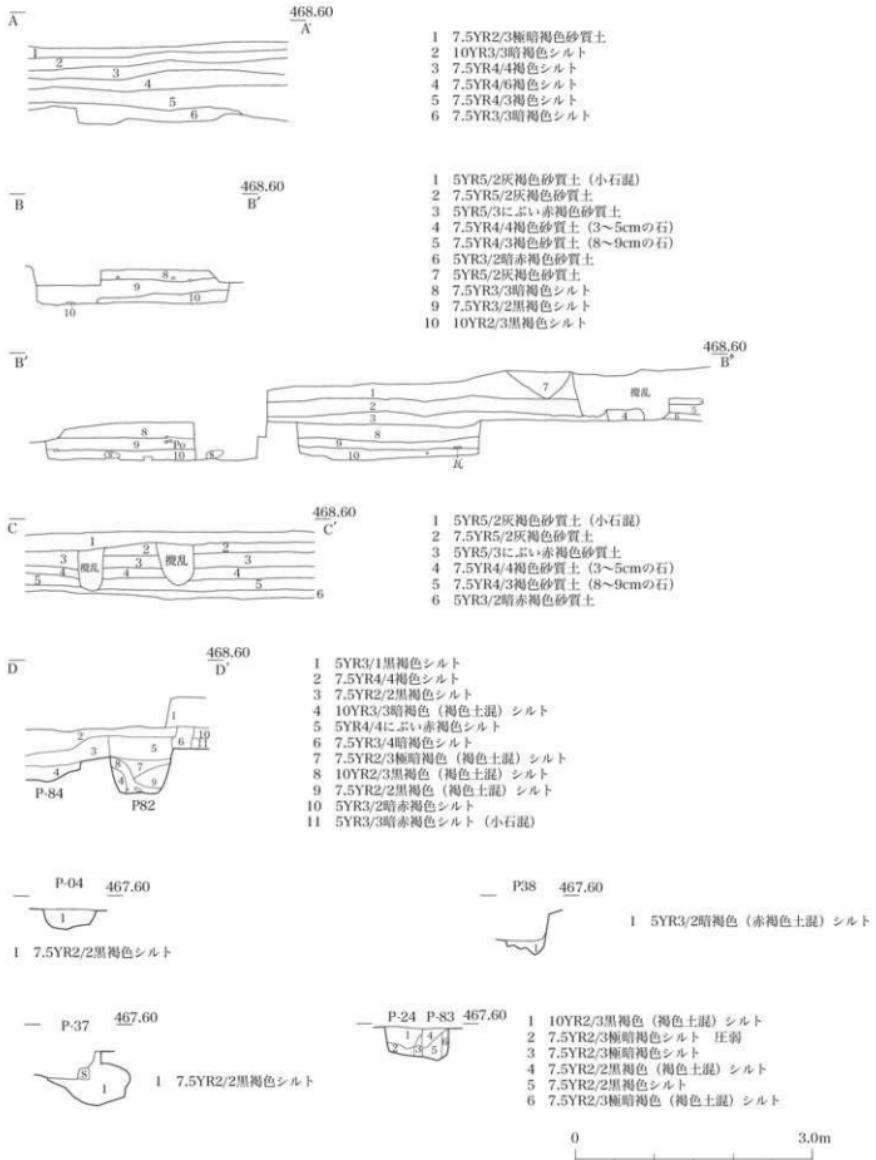
図中のI07等は大グリッドを示し、小グリッドは南北の小文字アルファベットと東西の01～15の組合せで示した。( )は図版割りの数字である。



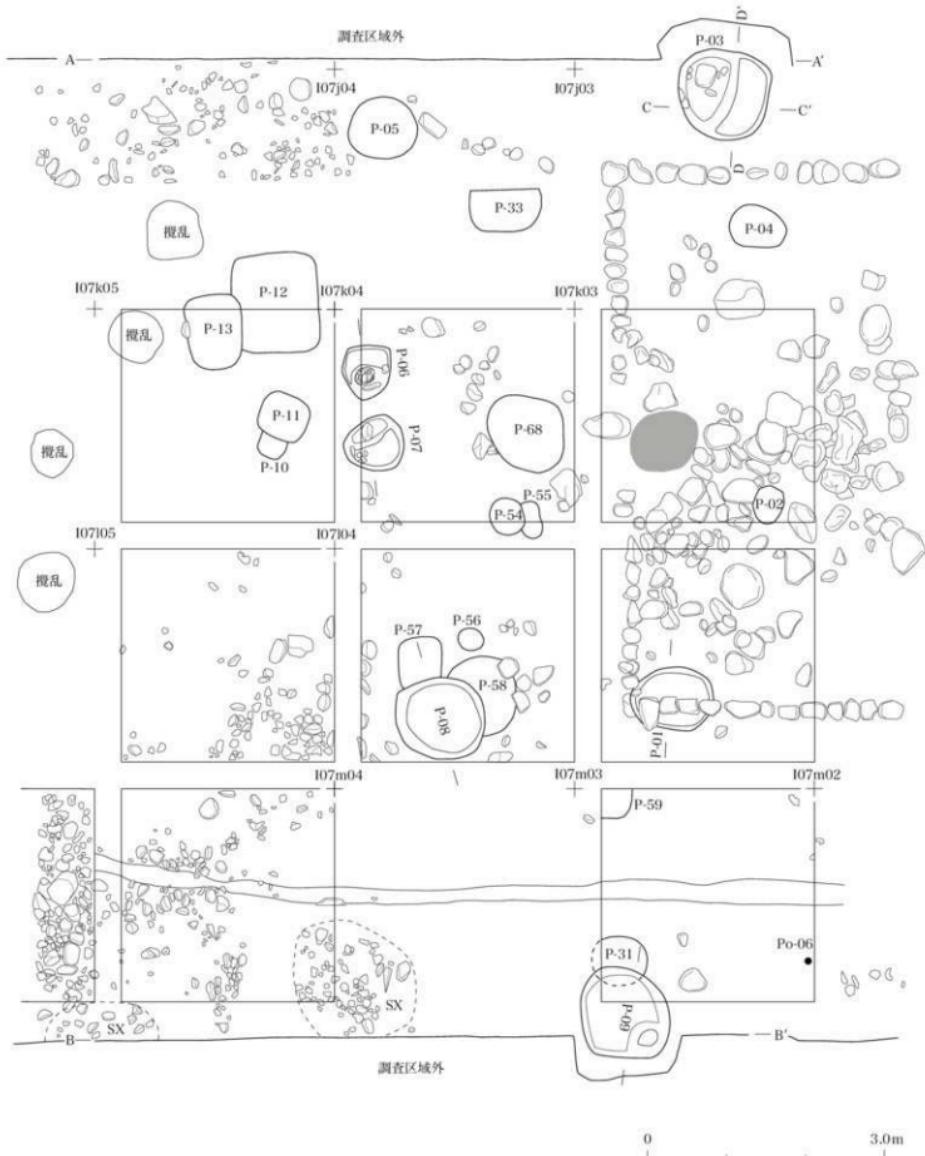
第7図 平成18年度調査区尖測図(1)



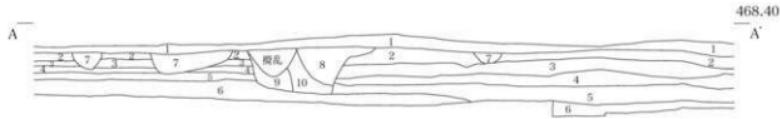
第8図 平成18年度調査区実測図(2)



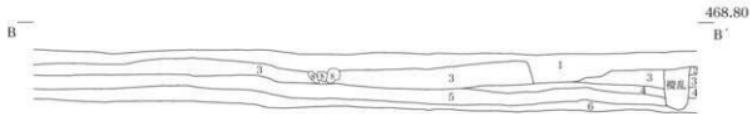
第9図 平成18年度調査区実測図(3)



第10図 平成18年度調査区実測図(4)



- 1 7.5YR2/3極暗褐色砂質土
- 2 10YR3/3暗褐色シルト
- 3 7.5YR4/4褐色シルト
- 4 7.5YR4/6褐色シルト
- 5 7.5YR4/3褐色シルト
- 6 7.5YR3/3暗褐色シルト
- 7 10YR3/3暗褐色や砂質土
- 8 7.5YR3/4暗褐色褐灰土混
- 9 7.5YR3/3暗褐色(締まりが無く柔らかい)
- 10 10YR3/2黒褐色



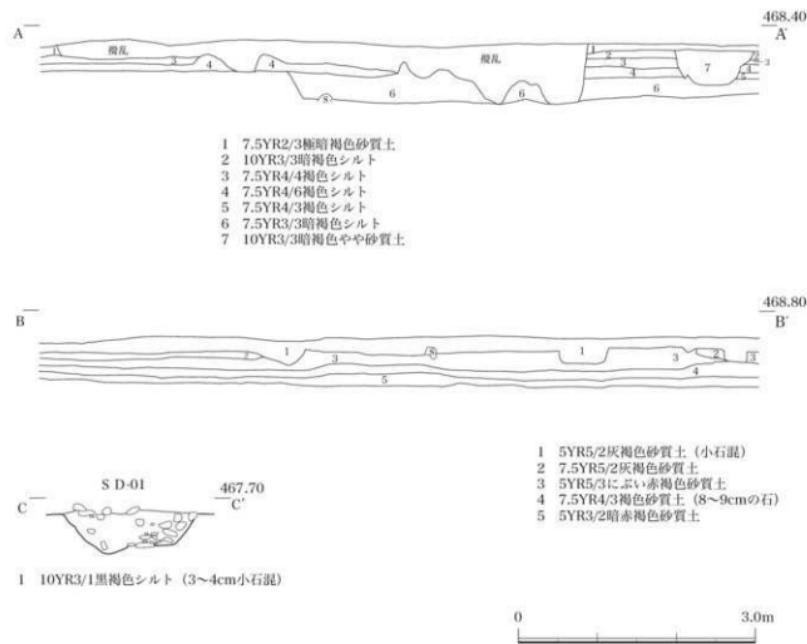
- 1 5YR5/2灰褐色砂質土(小石混)
- 2 7.5YR5/2灰褐色砂質土
- 3 5YR5/3にぶい赤褐色砂質土
- 4 7.5YR4/4褐色砂質土(3~5cmの石)
- 5 7.5YR4/3褐色砂質土(8~9cmの石)
- 6 5YR3/2暗赤褐色砂質土



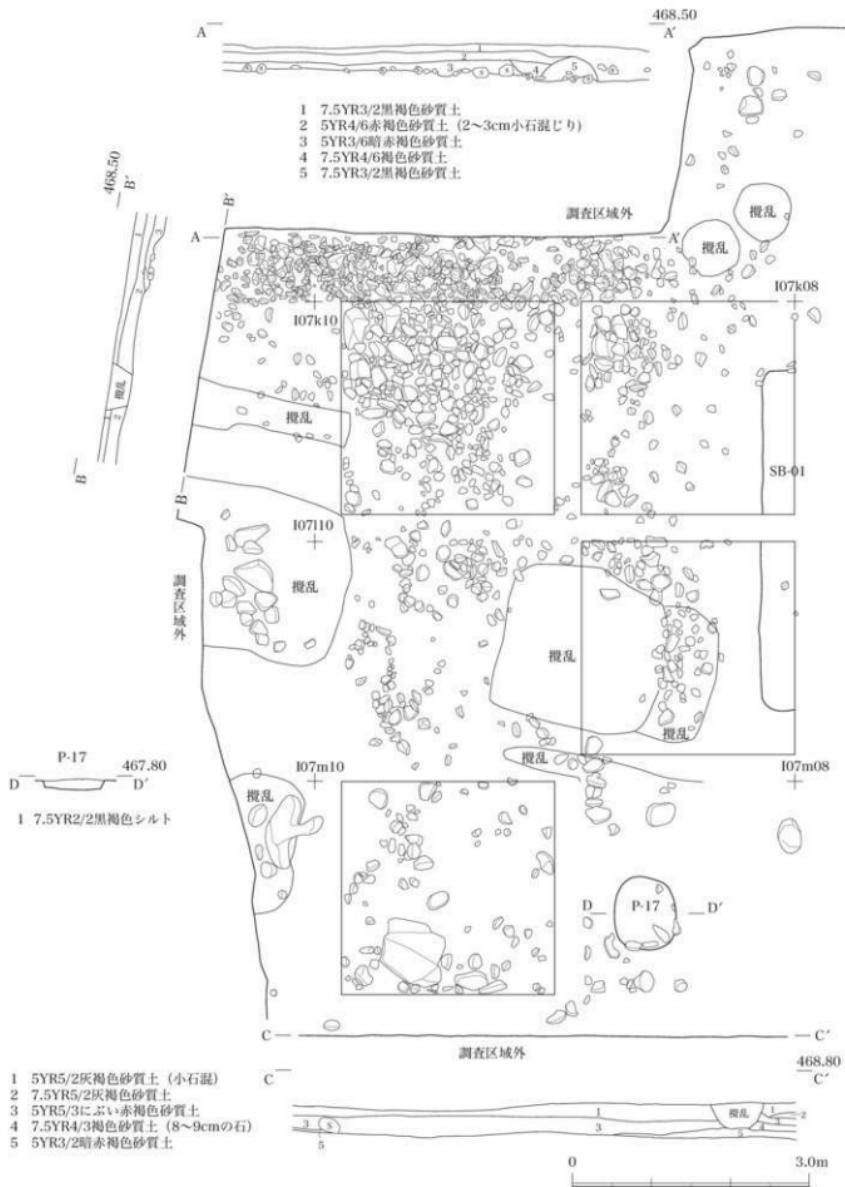
第11図 平成18年度調査区実測図(5)



第12図 平成18年度調査区実測図(6)



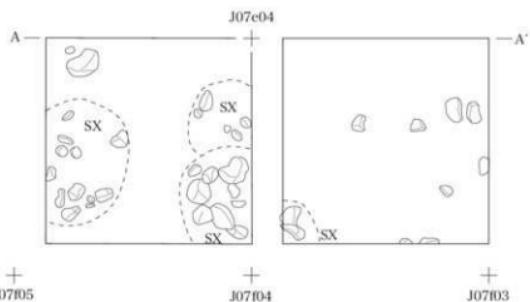
第13図 平成18年度調査区実測図(7)



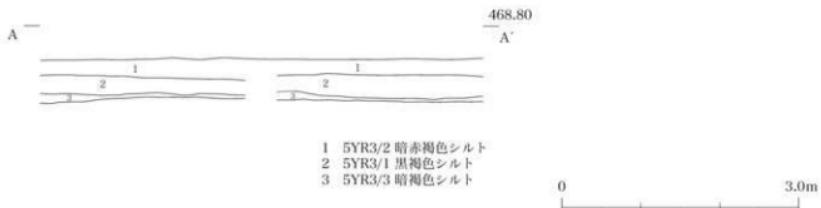
第14図 平成18年度調査区実測図(8)

調査区域外

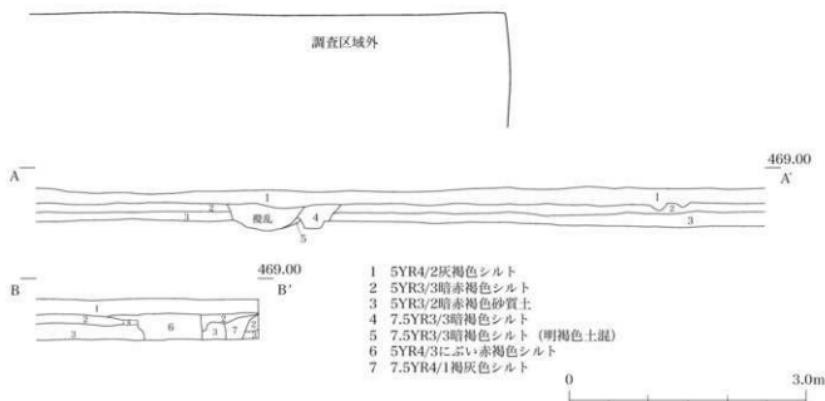
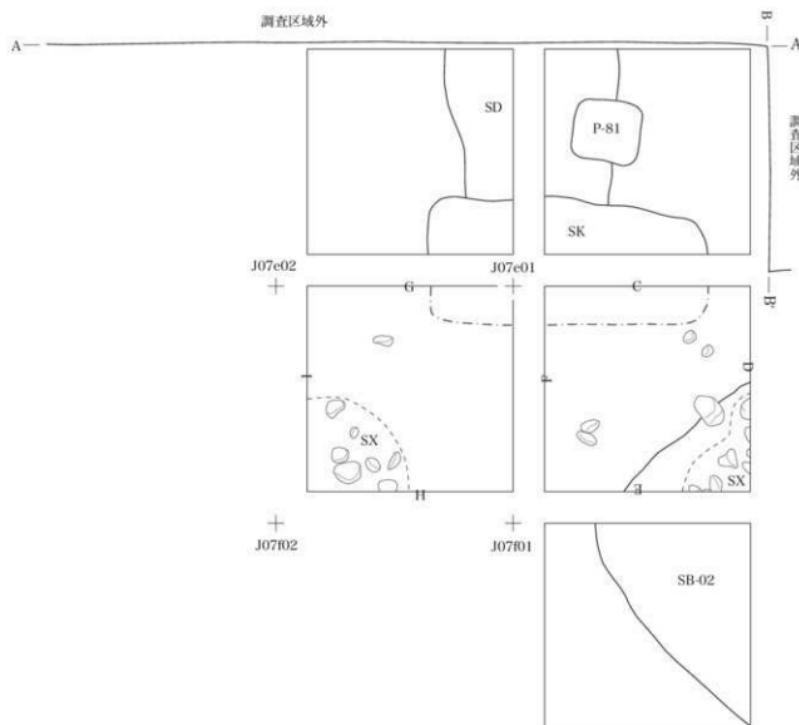
調査区域外



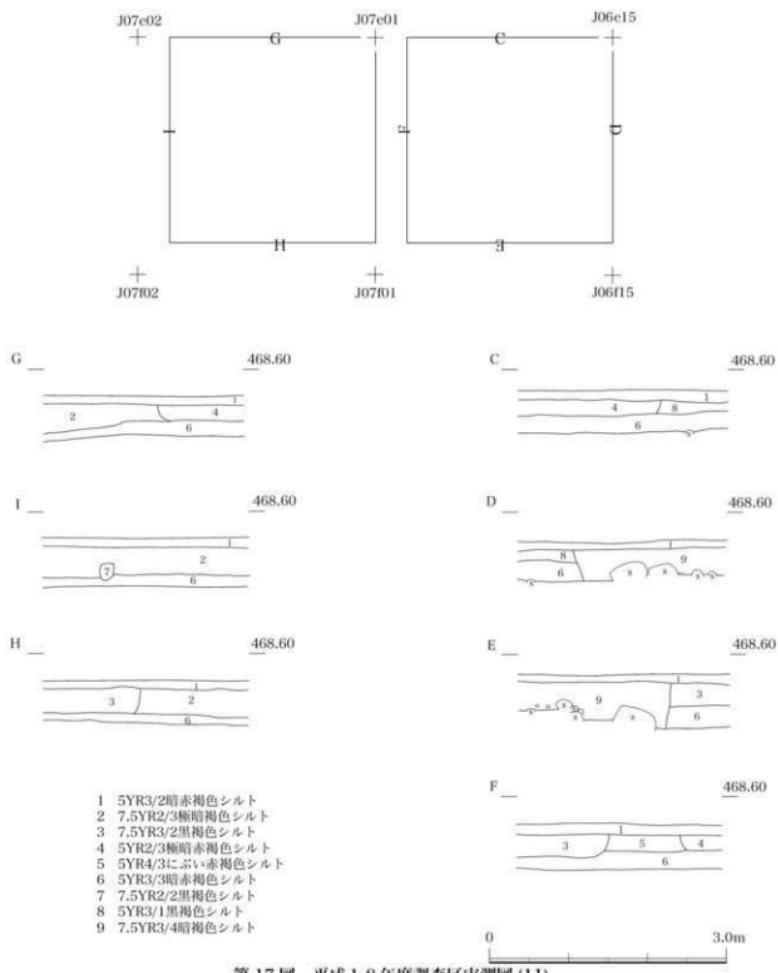
調査区域外



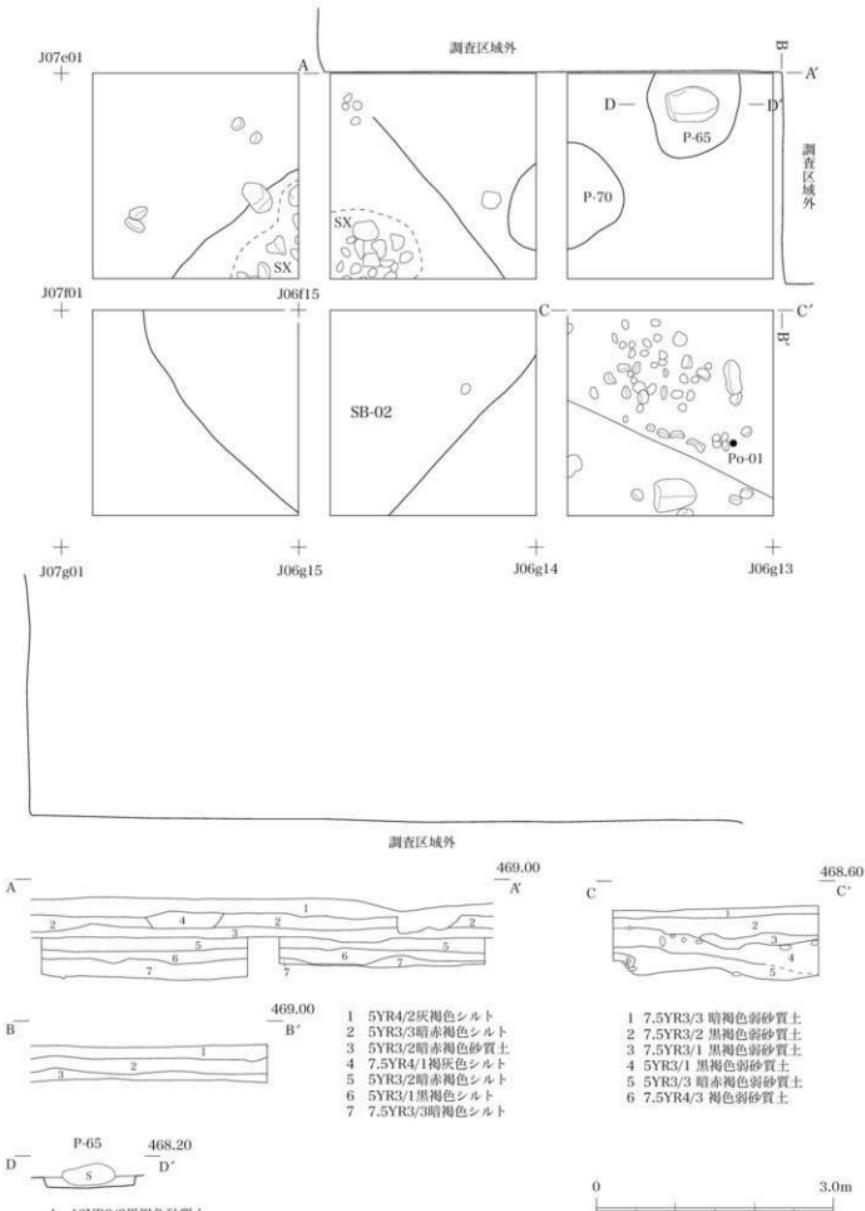
第15図 平成18年度調査区実測図(9)



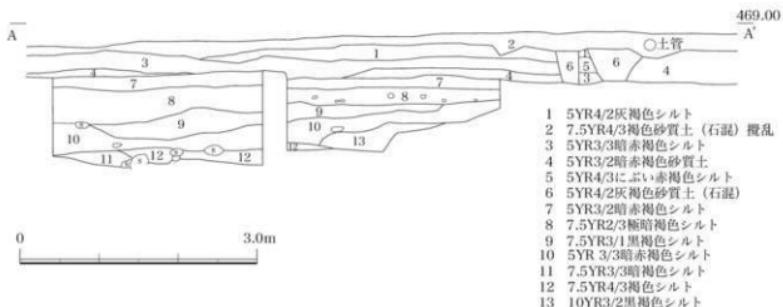
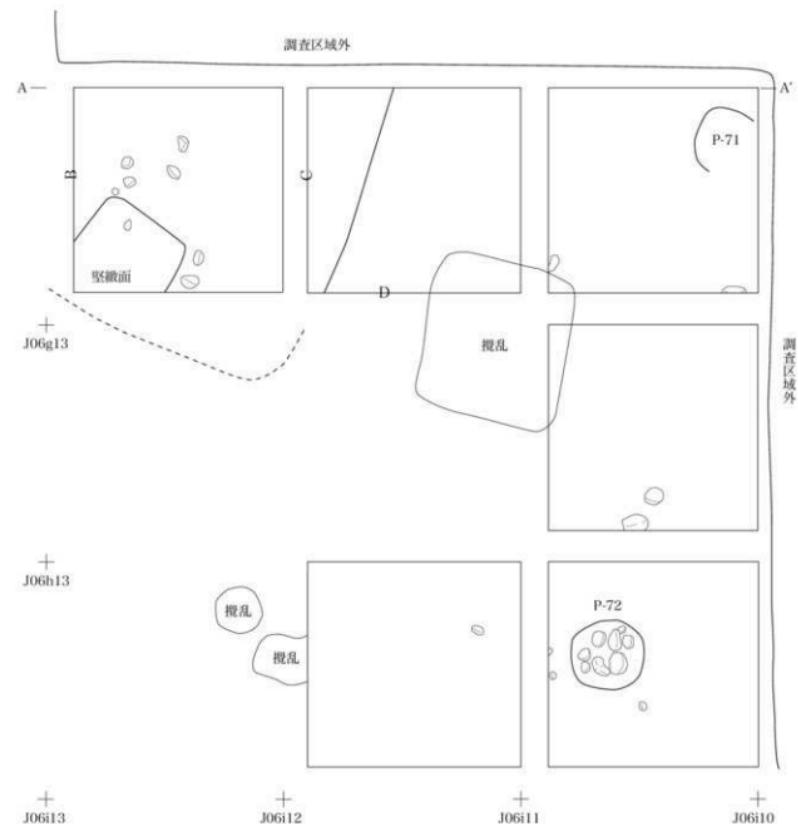
第16図 平成18年度調査区実測図(10)



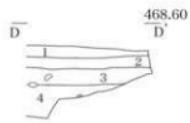
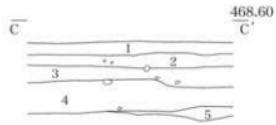
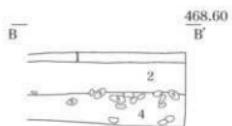
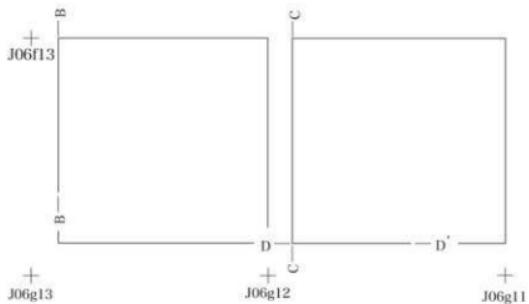
第17図 平成18年度調査区実測図(11)



第18図 平成18年度調査区実測図(12)



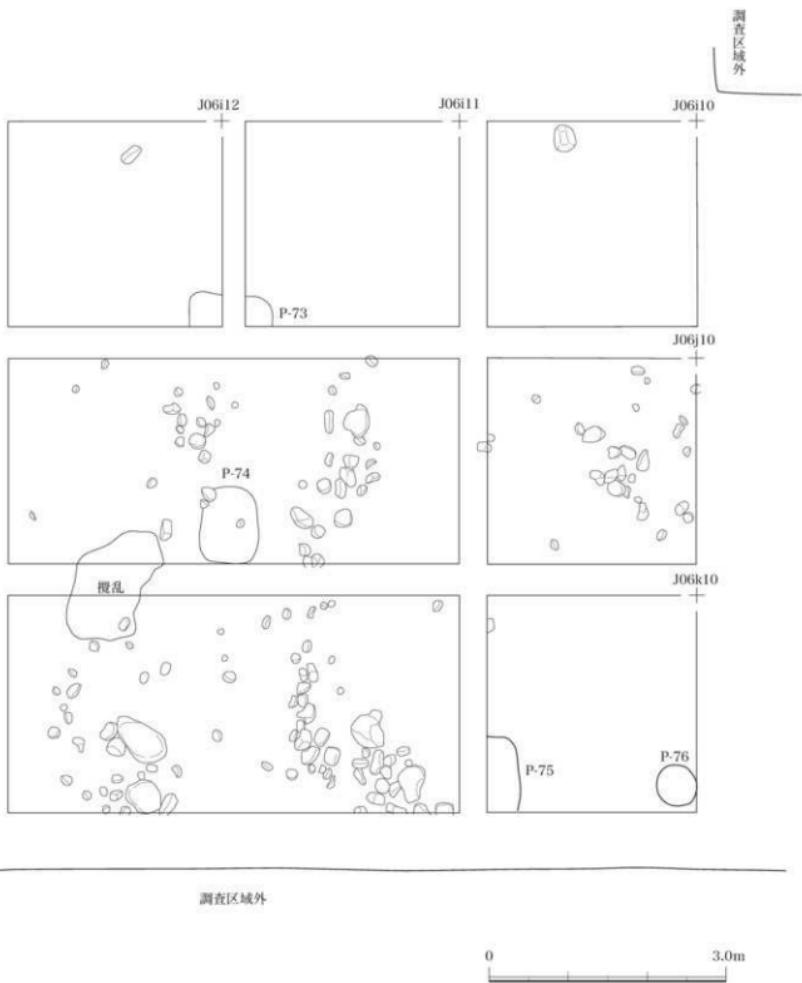
第19図 平成18年度調査区実測図(13)



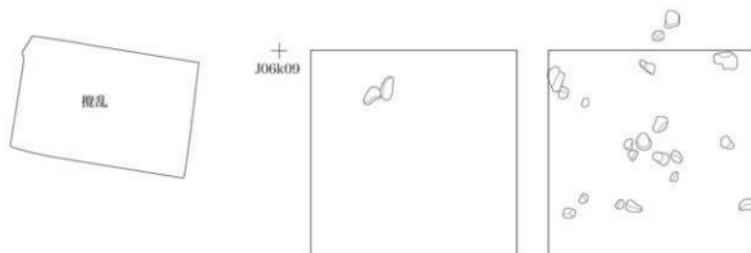
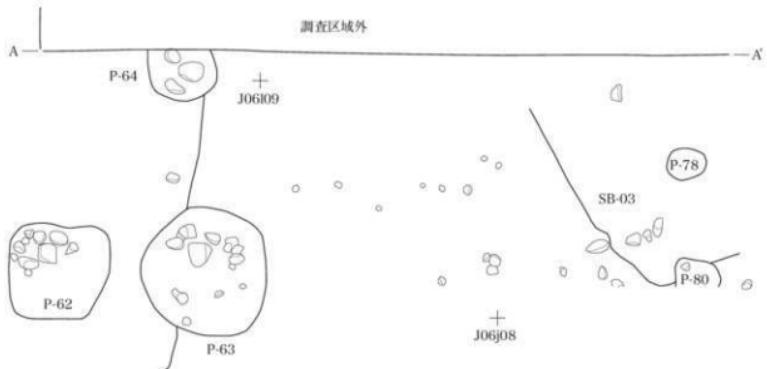
- 1 5YR3/2 暗赤褐色シルト
- 2 7.5YR2/3 植物褐色シルト
- 3 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- 4 5YR3/3 暗赤褐色シルト
- 5 7.5YR4/3 褐色シルト



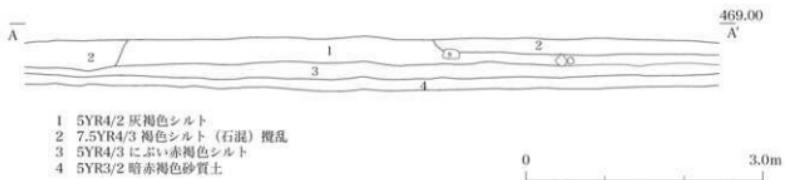
第20図 平成18年度調査区実測図(14)



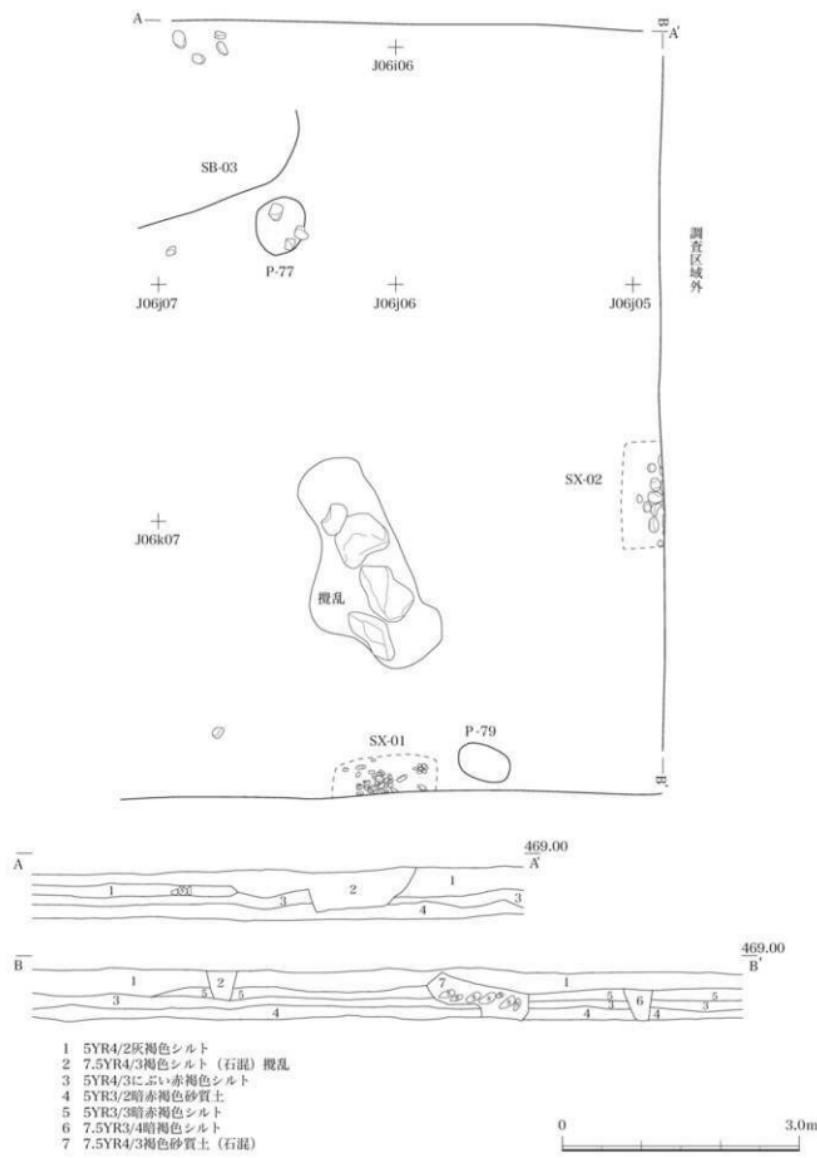
第21図 平成18年度調査区実測図(15)



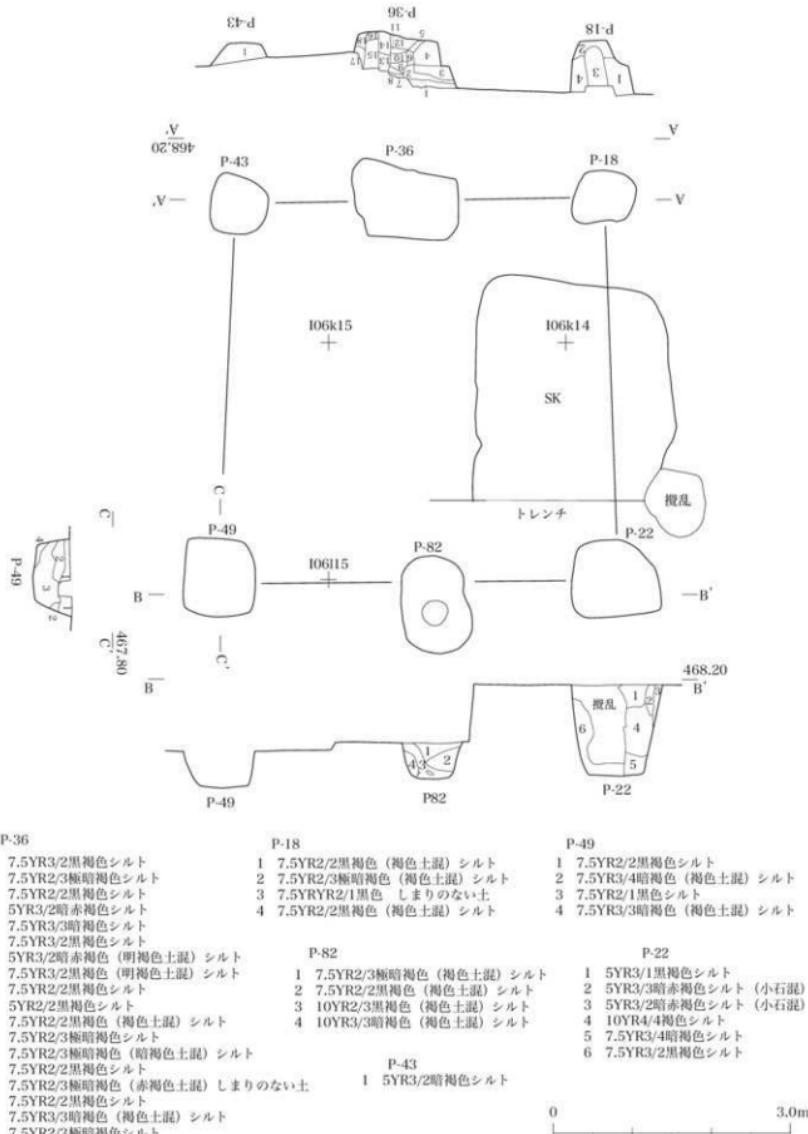
調査区域外



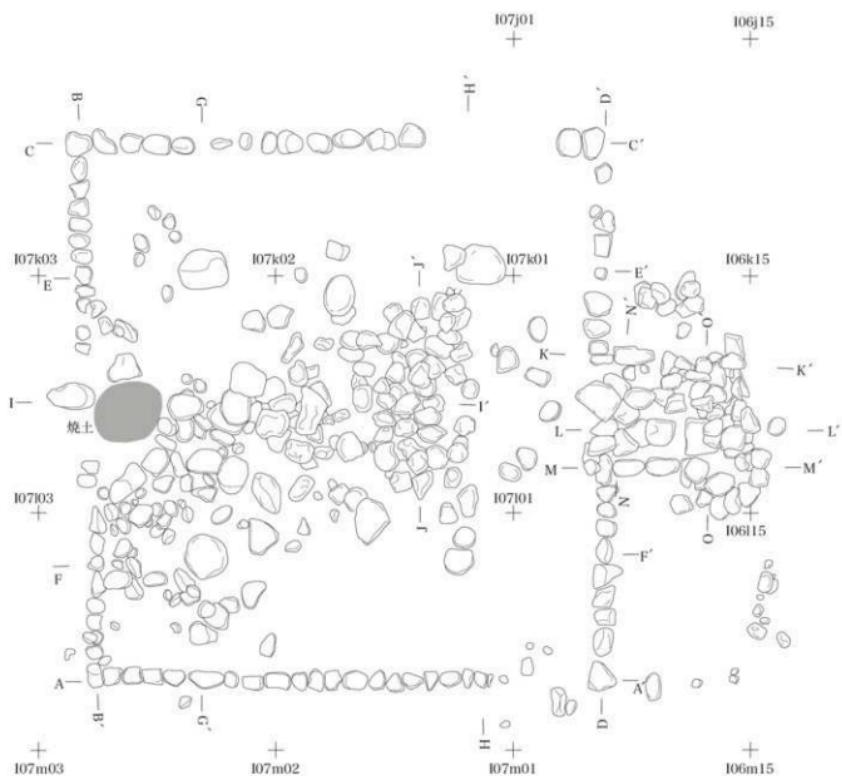
第22図 平成18年度調査区実測図(16)



第23図 平成18年度調査区実測図(17)

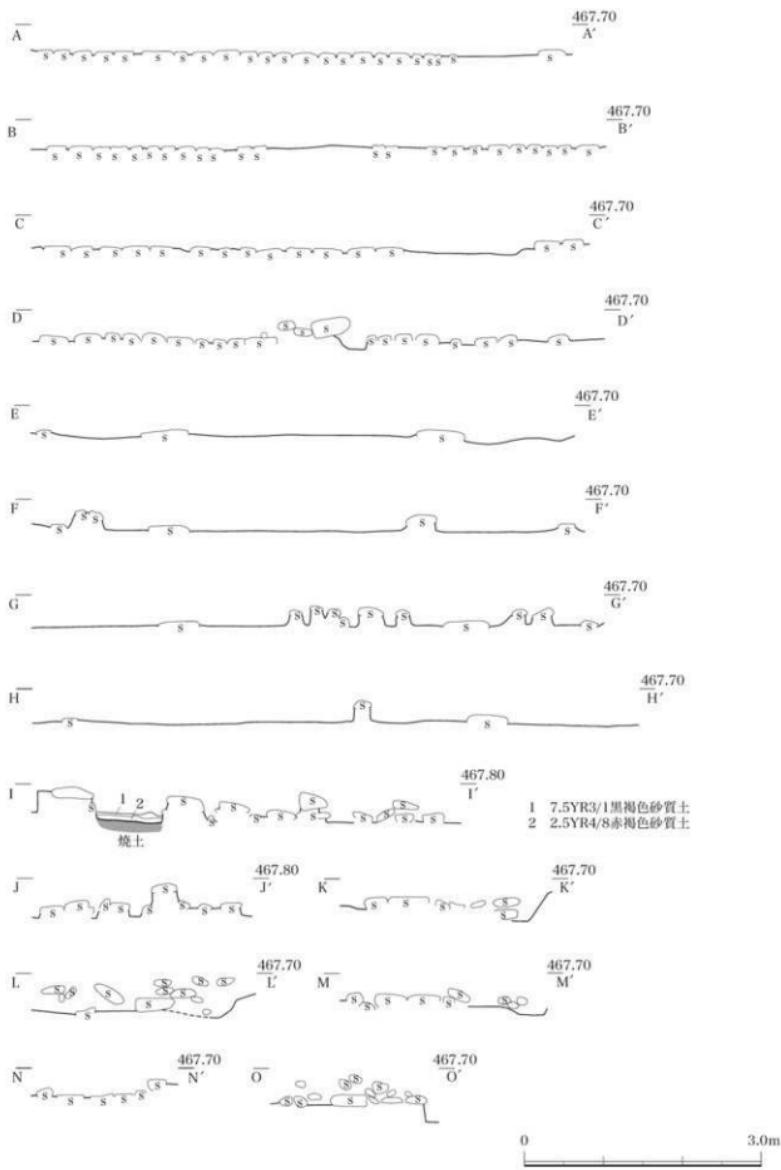


第24図 増寺西門跡実測図



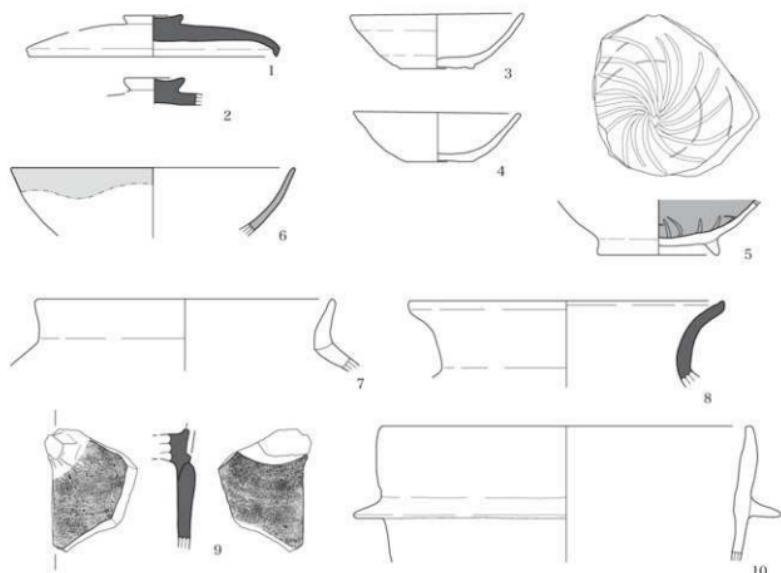
0 3.0m

第25図 碓石建物跡実測図

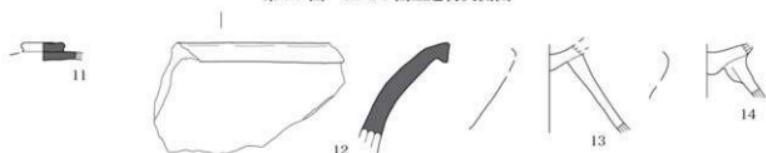


第26図 磯石建物跡実測図

3 出土遺物



第27図 SB-01 出土遺物実測図

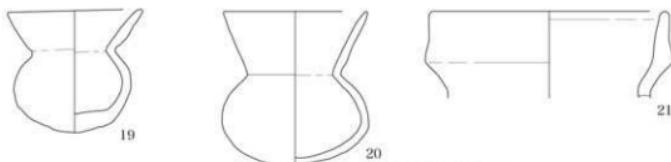


第28図 SD-01 出土遺物実測図

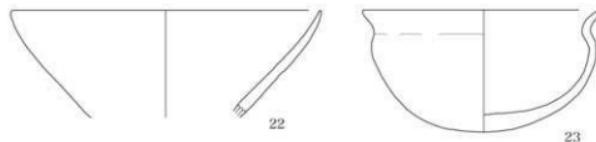
第29図 SX 出土遺物実測図



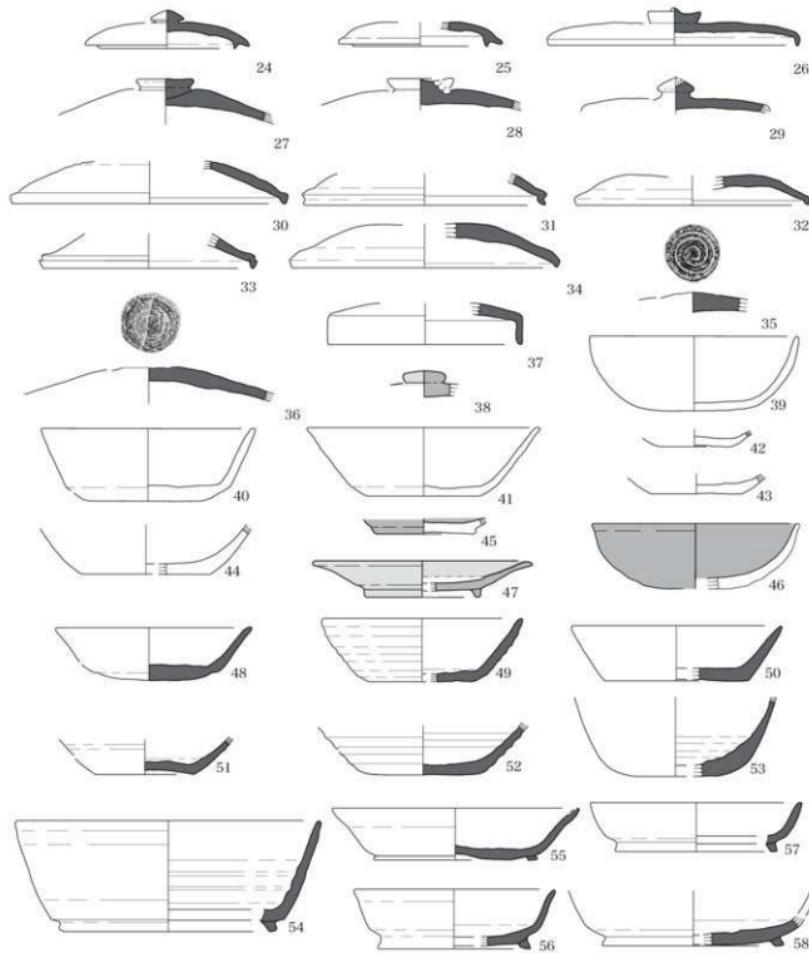
第30図 P 出土遺物実測図



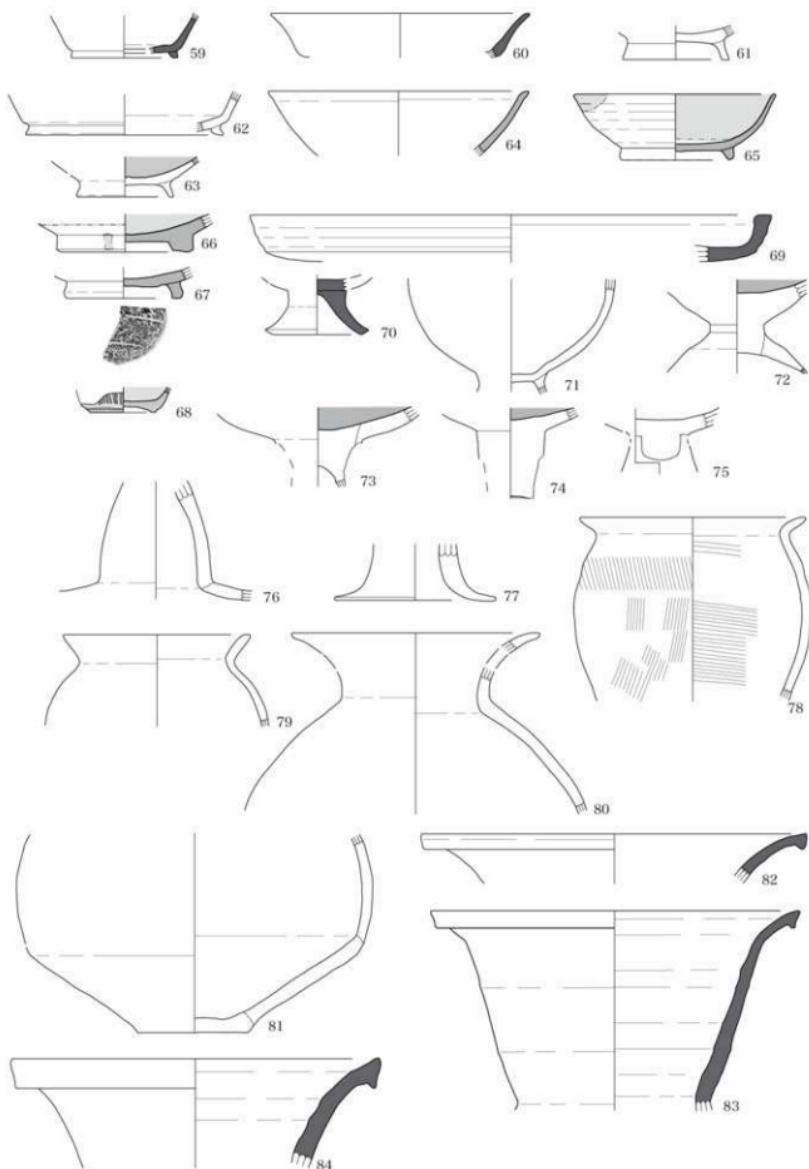
第31図 Po 出土遺物実測図(1)



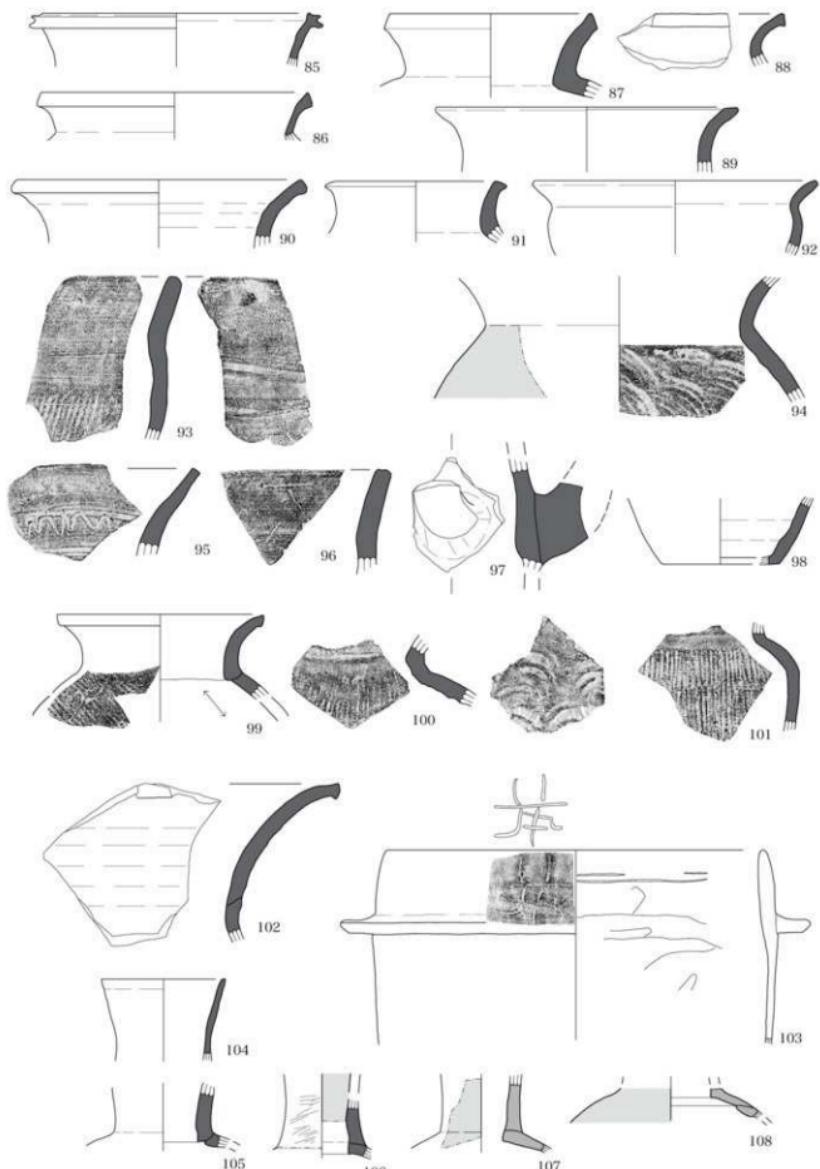
第32図 Po出土遺物実測図(2)



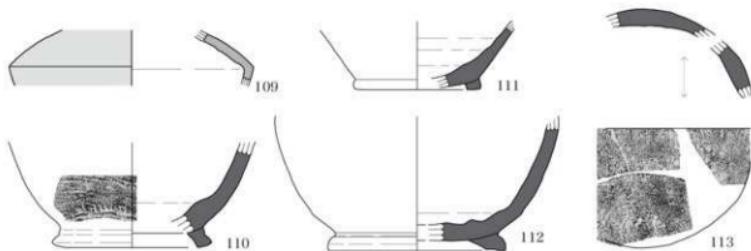
第33図 北調査区グリッド出土遺物実測図(1)



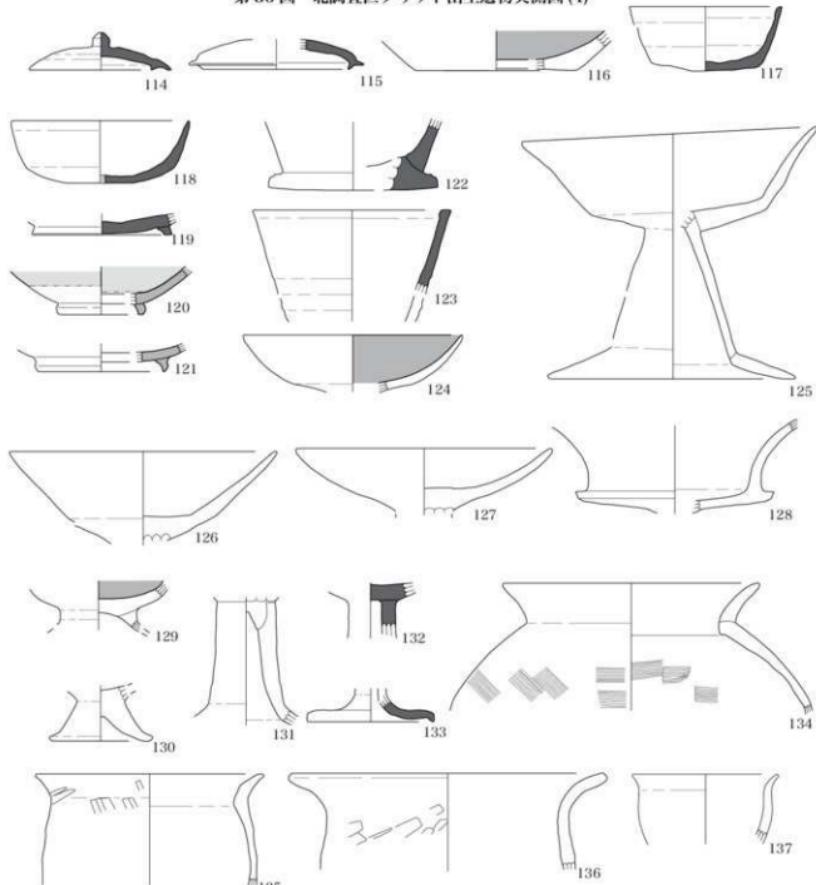
第34図 北調査区グリッド出土遺物実測図(2)



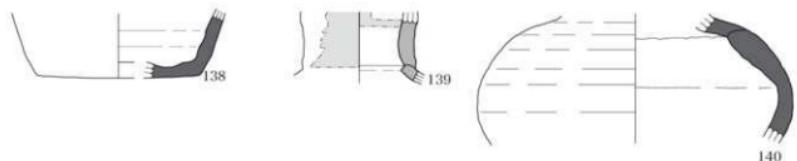
第35図 北調査区グリッド出土遺物実測図(3)



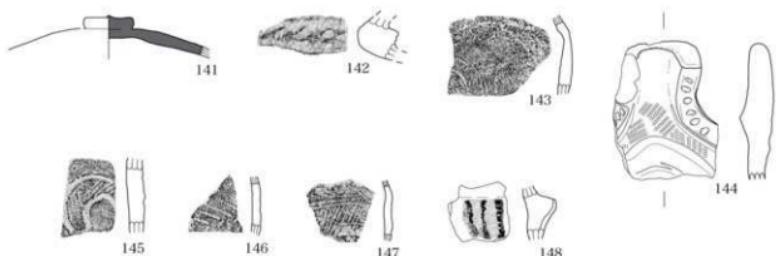
第36図 北調査区グリッド出土遺物実測図(4)



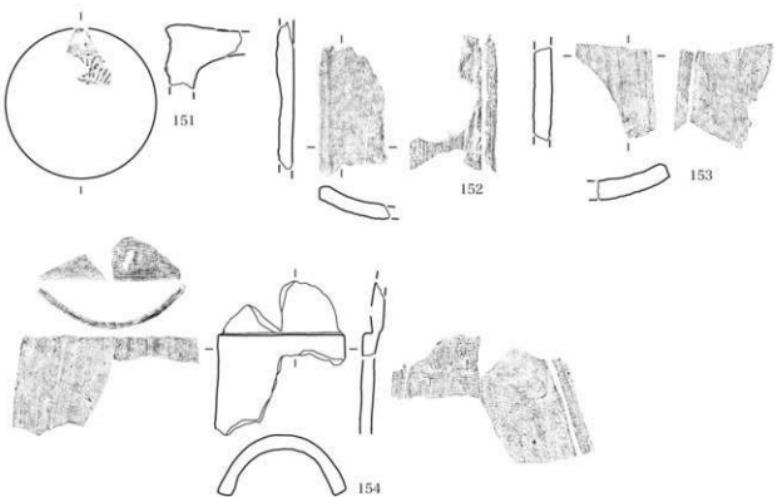
第37図 南調査区グリッド出土遺物実測図(1)



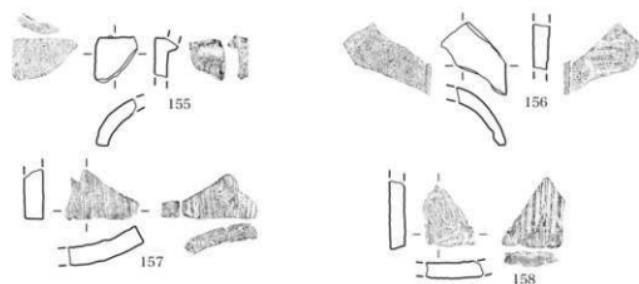
第38図 南調査区グリッド出土遺物実測図(2)



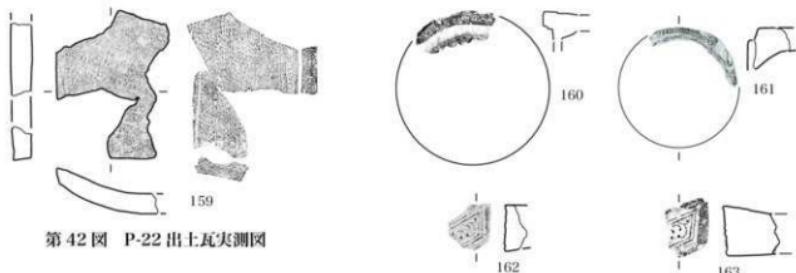
第39図 遺構外出土遺物実測図



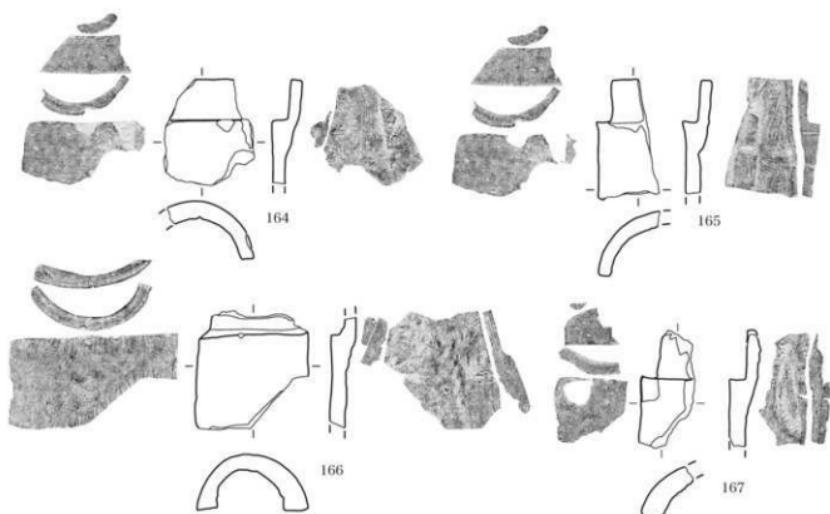
第40図 SB-01 出土瓦実測図



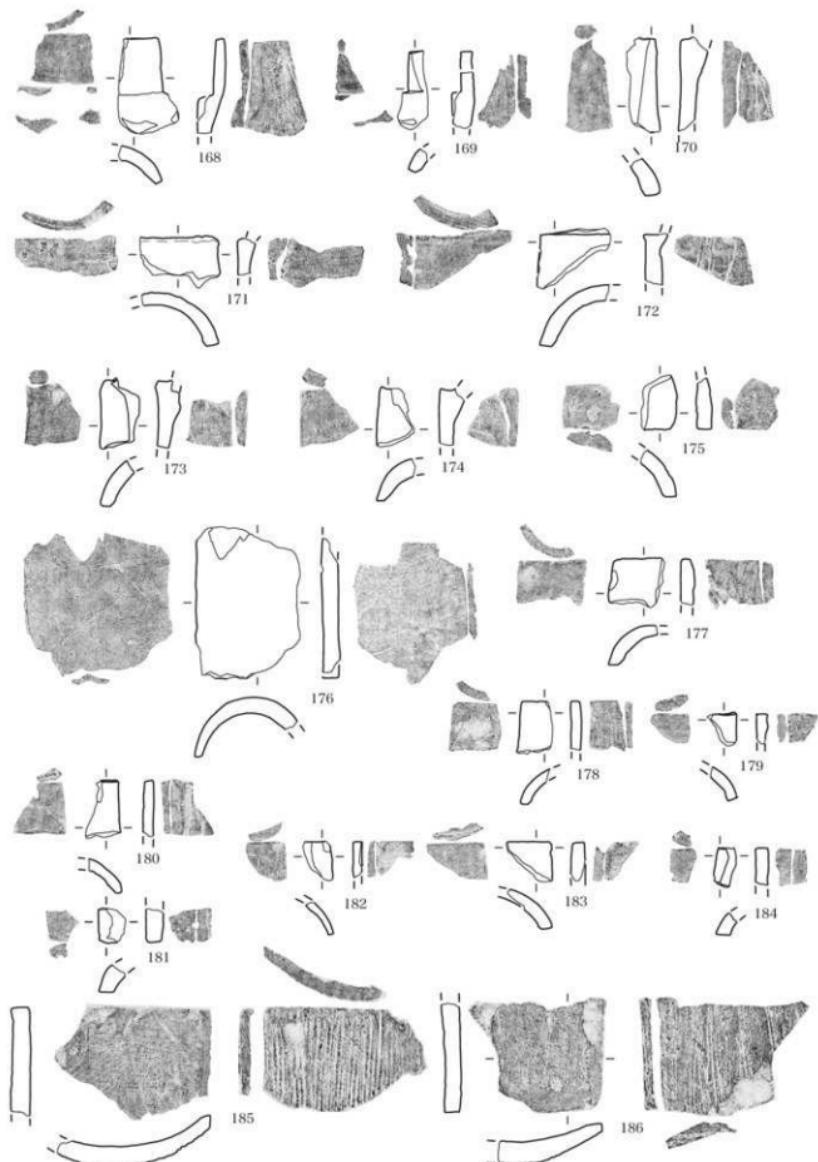
第41図 SD-01出土瓦実測図



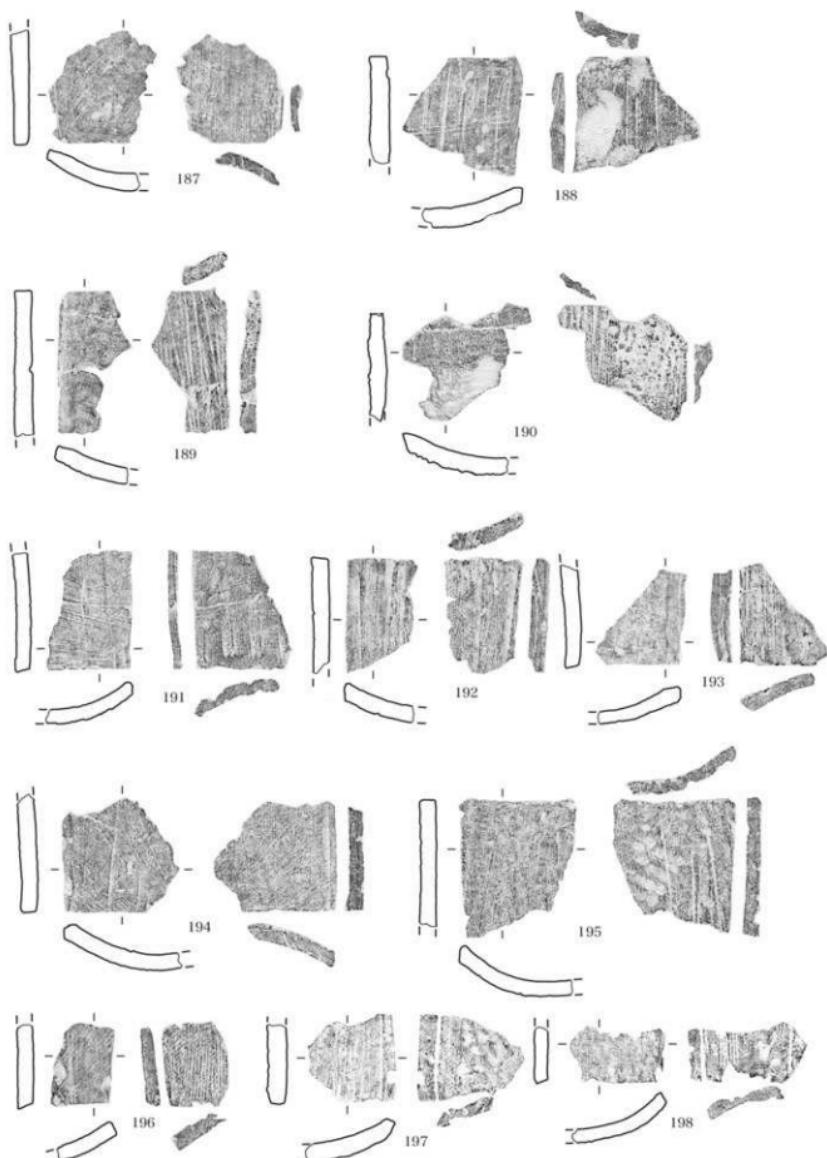
第42図 P-22出土瓦実測図



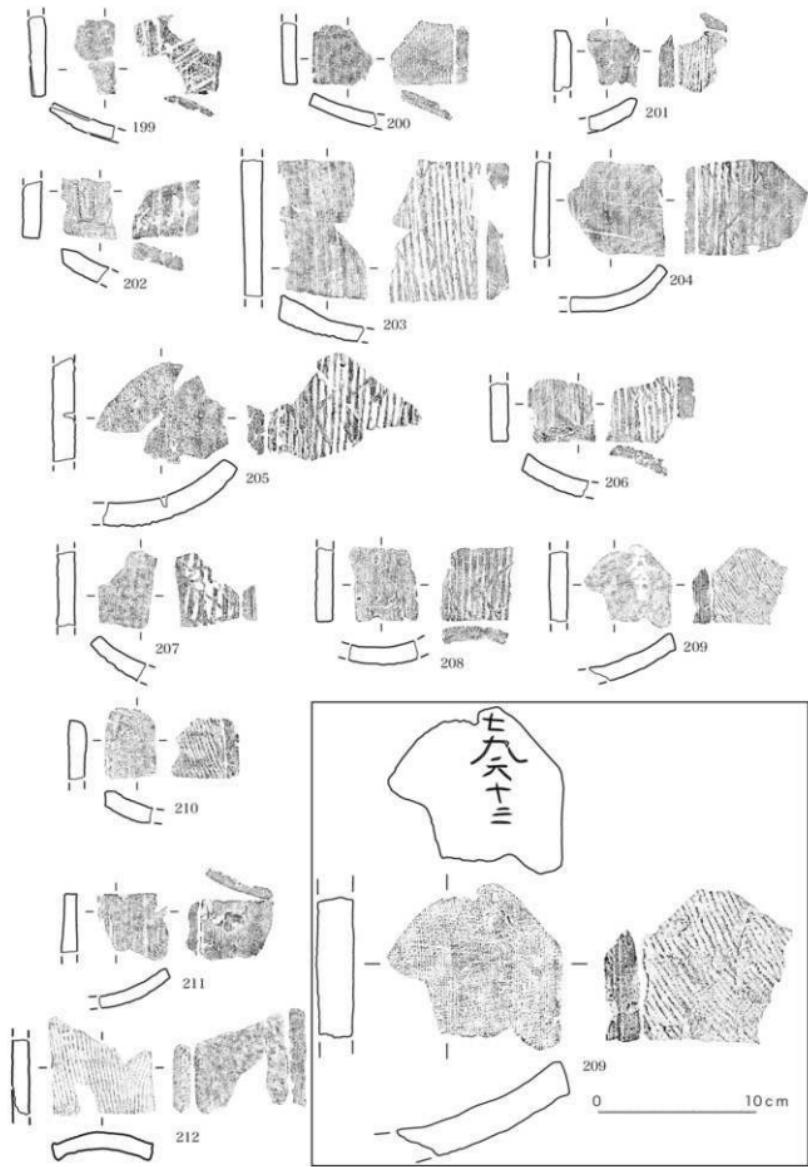
第43図 北調査区出土瓦実測図(1)



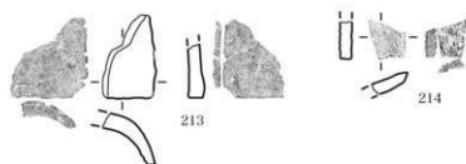
第44図 北調査区出土瓦実測図(2)



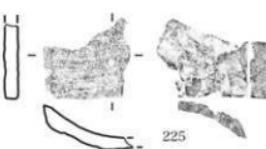
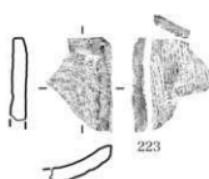
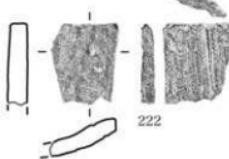
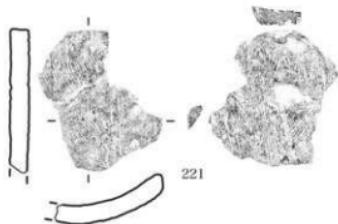
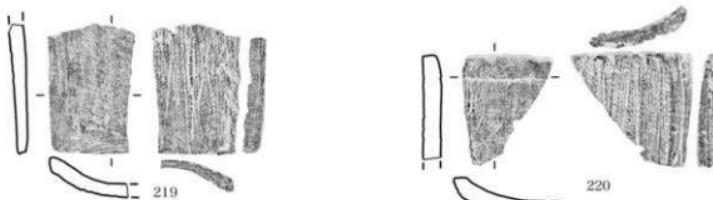
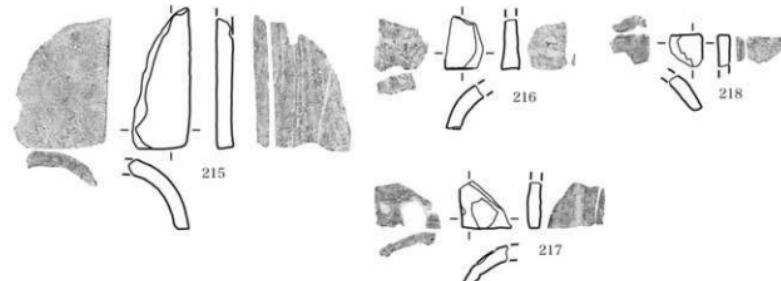
第45図 北調査区出土瓦実測図(3)



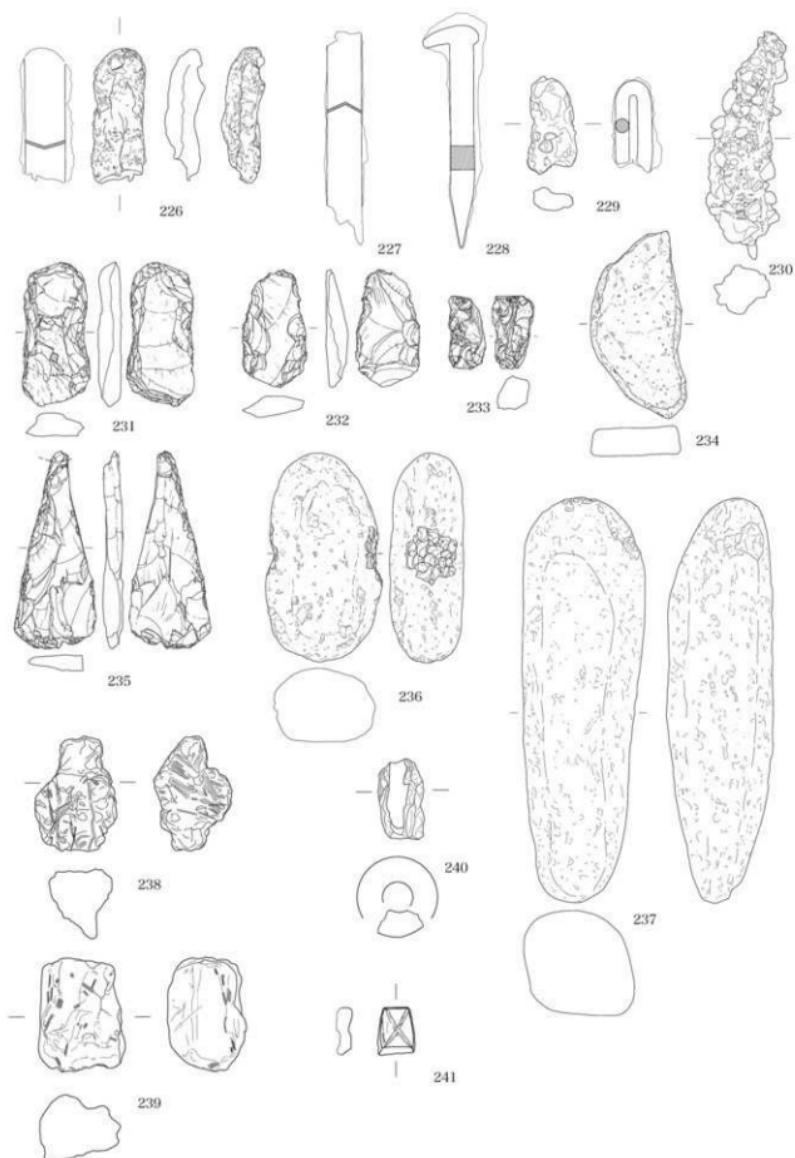
第46図 北調査区出土瓦実測図(4)



第47図 南調査区出土瓦実測図



第48図 遺構外出土瓦実測図



第49図 石器・金属器実測図

## 第2節 平成19年度尼寺南東域の調査

### 1 調査の概要

#### (1) 目的と経過

尼寺南大門想定地東側の築地塀・区画施設及び尼寺回廊南東コーナーの確認を目的として発掘調査を実施した。

その結果、従前の尼寺区画想定ライン上ではまたも築地塀跡などの区画施設は確認できなかった。しかし、史跡指定地南辺の比高差約1.5mの微段丘に沿うように、最大で約0.4mの厚さで黄褐色の表面を叩いた土層が約3mの幅をもって検出された。このタイプの黄褐色土は調査地周辺に本来存在するものではなく、客土したものではないかと思われた。この土層は、北側から徐々に厚みを増しながら南に向かい、その南端では拳大の川原石を見切り石として並べて明確な区画を作っていた。

この土層と石列の性格を把握するため南調査区の西壁に沿ってトレンチを入れてみたところ、区画石列の北側、黄褐色土層の下からは礫層が検出された。この礫層は砂を伴わず、人為的に、おそらくは排水のために設けられたものと思われ、この礫と黄褐色土が地業であることが伺われた。

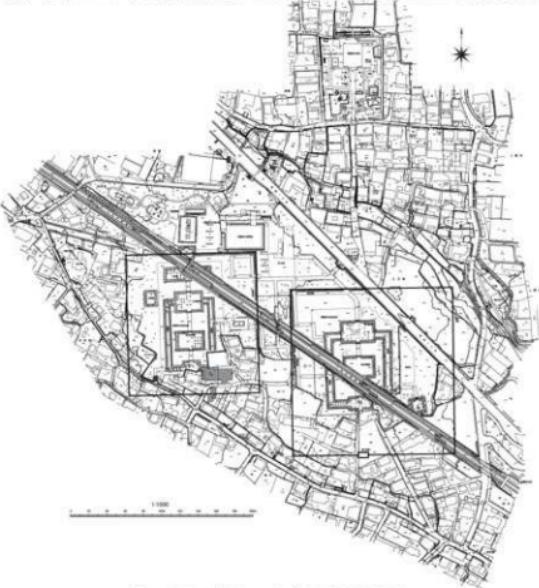
見切り石区画の南側では客土はないものの、本来あるべき千曲川の砂礫層がなく、代わりに暗褐色の土を叩き締めた土層が存在していた。つまり、区画石列を境に、その前後で明らかな地業の痕跡が確認されたのである。なお、覆土からは「元農通寶」が出土している。

尼寺中門東側回廊跡の確認調査では、明確な礫石や栗石、基壇等の確認はまったくできなかつたものの、推定されている尼寺回廊跡に沿うようにピット列が検出されたほか、最大幅約11.5mの湿地もしくは大溝の遺構が検出された。

#### (2) 調査所見

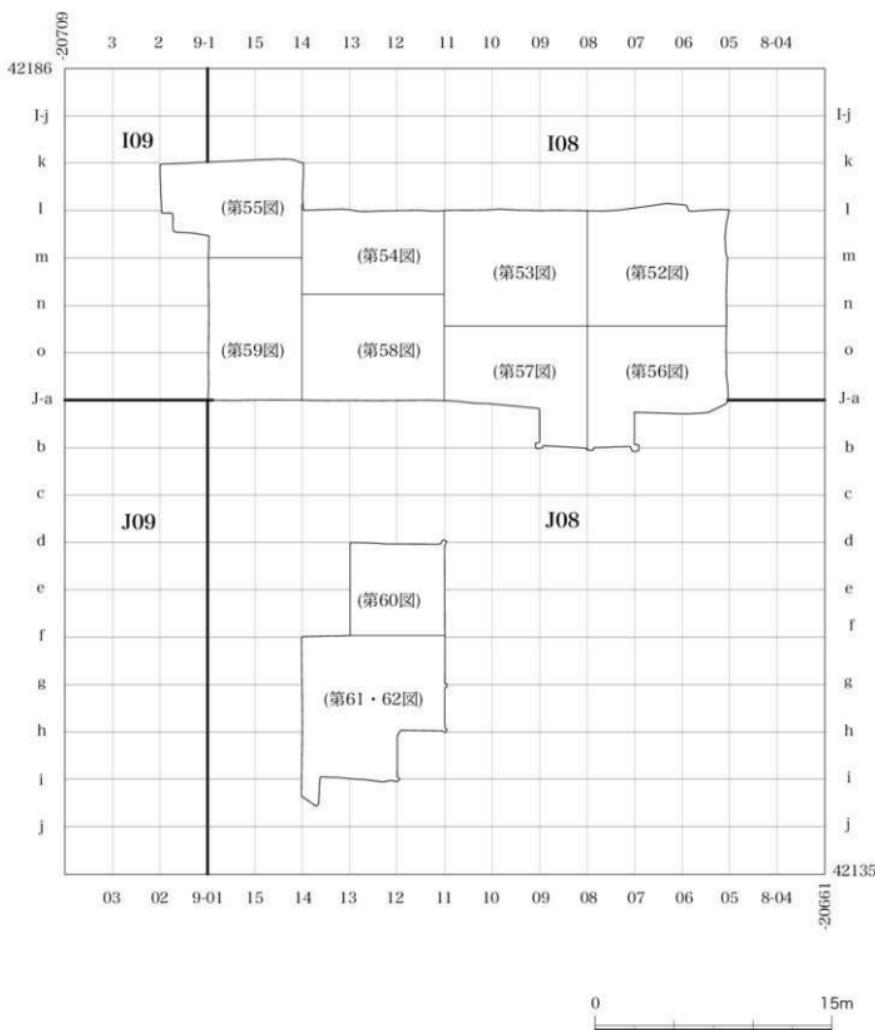
石列は西に追うと尼寺南大門想定地にまっすぐ向かっている。黄褐色の客土とともに区画施設を形成したものか、最終的に確認できなかつたが、各地の国分寺跡の区画が、地形に準じてかならずしも方形を呈していないことを鑑みると、可能性を否定しきれないものがあった。

しかし、その場合南大門と中門とが近接しすぎてしまう点がこの想定のネックとなっている。あるいは従前の想定どおり、千曲川の氾濫による大水で尼寺の南西の区画施設が破壊された後に、段丘に沿って臨時に簡便な区画施設を形成したものとも思われる。



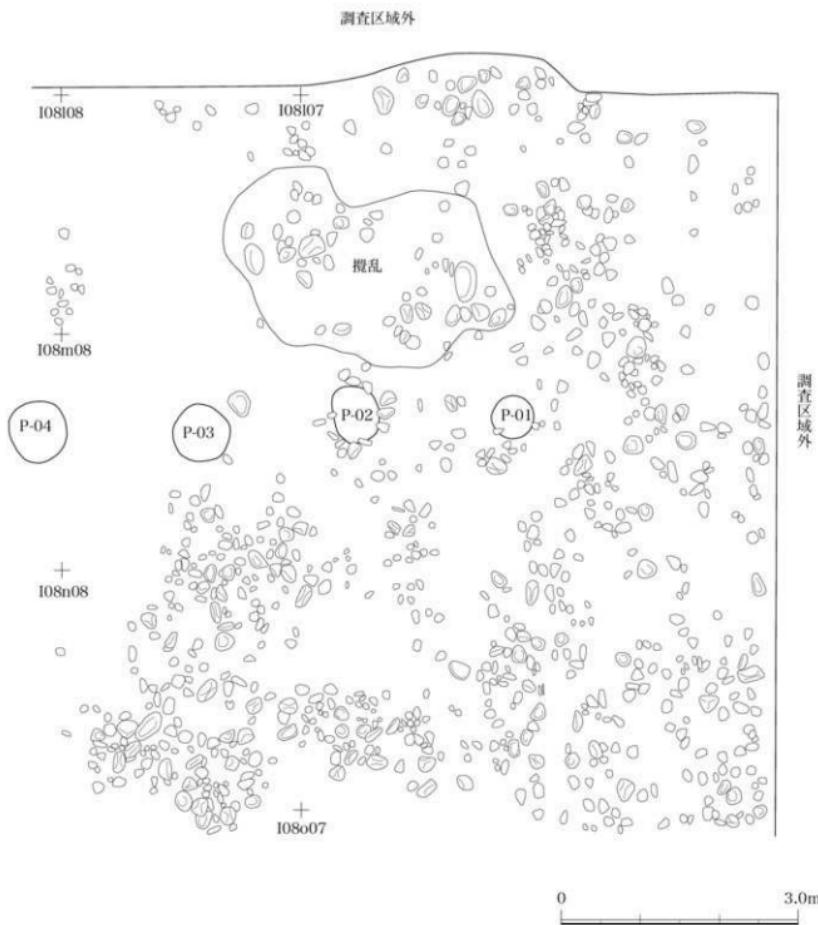
第50図 平成19年度調査区位置図

## 2 検出遺構

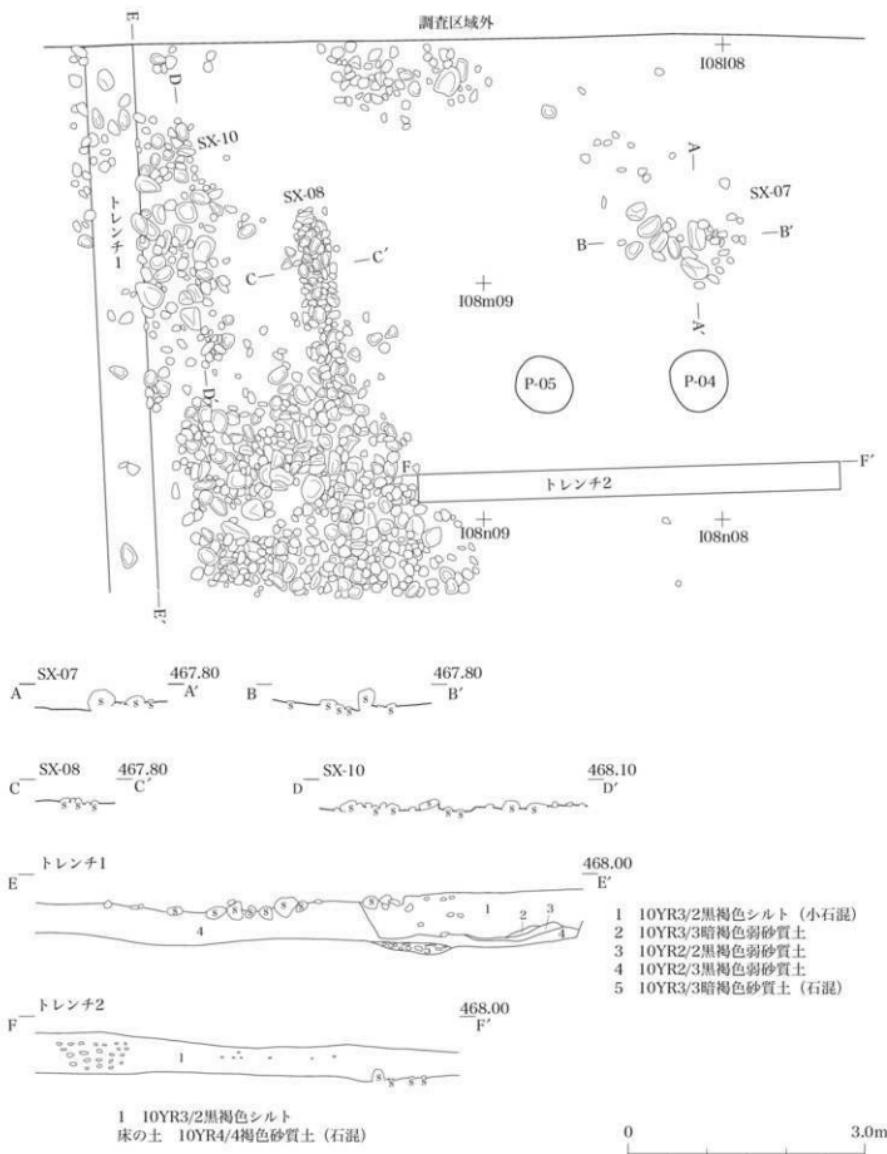


図中のJ09等は大グリッドを示し、小グリッドは南北の小文字アルファベットと東西の01～15の組合せで示した。()は図版割りの数字である。

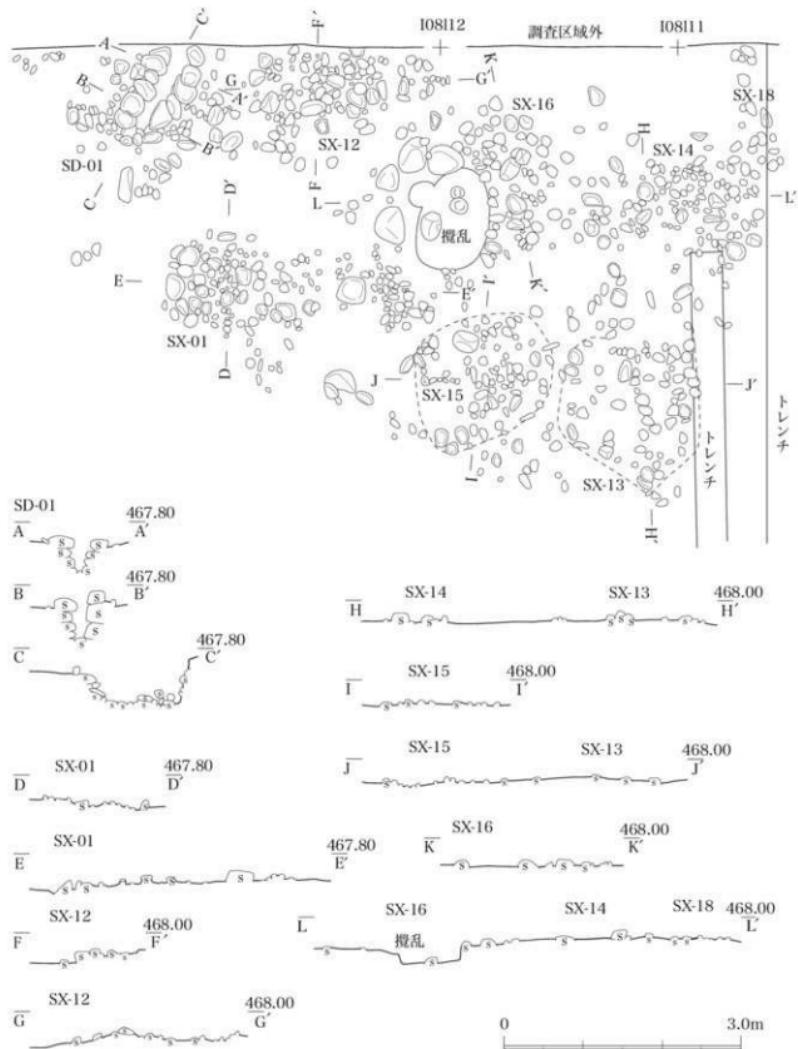
第51図 平成19年度調査区及び実測団区割り図



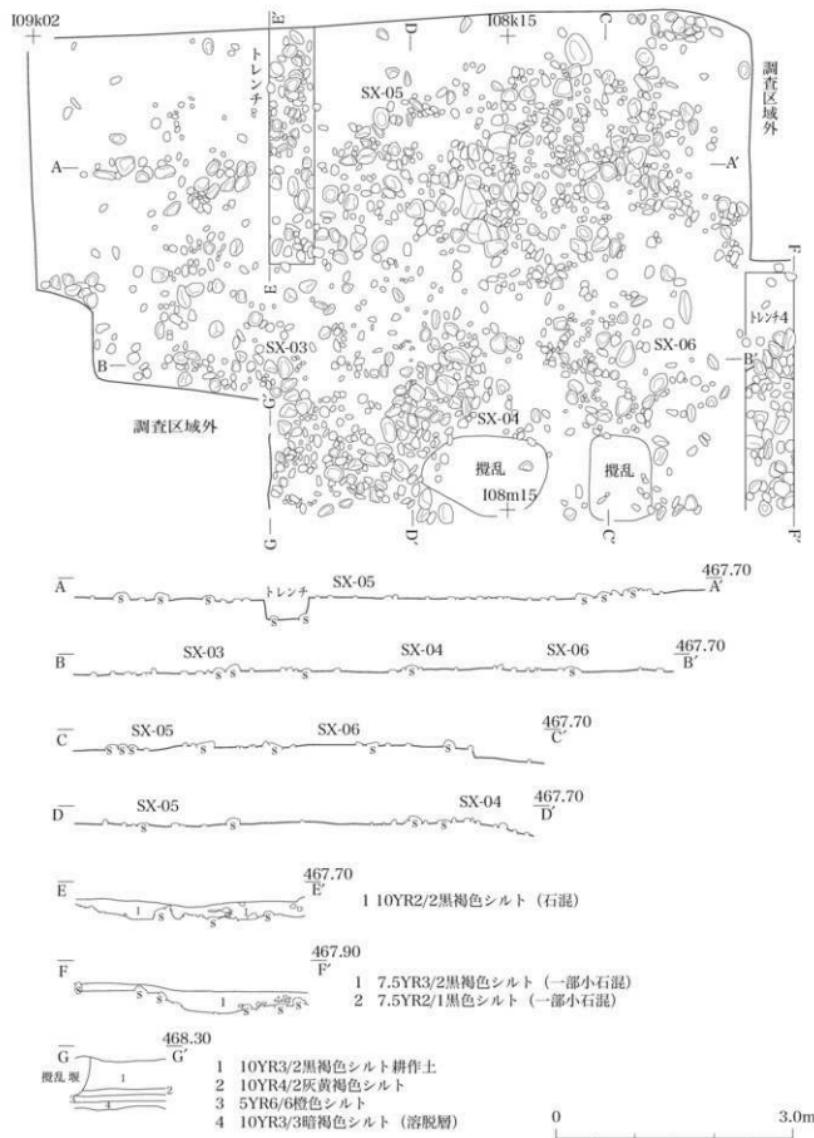
第 52 図 平成 19 年度調査区実測図(1)



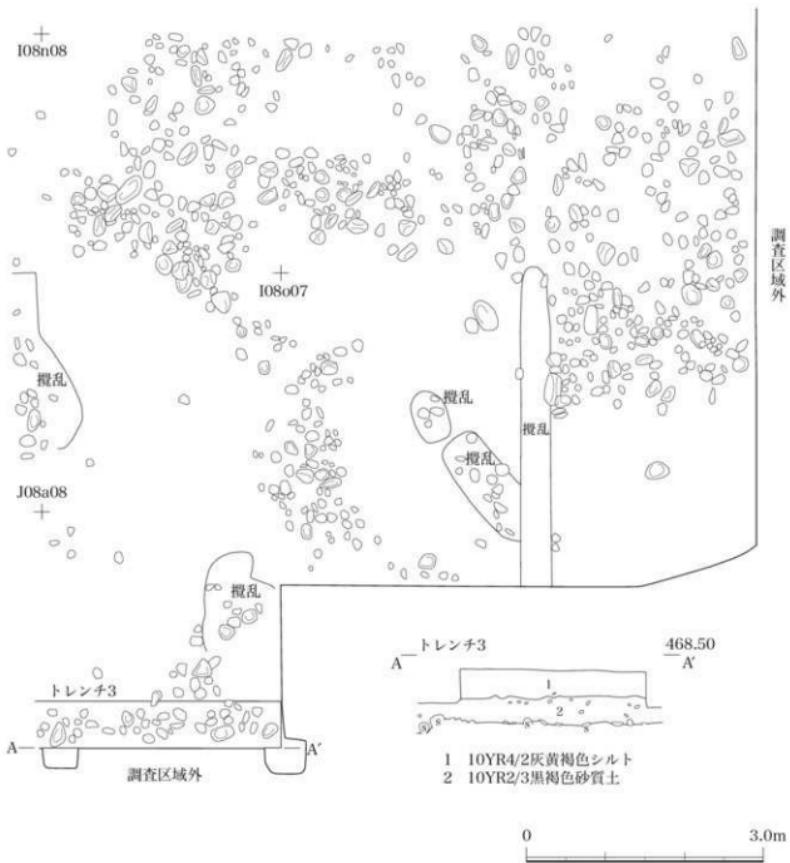
第 53 図 平成 19 年度調査区実測図(2)



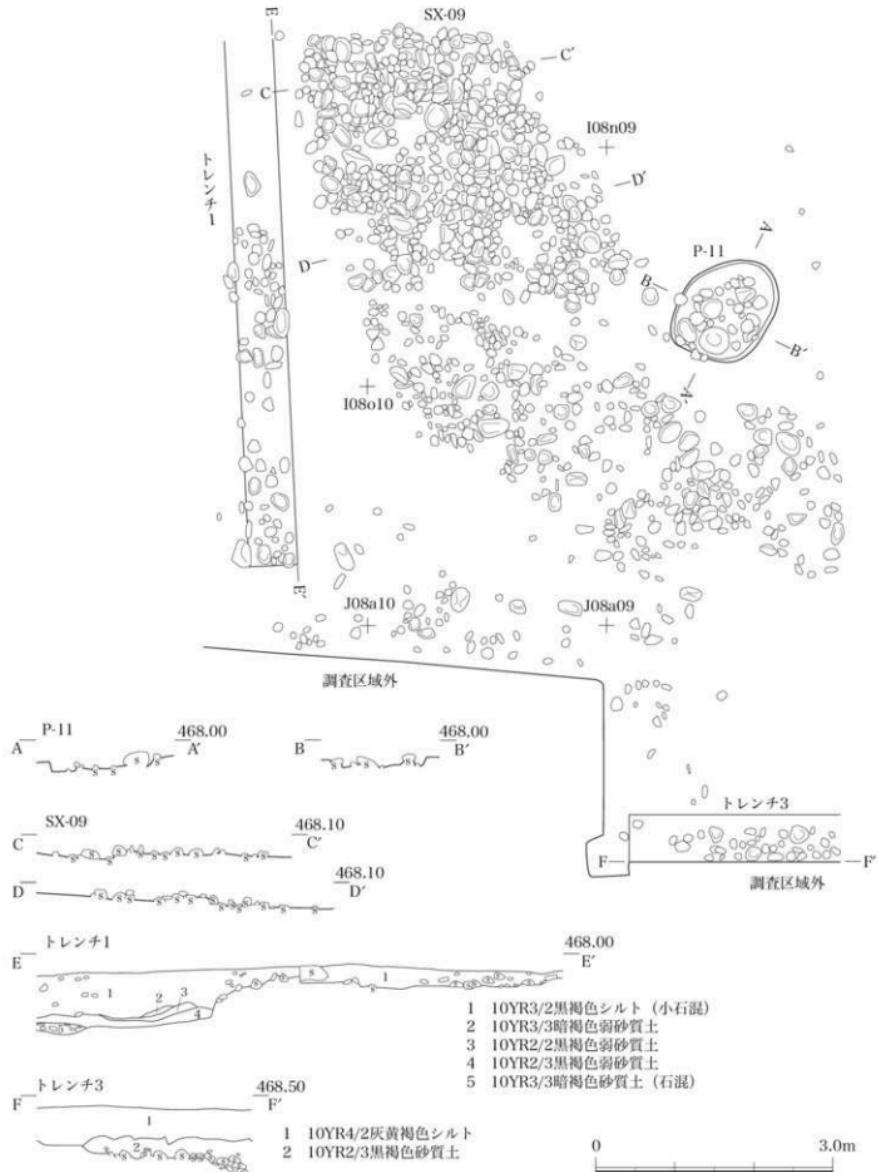
第54図 平成19年度調査区実測図(3)



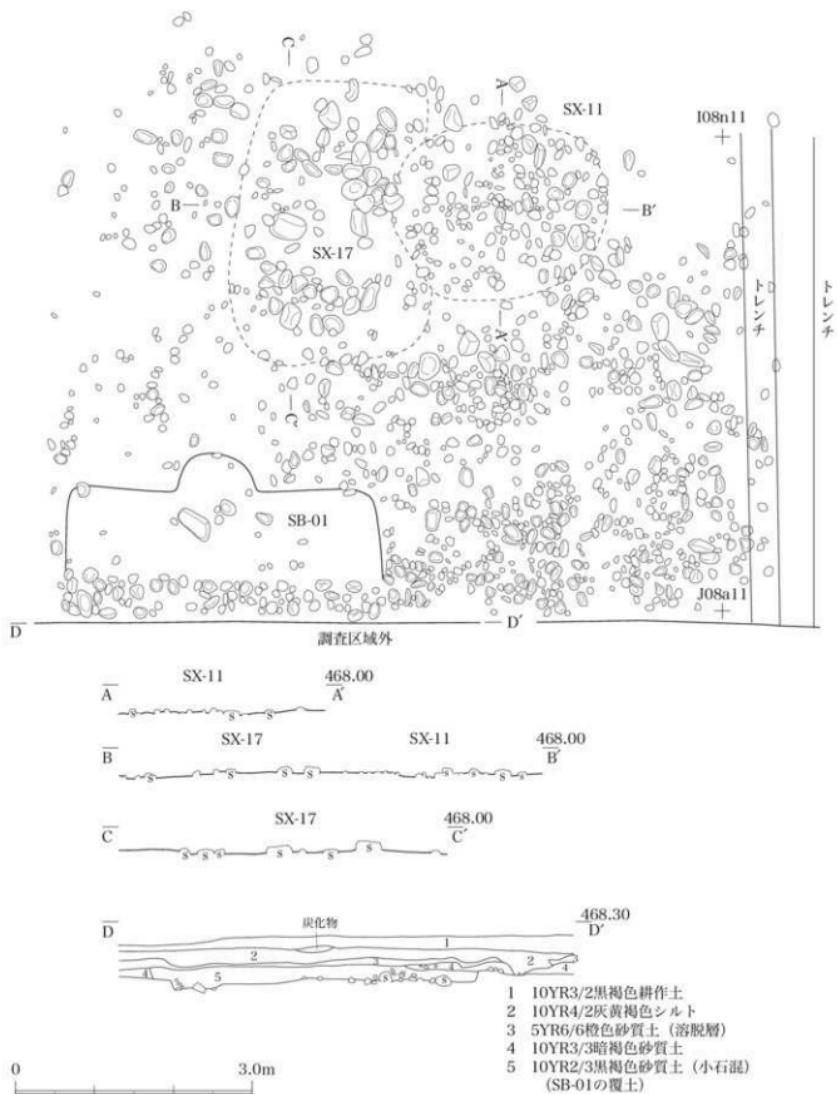
第55図 平成19年度調査区実測図(4)



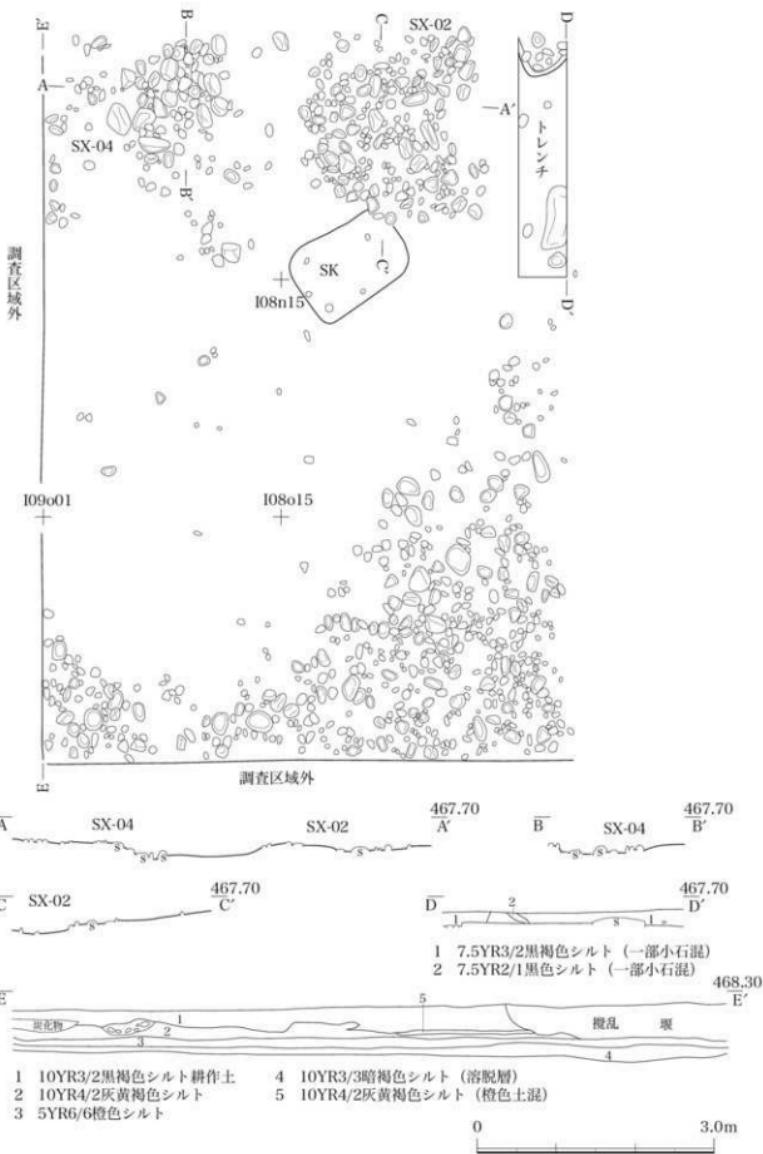
第56図 平成19年度調査区実測図(5)



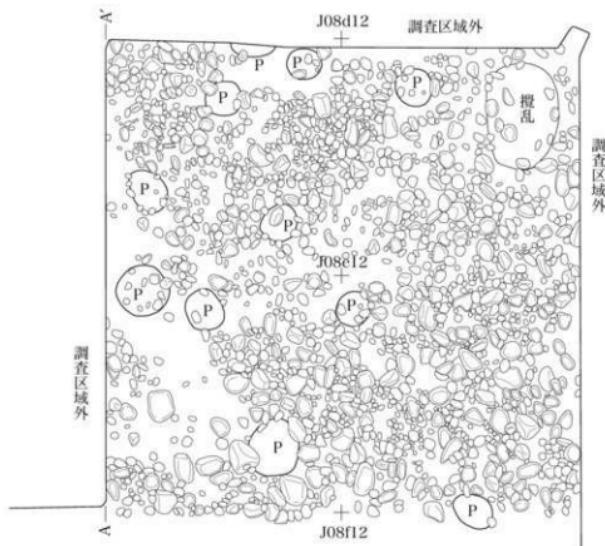
第57図 平成19年度調査区実測図(6)



第58図 平成19年度調査区実測図(7)



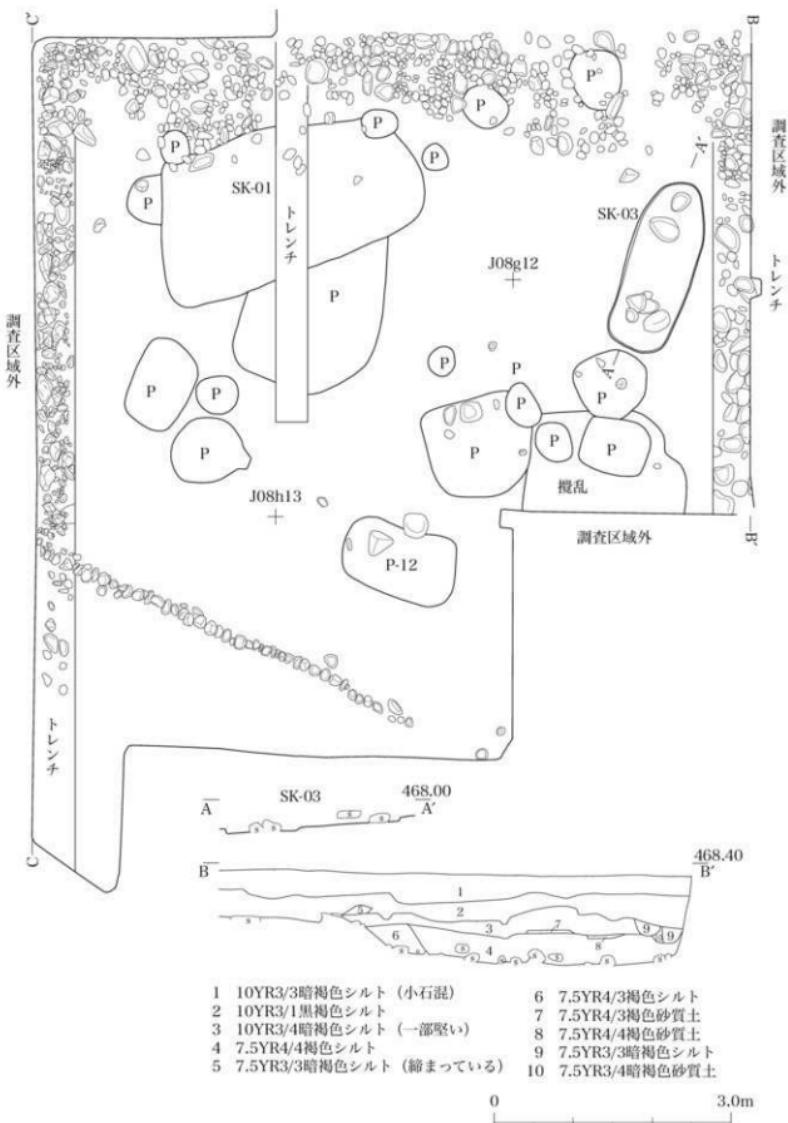
第59図 平成19年度調査区実測図(8)



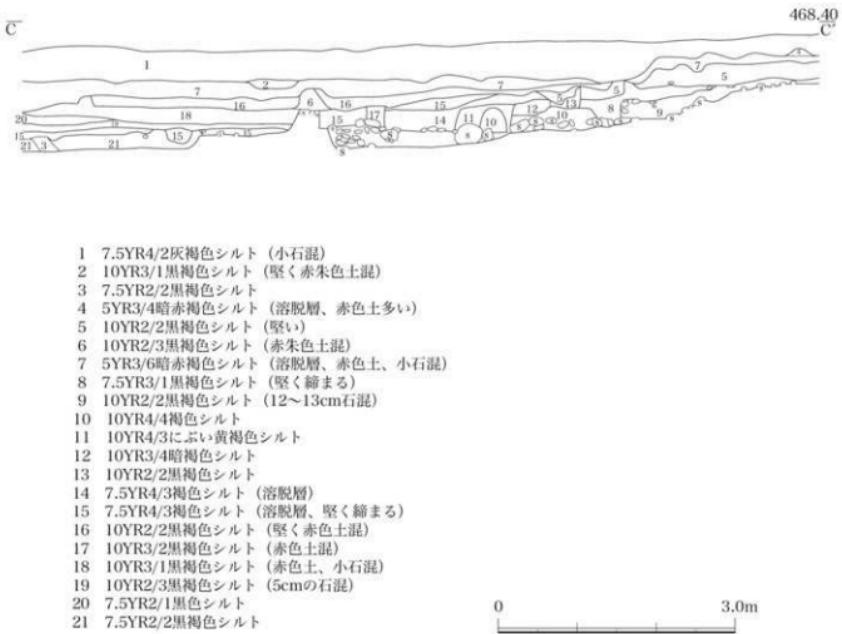
- 1 5YR3/2暗赤褐色耕作土（堅い）
- 2 7.5YR4/2灰褐色シルト（小石混）
- 3 10YR4/2灰黄褐色シルト（堅く締まる）
- 4 5YR3/4暗赤褐色シルト（溶脱層、赤色土多い）
- 5 10YR2/2黒褐色シルト
- 6 7.5YR3/2黒褐色シルト（3~6 cm石混）
- 7 5YR3/6暗赤褐色シルト（溶脱層、赤色土、小石混）



第 60 図 平成 19 年度調査区実測図 (9)

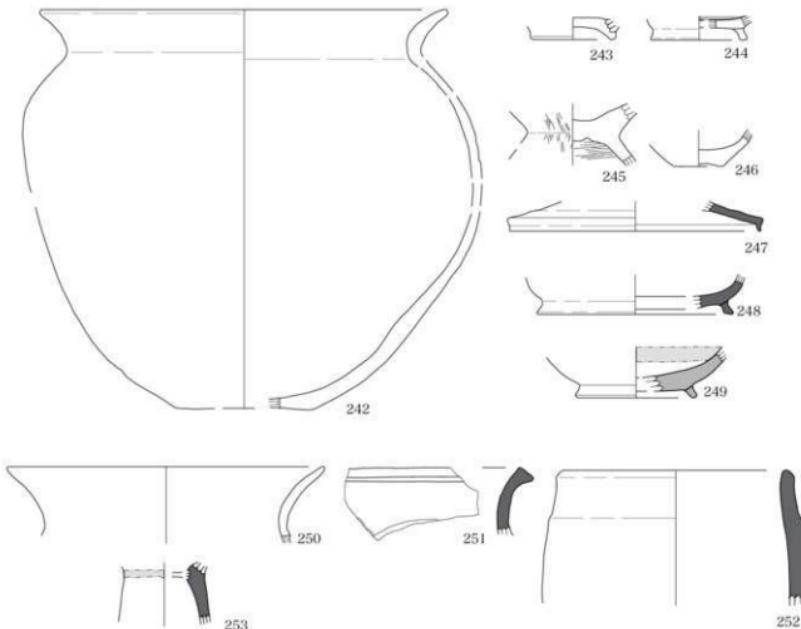


第61図 平成19年度調査区実測図(10)

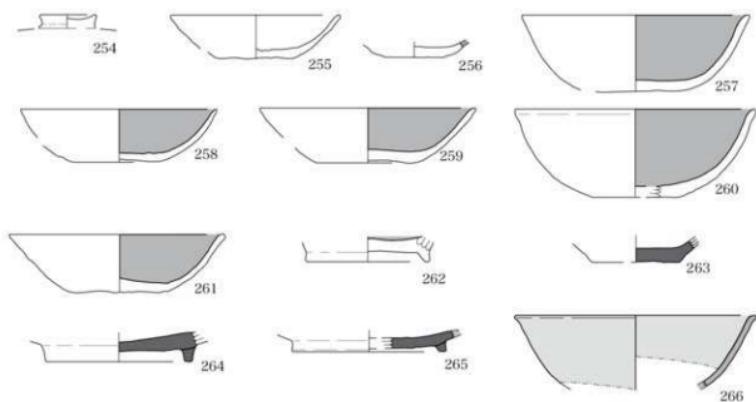


第62図 平成19年度調査区実測図(11)

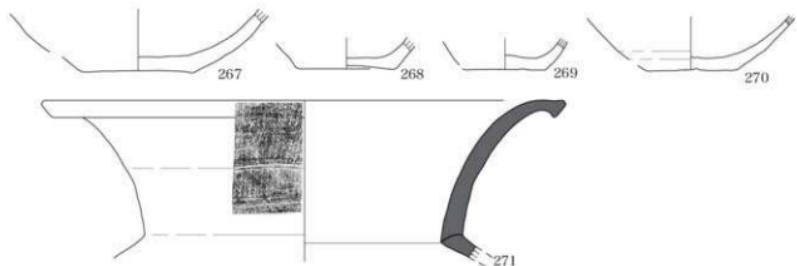
3 出土遺物



第63図 北調査区出土遺物実測図



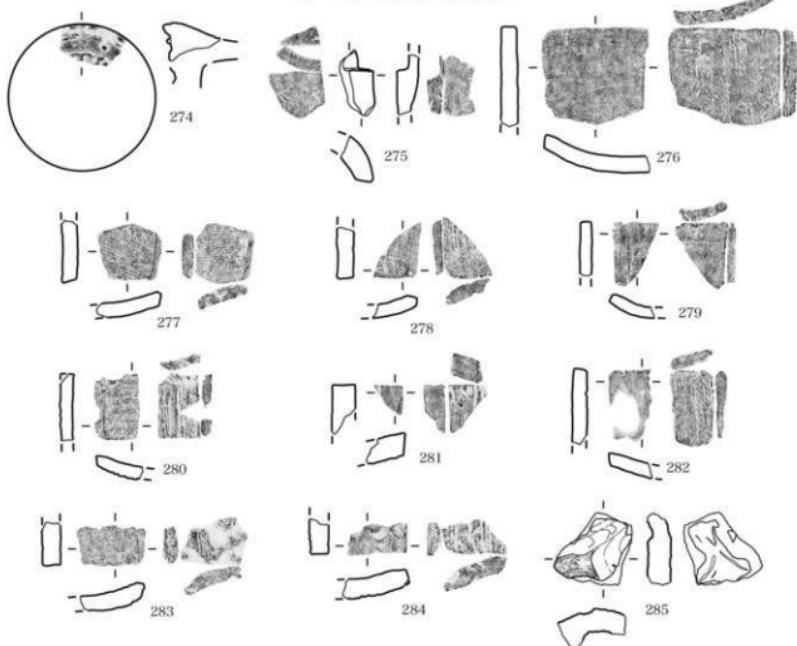
第64図 南調査区出土遺物実測図(1)



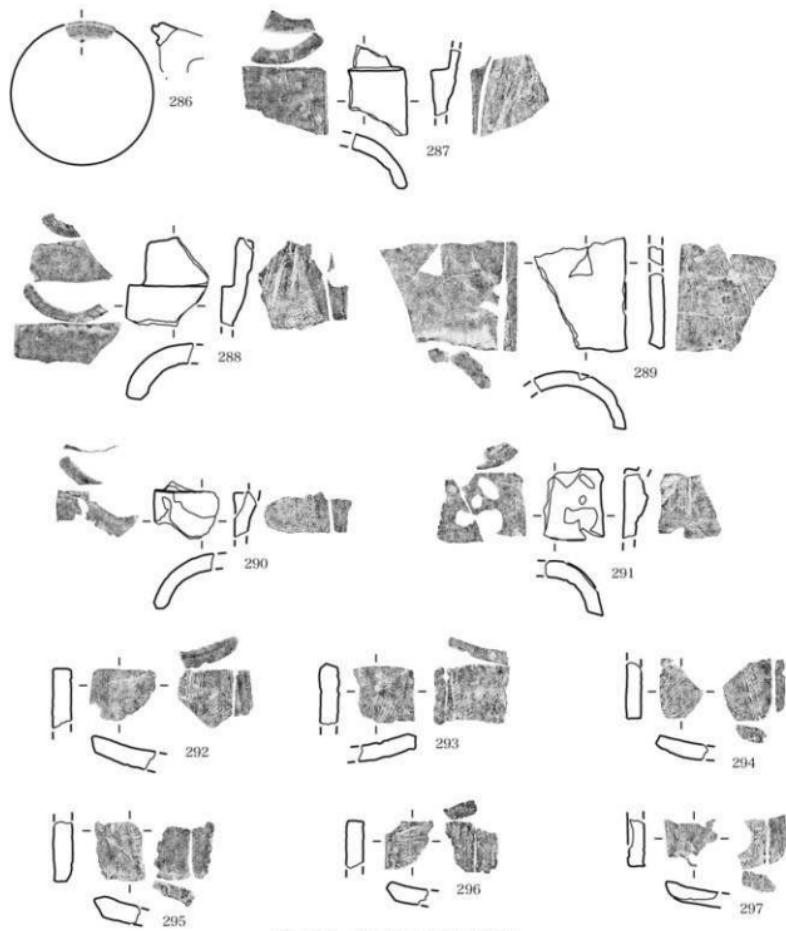
第65図 南調査区出土遺物実測図(2)



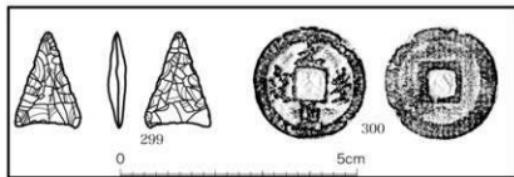
第66図 遺構出土瓦実測図



第67図 北調査区出土瓦実測図



第68図 南調査区出土瓦実測図



第69図 南調査区出土土製品実測図

第70図 南調査区出土石器及び銅錢実測図

## 第3節 平成20年度尼寺南西域の調査

### 1 調査の概要

#### (1) 目的と経過

平成19年度の尼寺南東域の調査で想定された、微段丘に沿った黄褐色の客土層と川原石の区画が、南大門想定地西側に延びているか、また、これが尼寺の区画施設であった場合、どこで北に折れて西の区画をつくるのか、を目的として発掘調査を実施した。

この区画の想定が確認されれば、従前は一辻80mの区画と想定されていたものが、地形に合わせて台形の区画をつくっていたことになる。のことにより、微段丘をくだけて無理に正方形を作っていた区画施設の想定が自然なものとなり、かつ、東山道の想定にも大きな影響を与える。

調査は、従前の尼寺西辺の築地堀想定ラインの南側を「西調査区」とし、尼寺南大門想定地西側に隣接する箇所を「東調査区」として実施した。

東調査区は現在南側を通る市道との比高差約1.5mを計る緩やかな南下がりの地形となっているが、この地形は史跡公園の造成時に大きく埋め立てられたものであることが、前土地所有者からの聞き取りと往事の写真から確認されている。かつては、現市道に向かって3~4段の段々畑を作りながら傾斜していたようである。この調査区の中央にも比高差約0.3mの石積みが存在しており、これが平成19年度調査で確認された石列の延長線上にあった。

西調査区も全体として南に傾斜しており、東側は史跡公園造成時に尼寺伽藍面をフラットに展示するために大きく埋め立てられ、比高差約2mの擁壁となっている。前述の市道には調査区の南端で比高差約0.7mで緩やかに接している。調査区の中心には比高差約1m~0.2mの東高西低の比較的規模の大きい石垣が存在していた。この石垣のラインが微段丘であり、前述の東調査区の石積み、平成19年度調査で検出された石列と直線的につながるものである。

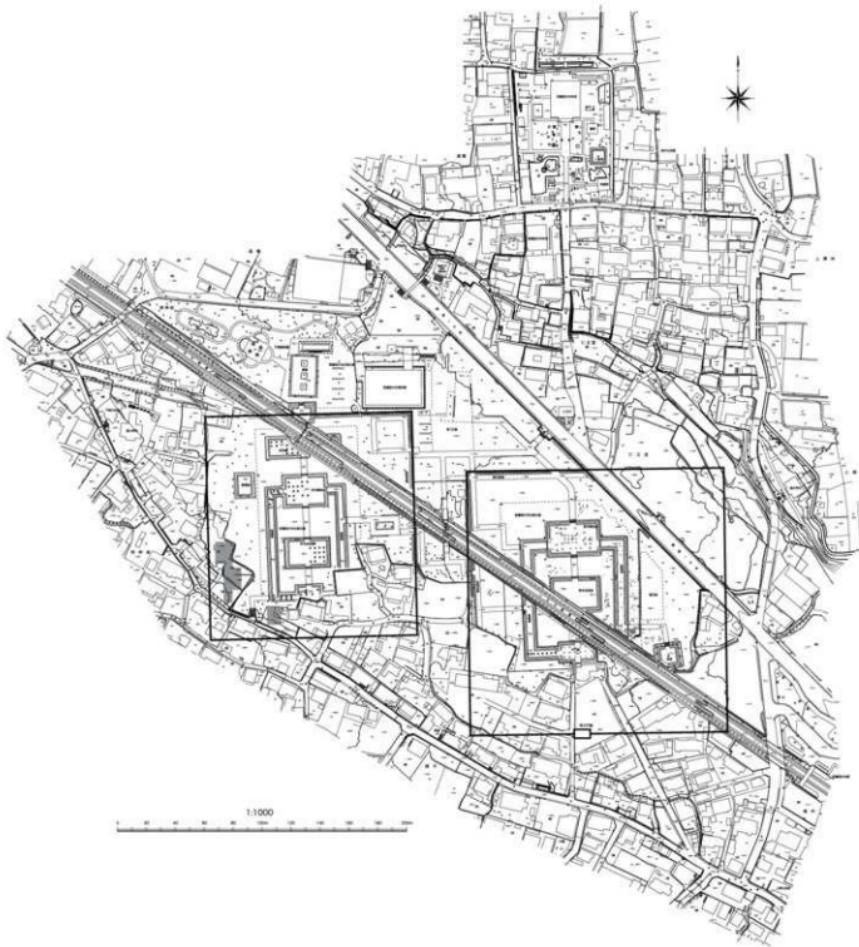
また、西調査区の南西と西に隣接する宅地とは、比高差約0.8~0.4mの石垣が構築されている。この調査区の西辺が従前の尼寺の西辺南側築地堀想定ラインとなっており、あわせてこの確認も調査の目的とした。

#### (2) 調査所見

調査の結果、平成19年度に想定した区画施設の延長は確認されなかった。また、従前の尼寺の西辺南側築地堀想定ラインも検出されず、尼寺域の確定はまたも今後の課題となってしまった。

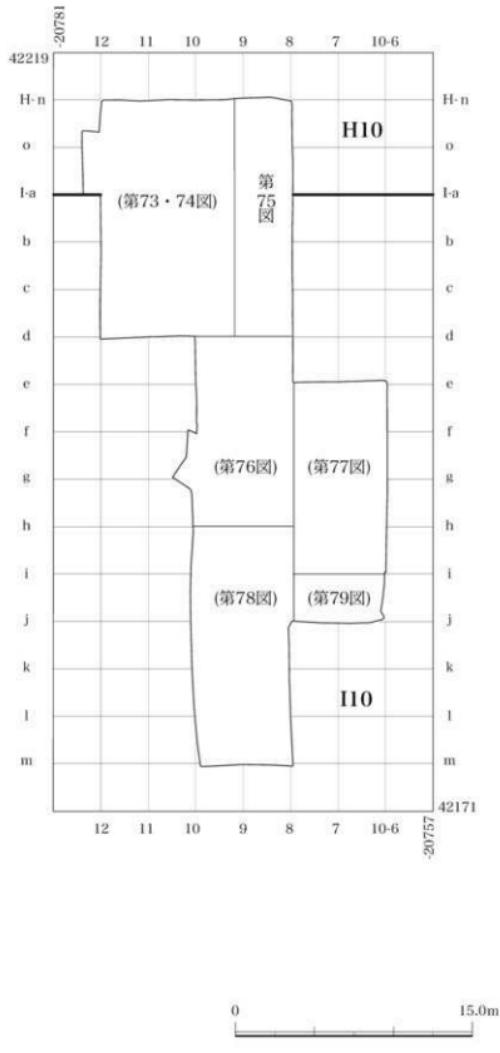
一方、従前は想定されていなかった新たな建物の基壇造成跡が検出された。この基壇造成跡は、南西下がりの傾斜地で、何層にも黒色土と黄褐色土を交互に積んでは叩く版築をして平場を造成しており、何らかの建物をここに造営しようとしていたことが伺われる。しかし、明確な建物跡は今回確認されず、中山敏史氏や佐藤信氏の教示によれば、基壇だけの未完で終わった可能性も指摘された。

また、石垣の上段からは古墳時代後期の堅穴住居址が2件検出されており、尼寺西側の明神前遺跡の一部と思われる。



第71図 平成20年度調査区位置図

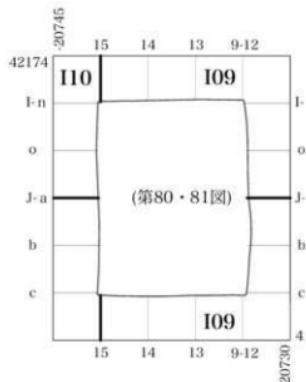
## 2 検出遺構

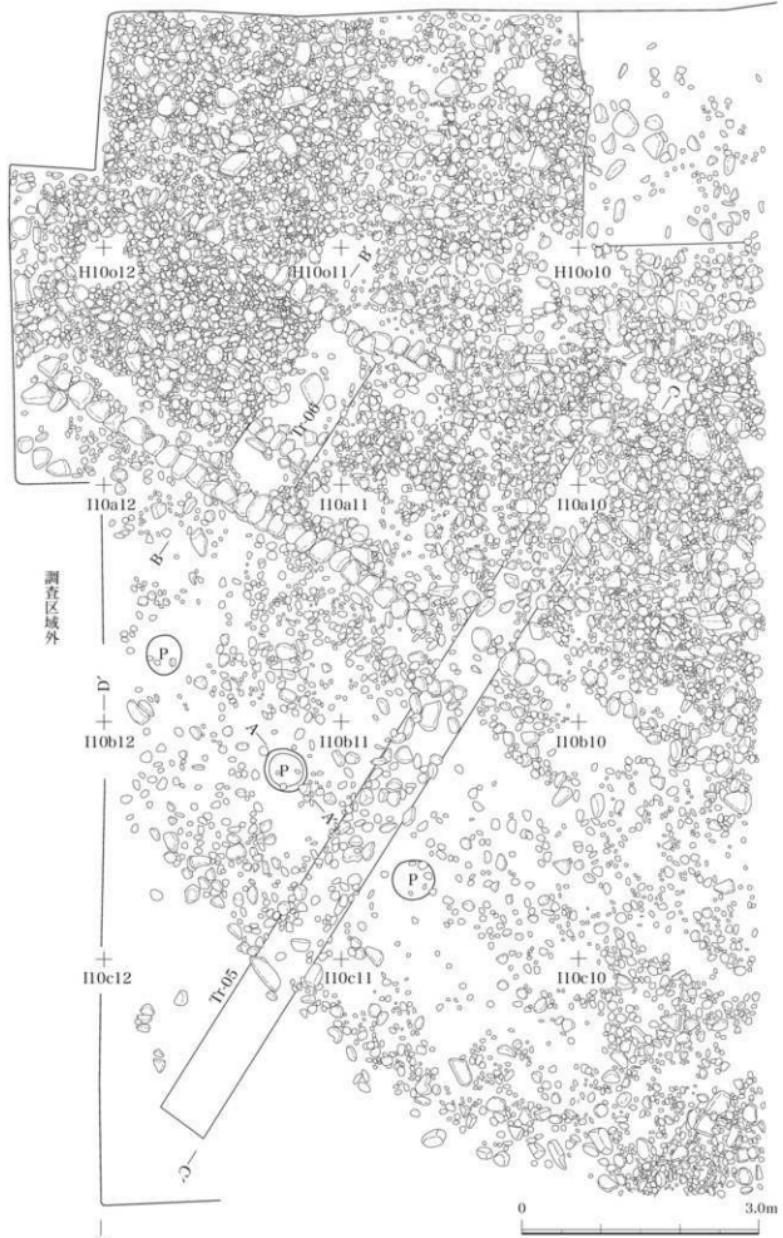


図中の H10 等は大グリッドを示し、小グリッドは南北の小文字アルファベットと東西の 01 ~ 15 の組合せで示した。() は図版割りの数字である。

トと東西の 01 ~ 15 の組合せで示した。() は図版割りの数字である。

第 72 図 平成 20 年度調査区及び実測図区割り図





第73図 平成20年度調査区実測図(I)

A—1—A' 465.40

1 7.5YR2/2黒褐色シルト



- 1 10YR3/3暗褐色砂質土（大粒）  
2 10YR3/3暗褐色砂質土（細粒）



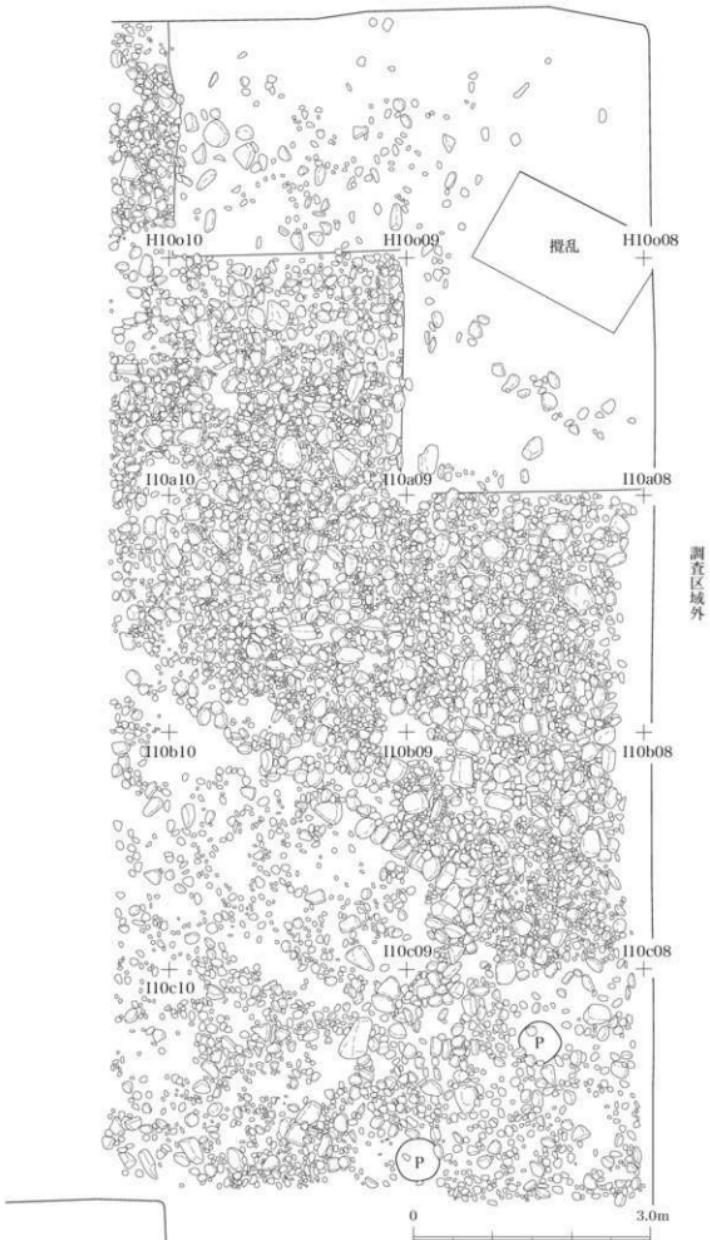
- 1 10YR3/4暗褐色砂質土（大粒）  
2 7.5YR2/2黒褐色シルト  
3 10YR2/2黒褐色シルト  
4 10YR3/3暗褐色砂質土  
5 10YR4/2灰黄褐色砂質土  
6 7.5YR2/3極暗褐色シルト



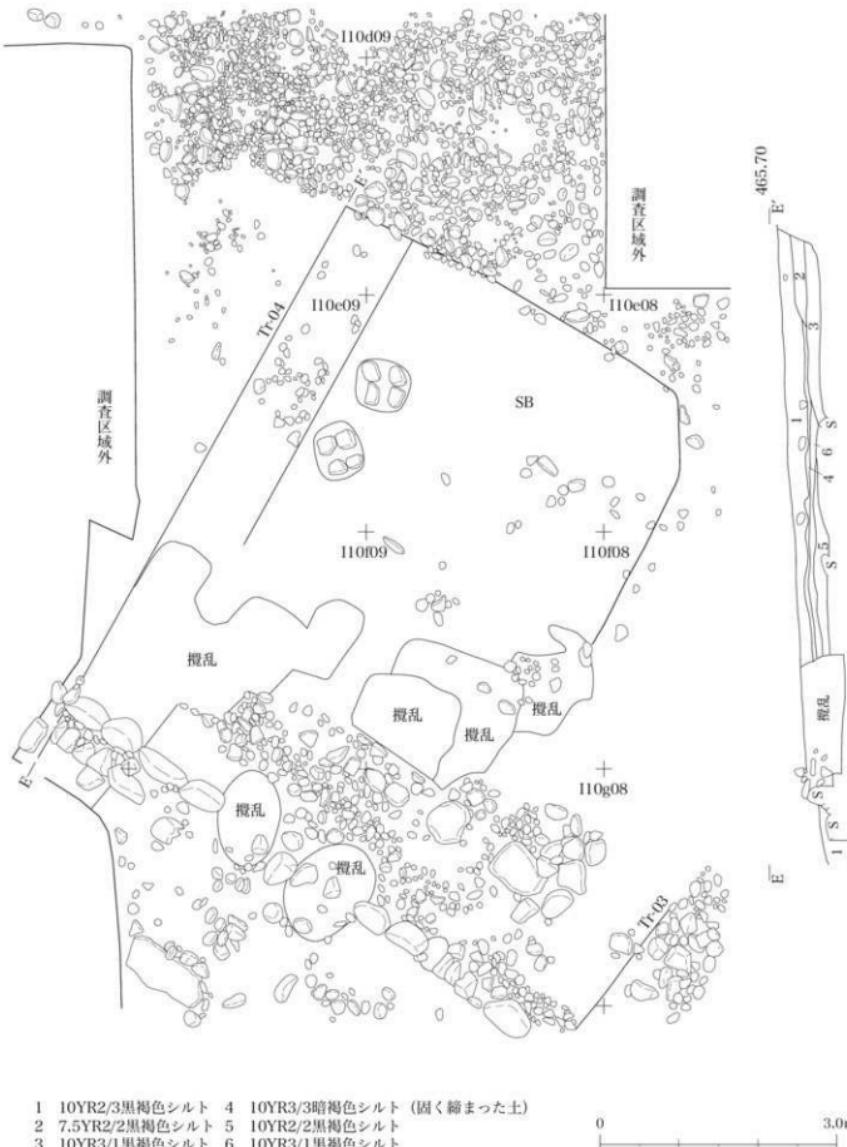
- 1 7.5YR2/3極暗褐色砂質土（砾、瓦、小石混）  
2 コンクリート  
3 7.5YR3/2黒褐色砂質土



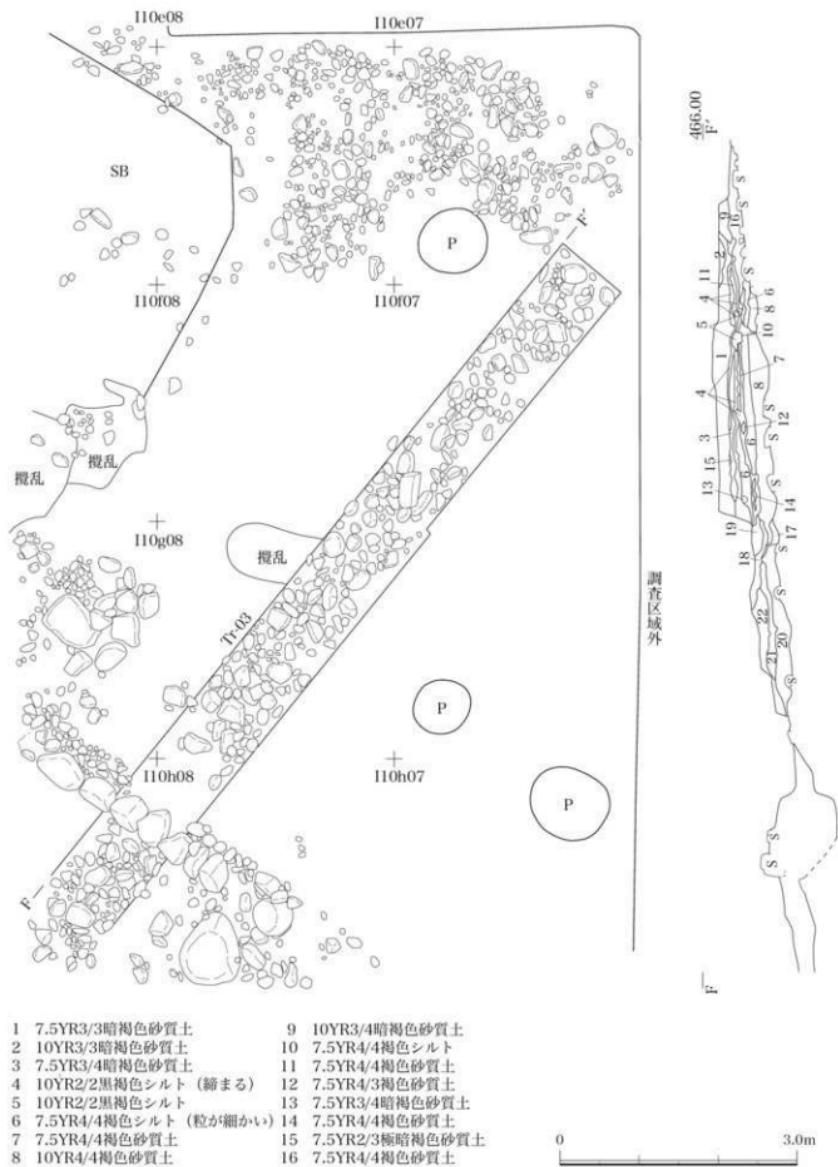
第74図 平成20年度調査区実測図(2)



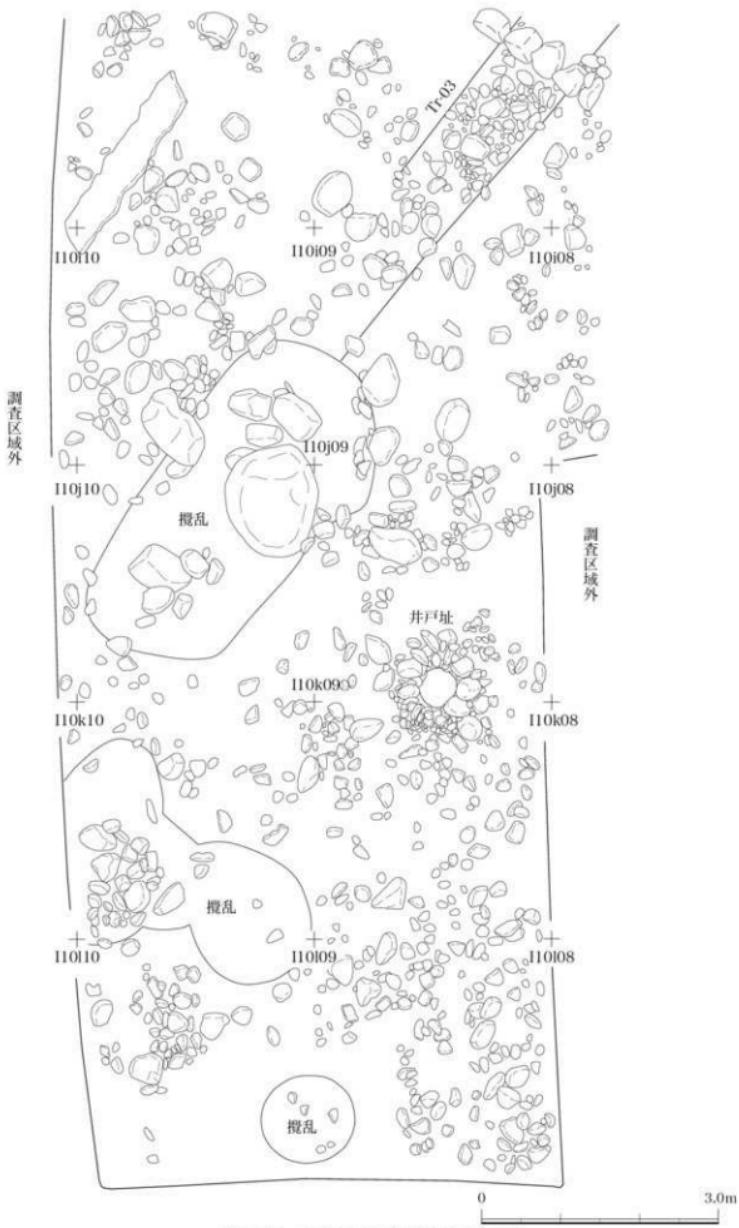
第75図 平成20年度調査区実測図(3)



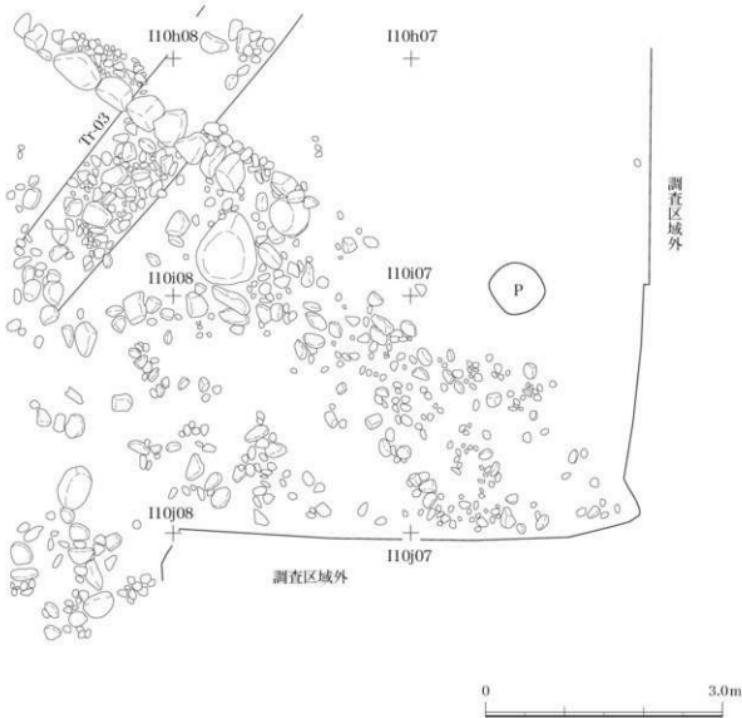
第76図 平成20年度調査区実測図(4)



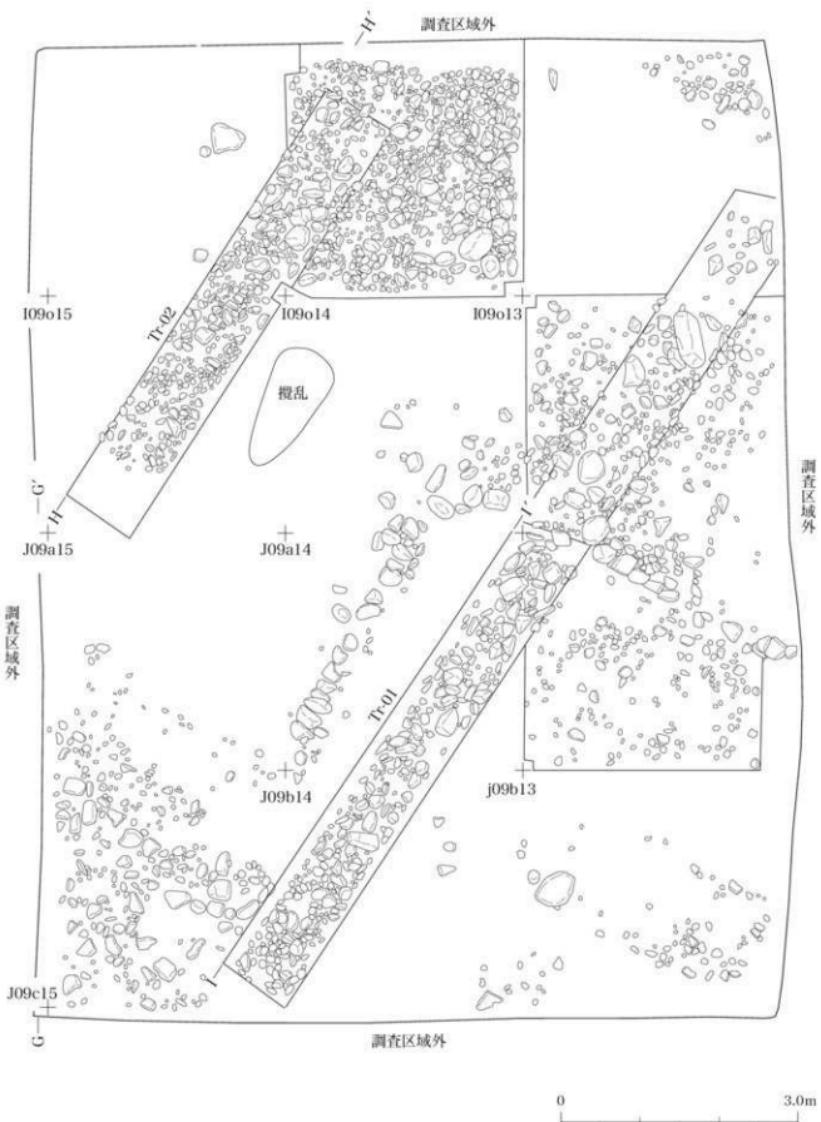
第77図 平成20年度調査区実測図(5)



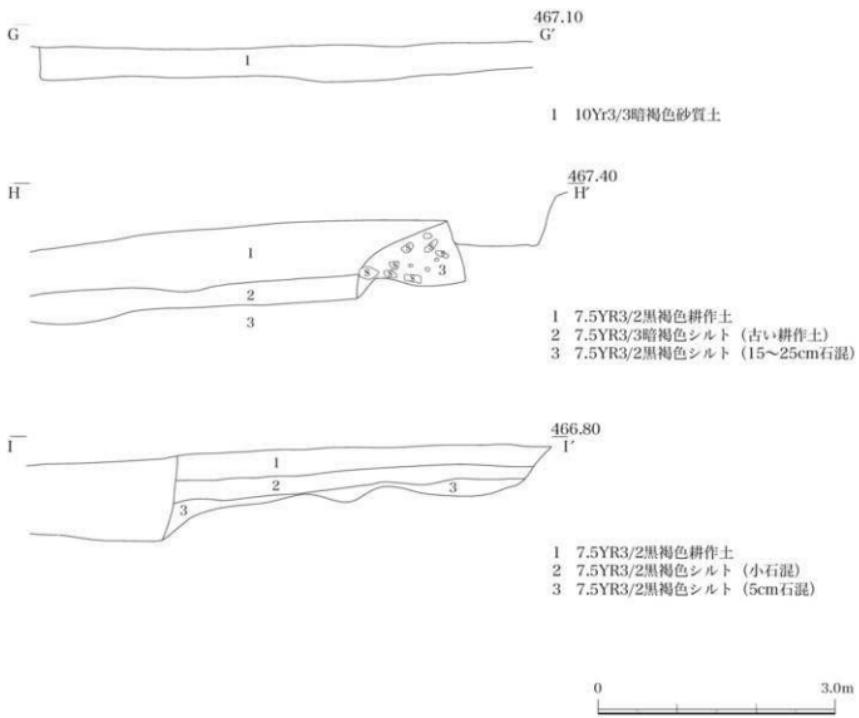
第78図 平成20年度調査区実測図(6)



第 79 図 平成 20 年度調査区実測図 (7)

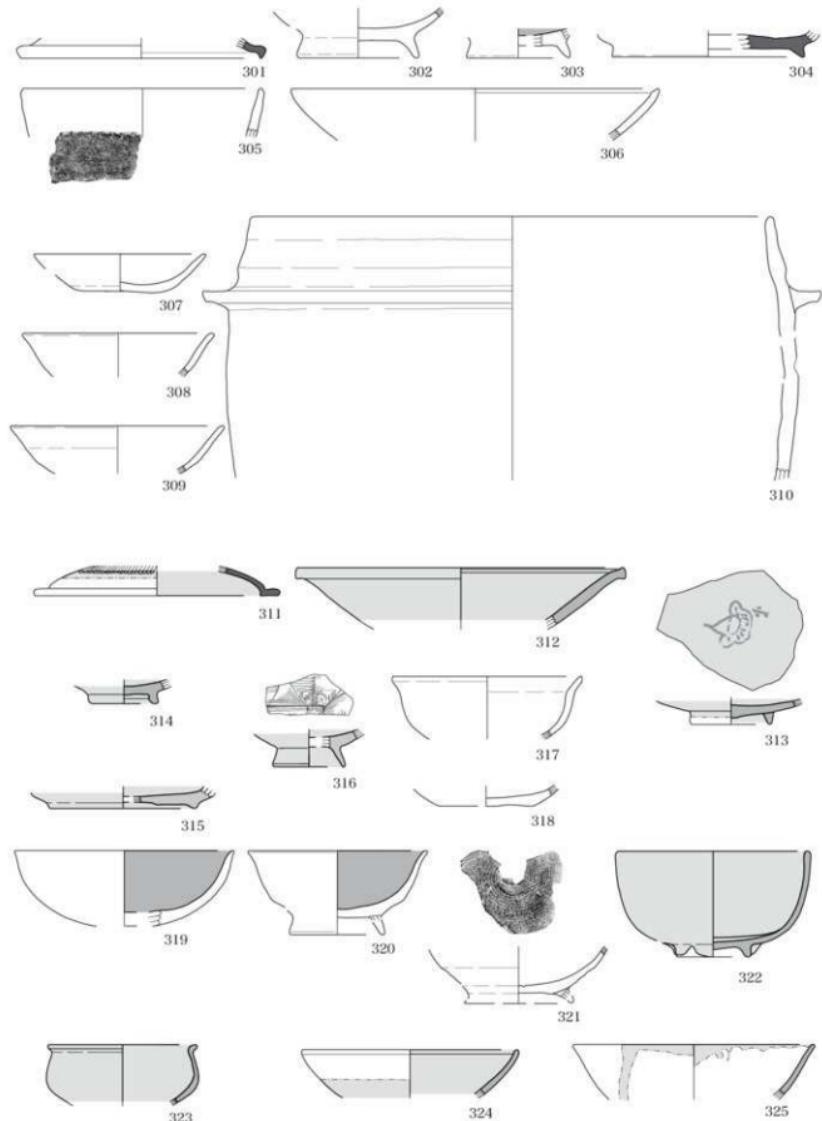


第80図 平成20年度調査区実測図(8)

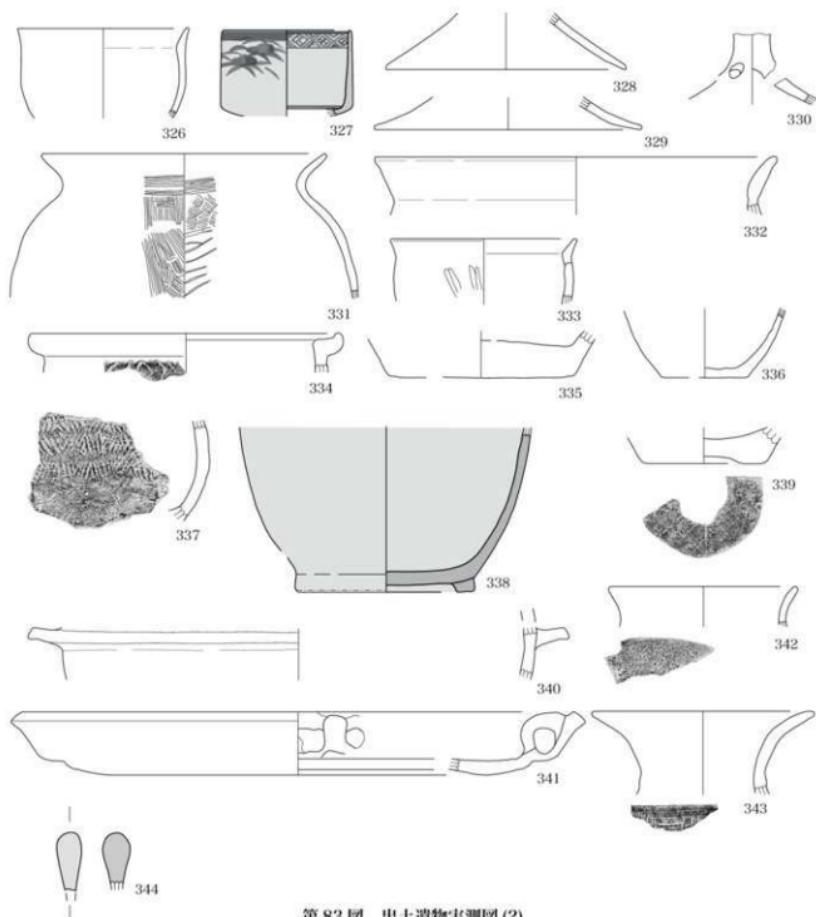


第 81 図 平成 20 年度調査区実測図(9)

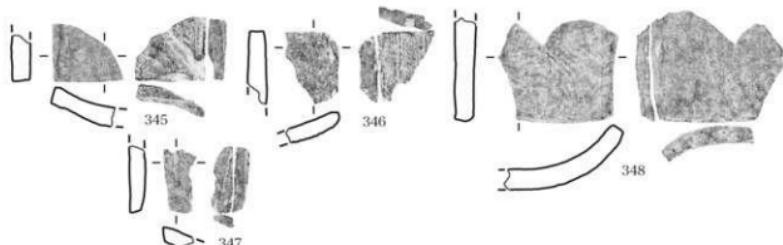
3 出土遺物



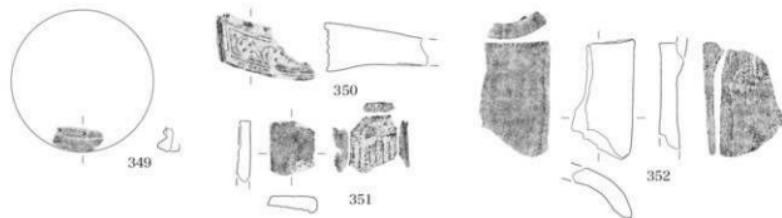
第82図 出土遺物実測図(1)



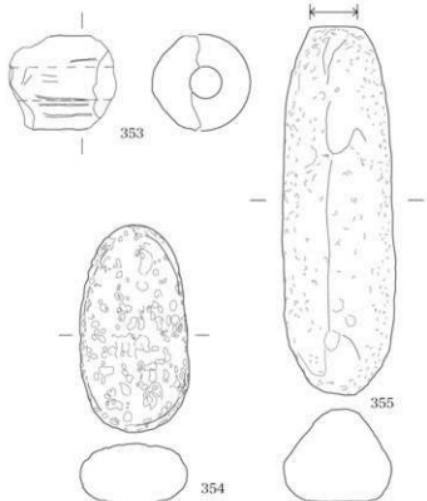
第83図 出土遺物実測図(2)



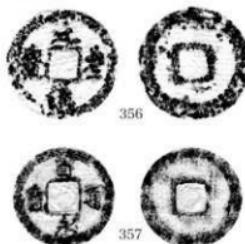
第84図 出土瓦実測図(1)



第85図 出土瓦実測図(2)



第86図 出土土製品・石器実測図



第87図 出土銅錢実測図(S=1/1)

## 第4節 遺物観察表

1 平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物

土器										備考
回数	形名	造形	内底	外底	底端	外側色	内側色	底端・形態	外品種要	内品種要
27	1 SB 01	直底器 直	3.8	2.6	15.0	1/2	板木縫～天井部	粗砂を含む 良好	(球か・天津型) 佐賀燒地による飾で 天井部に立派な縁による飾で	
27	2 SB 01	直底器 直	3.6	1.7	板木縫は立派な縁による飾を含む	良好	5Y5/4灰	5Y5/4灰	直縁による飾で	
27	3 SB 01	直底器 直	10.8	3.5	4.7	14.1灰	0.3の縫。石 粗砂を含む 小口	7.5Y3/7-29灰	5Y7/1灰(白)	直縁による飾で
27	4 SB 01	直底器 直	10.4	3.2	4.3	14.2灰	0.2-0.5の縫。 粗砂を含む 不良	灰(=4灰)灰	(6面)輪郭線を切り (底部)輪郭線を切り	直縁による飾で
27	5 SB 01	直底器 直	-	3.5	7.5	1件	0.3の縫。石 粗砂を含む 良好	7.5Y3/7-19灰	5Y7/1灰	直縁による飾で
27	6 SB 01	直底陶 扇	17.8	4.3	-	11縫～体部一部	粗砂を含む 良好	5Y6/8灰オリーブ	5Y6/8灰	直縁による飾で (底部)輪郭線を切り (底部)輪郭線を切り
27	7 SB 01	直底器 楊	18.6	4.6	-	11縫～底部一部	石系、粗砂を含む 小口	7.5Y3/6灰4寸5 い焼	7.5Y10/6灰4寸5 い焼	直縁による飾で (底部)輪郭線の差引
27	8 SB 01	直底器 楊	19.8	6.5	-	11縫～底部一部	合込	黒灰、粗砂を含む 良好	10Y5/1灰～3/2	直縁による飾で
27	9 SB 01	直底器 楊?	-	7.6	-	11縫～底部一部	粗砂を含む 良好	5Y6/5灰	5Y6/5灰	直縁による飾で
27	10 SB 01	直底器 斧	23	8.6	-	11縫～底部上位	石系、粗砂を含む 合込	7.5Y3/7-44寸5 い焼	7.5Y10/6灰4寸5 い焼	直縁による飾で (底部)輪郭線の差引
28	11 SD 01	直底器 直	2.8	1.1	-	無底安定窓～天井部	粗砂を含む 良好	2.5Y3/1灰	2.5Y3/1灰	直縁による飾で
28	12 SD 01	直底器 楊	-	7	-	11縫底部一部	石系、粗砂を含む 良好	10Y3/1灰	10Y3/1灰	直縁による飾で
29	13 SK 01	直底器 斧	-	5.7	-	所蓋上位～脚部	合込	10Y4/4灰	10Y4/4灰	直縁による飾で (底部)輪郭線の差引
29	14 SK 02	直底器 斧	-	3.4	-	所蓋上位～脚部	粗砂を含む 良好	5Y10/6灰6粒	5Y10/6灰6粒	直縁による飾で (底部)輪郭線の差引
30	15 P 05	直底器 楊	-	1.9	9.8	天井部下位一部	粗砂を含む 良好	10Y3/1灰	5Y5/1灰	直縁による飾で
30	16 P 05	直底器 楊	-	2.2	8.2	底部一部	粗砂を含む 良好	5Y8/4灰	5Y8/4灰	直縁による飾で (底部)輪郭線の差引

第1表 平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物

回数	遺物 番号	遺物 名稱	材質	形狀	寸法	器種	外側色調	内側色調	縁利・剥離	外端部	内端部	参考	
												表面	裏面
30	17 P	土師器 直	陶	圓盤	11.6	器種	0.2の縁、石	0.2の縁、石	良好	5YR6/6他	5YR7/4他	(1)縫隙部で直線部削り	(1)縫隙部削り
30	18 P	41 1.06kg 瓦片	-	-	2.3	-	14.6穴存	14.6穴存	良好	5YR6/6他	5YR7/4他	直線部からく立ち上り、1.06kgに至る	直線部削り
31	Pv-01 3	J001 土師器 壺	陶	瓶	8.6	完存	0.2の縁、石	0.2の縁、石	良好	5YR4/4他	5YR4/4他	縫合の痕跡	縫合の痕跡
31	Pv-02 01	J072m 土師器 壺	陶	瓶	9.0	9.7	14.7穴存	14.7穴存	良好	5YR6/6他	5YR6/6他	(1)縫隙部削り	(1)縫隙部削り
31	Pv-03 01	J072m 土師器 壺	陶	瓶	14.8	5.5	11.6穴存3.4	11.6穴存3.4	良好	10YR7/2他	10YR6/4他	縫合部に段を設ける	縫合部に段を設ける
32	Pv-05 01	J072m 土師器 壺	陶	瓶	13.4	6.7	11.6縫～体部一部 縫隙部を含む	11.6縫～体部一部 縫隙部を含む	良好	5YR7/6他	5YR7/6他	縫合部から内側して1.06kgに	(1)縫隙部削り
32	Pv-06 02	J072m 土師器 壺	陶	瓶	15.2	7.6	14.6縫～体部一部 縫隙部を含む	14.6縫～体部一部 縫隙部を含む	良好	2.5YR3/3他	2.5YR3/3他	縫合より内側して立ち上がり、丸みをつけた体部から下がる	(1)縫隙部削り (体部削り)
33	G 9	10700 土師器 直	陶	直	2.0	2.4	10.4 瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	10.4 瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	N/A	N/A	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 05	10707 土師器 直	陶	直	-	1.5	10.2 天井部～縫隙部	10.2 天井部～縫隙部	良好	5YR5/5他	5YR5/5他	縫合部より内側して立ち上がり、丸みをつけた体部から下がる	(1)縫隙部削り (体部削り)
33	G 3	10710 土師器 直	陶	直	3.2	2.3	15.6 瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	15.6 瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	3Y6/5オーラー/7	3Y6/5オーラー/7	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 4	10091 土師器 直	陶	直	3.6	2.3	瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	7.5RA4/1他	7.5RA4/1他	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 4	10091 土師器 直	陶	直	4.2	2.0	瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	N/A	N/A	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 5	10094 土師器 直	陶	直	2.2	2.3	瓦片部は(瓦片部) 天井部～縫隙部一部 縫隙部を含む	瓦片部は(瓦片部) 天井部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	10Y/2オーラー/4	10Y/2オーラー/4	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 2	10094 土師器 直	陶	直	-	2.7	17 瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	17 瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	N/A	N/A	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 4	10770 土師器 直	陶	直	-	2.0	15.2 瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	15.2 瓦片部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	N/A	N/A	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 5	10770 土師器 直	陶	直	-	1.9	14.6 天井部～縫隙部一部 縫隙部を含む	14.6 天井部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	N/A	N/A	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 2	10770 土師器 直	陶	直	-	2.2	13.2 天井部～縫隙部一部 縫隙部を含む	13.2 天井部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	N/A	N/A	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直
33	G 6	10740 土師器 直	陶	直	-	2.8	16.6 天井部～縫隙部一部 縫隙部を含む	16.6 天井部～縫隙部一部 縫隙部を含む	良好	N/A	N/A	縫合部から縫合部のみ (部～瓦片部で天井部～縫隙部)	縫合部による直

第2表 平成18年度霞寺西門跡及び尼寺東区廻設の調査出土遺物(2)

回数	遺物 番号	種類	材質	表面	内部	外側の調査	内部の調査	城利・利園	外周部	内部調査	参考		
33	35 G 8	B7X0 土壠器 盆	-	1.2	天井部～底 自立型、直筒	良好 5Y5/5灰	5Y5/5灰	織錦紋形	織錦紋形	織錦による織で 織錦による織で			
33	36 G 7	B7X0 土壠器 盆	-	2.3	天井部～底 自立型、直筒 斜め合ひ成	良好 7.5YR6/4灰 1.5	7.5YR6/4灰 1.5	織錦形	織錦形	織錦による織で 織錦による織で			
33	37 G 8	B9H1 土壠器 盆	-	2.6	12.2 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 9.0/9灰	N/G 灰	織錦形	天井部から直筒 直筒～底	織錦による織で 織錦による織で	外周に軸を施す		
33	38 G 5	B9H1 灰釉陶 盆	-	2.6	1.6 天井部～底 直筒～底	良好 10Y5/2オイ	10Y6/1灰	織錦形	底部ははいな 直筒～底	織錦による織で 織錦による織で	外周に軸を施す		
33	39 G 2	B7X0 土壠器 片	13.0	4.7 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 5YR6/3灰 1.5	5YR7/3灰 1.5	織錦形	織錦による織で立 天井部直筒～底 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底		
33	40 G 3	B7X0 土壠器 片	13.4	4.6 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 7.5YR6/4灰 1.5	7.5YR6/4灰 1.5	織錦形	丸底から直筒～底 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底			
33	41 G 3	B9H1 土壠器 片	14.4	4.3 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 5YR7/6灰 1.5	5YR7/6灰 1.5	織錦形	天井部から直筒～底 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底			
33	42 G 7	B7X0 土壠器 片	-	1.0	4.5 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 5YR6/3灰 1.5	5YR6/3灰 1.5	織錦形	天井部直筒～底 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底		
33	43 G 7	B7X0 土壠器 片	-	1.3	5.0 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 7.5YR7/3灰 1.5	7.5YR7/3灰 1.5	織錦形	直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底		
33	44 G 4	B7X0 土壠器 片	-	3.1	8.0 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 5YR6/4灰 1.5	5YR6/4灰 1.5	織錦形	直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底		
33	45 G 5	B6H9 土壠器 片	-	1.0	6.2 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 黑	黑	上部気泡の痕跡	（注）直筒部直筒 直筒～底	黒色毛跡 黒色毛跡	黒色毛跡 黒色毛跡		
33	46 G 3	B7X0 土壠器 片	13.0	4.1 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	0.2～0.4の縫 直筒～底 斜め合ひ成	良好 9.0/9灰	9.0/9灰	2.45/7/1灰 2.57/7/1灰	直筒～底 直筒～底	（注）直筒部直筒 直筒～底	黒色毛跡 黒色毛跡		
33	47 G 6	B7X0 灰 盆	13.6	2.3 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 7.2/1灰～灰 1.4	7.2/1灰～灰 1.4	織錦形	付け高台	織錦による織で	織錦による織で	内外面に軸を施す		
33	48 G 4	B9H1 土壠器 盆	12.2	3.3 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 7.5/5灰	7.5/5灰	織錦形	天井部直筒～底 直筒～底	（注）直筒～底 直筒～底	（注）直筒～底 直筒～底			
33	49 G 6	B7X0 土壠器 片	12.6	6.0 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 7.5/5灰	7.5/5灰	織錦形	天井部直筒～底 直筒～底	（注）直筒～底 直筒～底	（注）直筒～底 直筒～底			
33	50 G 5	B7X0 土壠器 片	13.2	3.5 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 7.5/5灰 1.5	7.5/5灰 1.5	織錦形	天井部直筒～底 直筒～底	（注）直筒～底 直筒～底	（注）直筒～底 直筒～底			
33	51 G 3	B6H1 土壠器 片	-	2.2	6.2 天井部～底 直筒～底 斜め合ひ成	良好 N/G 灰	N/G 灰	織錦形	上部毛を有して 直筒～底	（注）直筒～底 直筒～底	（注）直筒～底 直筒～底		

第3表 平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区施設の調査出土遺物(3)

回数	造営年	造営場所	構造	耐力	柱高	梁間	梁高	外側色調	内側色調	被覆	断土	地質	総合評価	外周面評価	内面面評価	参考
33	52 G 6	0770 痘患者 扇	-	3.2	7.0	3.4	体面一層 断面 相鉛を含む	N/G/灰	7.5/YR6/31-G 5-9類-N/G/灰	織物成形 人骨灰室の後壁 小骨室は外側に有り	(体面)被覆切妻の後壁 外側に有る歯で 織物による歯で					
33	53 G 01	077m 瘡患者 扇	-	5.0	5.2	底面一休面1/4	相鉛を含む	良好	N/G/灰	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 平假から骨室は にこらへる歯で底部	(体面)被覆切妻の歯で 織物による歯で				
33	54 G 2	0770 瘡患者 扇	13.0	7.0	12.8	1上縁一底面一底面	相鉛を含む	良好	N/G/糊灰	N/G/灰	内側に立ち上がり口は底に 有る歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で (高)底面糊化の歯で				
33	55 G 6	0770 瘡患者 扇	15.4	3.3	10.2	1上縁一底面1/8	相鉛を含む	良好	N/G/灰	N/G/灰	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 体面 は高台	(1層一休面)被覆切妻の歯で (高)底面糊化の歯で			
33	56 G 5	0770 瘡患者 扇	12.6	3.8	9.0	1上縁一底面一底面	相鉛を含む	良好	N/G/灰	N/G/灰	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 低い 付け高台は底面糊化の歯で 織物による歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で (高)底面糊化の歯で			
33	57 G 3	0770 瘡患者 扇	13.2	3.1	10.0	1上縁一底面一底面	相鉛を含む	良好	N/G/灰	N/G/灰	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 付け 高台は底面糊化の歯で 織物による歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で (高)底面糊化の歯で			
33	58 G 01	077m 瘡患者 扇	-	3.5	11.2	体面一底面一底面	相鉛を含む	良好	N/G/灰	N/G/灰	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 付け 高台は底面糊化の歯で 織物による歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で (高)底面糊化の歯で			
34	59 G 6	0770 瘡患者 扇	-	2.6	6.0	体面一底面一底面	相鉛を含む	良好	N/G/灰	N/G/灰	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 底面から底面は糊化の歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で 織物による歯で			
34	60 G 1	0770 瘡患者 扇	16.0	2.8	12.2	1上縁一底面一底面	相鉛を含む	良好	N/G/灰	2.5/YR6/4灰	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 底面から底面は糊化の歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で 織物による歯で			
34	61 G 08	0770 1脚器 鋼	-	2.1	6.6	高台1/2	相鉛を含む	良好	7.5/YR6/31-G 5-1類	7.5/YR6/31-G 5-1類	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 底面から底面は糊化の歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で 織物による歯で			
34	62 G 8	0770 1脚器 鋼	-	2.5	12.2	底面一休面1/4	相鉛を含む	良好	5/YR6/6灰	7.5/YR6/41-G 5-1類	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 底面から底面は糊化の歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で 織物による歯で			
34	63 G 7	0770 1脚器 鋼	-	2.2	6.0	体面一底面一底面	相鉛を含む	良好	5/YR7/6灰	3.5	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 底面から底面は糊化の歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で 織物による歯で			
34	64 G 8	0770 1脚器 鋼	16.0	4.0	11.8	1上縁一休面一底面	相鉛を含む	良好	10/YR7/1灰白	10/YR7/1灰白	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 底面から底面は糊化の歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で 織物による歯で			
34	65 G 6	0770 1脚器 鋼	12.4	4.0	6.8	1上縁一休面1/4	相鉛を含む	良好	5/YR7/1灰白	3/YR6/灰	内側に種子有り、底面 相鉛を含む	織物成形 付け高台 底面から底面は糊化の歯で 織物による歯で	(1層一休面)被覆切妻の歯で (高)底面糊化の歯で 織物による歯で			

第4表 平成18年度僧寺西門及び尼寺東区施設の調査出土遺物(4)

第5表 平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区施設の調査出土遺物(5)

回数	遺物	造形				寸法	基部	表面	裏面	外観特徴	城利・利害	内面調査	内面調査	備考
		横幅	縦幅	高さ	厚さ									
34	66 G	BMR61灰陶 器	筒	-	2.4	8.0 1.4	所持位～底基 部	相持位を含む	良好	2.5YR7/4C前 後	2.7YR7/4C-5C前 後	織成状 付は高台は外側 が切取りされる。	(体部織成部による 部切欠きで)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	67 G	BMR62灰陶 器	筒	-	1.9	7.0 1.4	所持位～底基 部	相持位を含む	良好	2.5YR7/4C前 後	2.5YR7/4C前 後	織成状 付は高台	(体部織成部による 部切欠きで)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	68 G	BMR63灰陶 器	筒	-	1.6	4.1	所持位～底基 部	相持位を含む	良好	7.5G/7/14C後 K	10YR7/7/14C後 K	織成状 付は高台	(体部織成部による 部切欠きで)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	69 G	BMR64灰陶 器	筒	-	3.2	3.0	1.1底基～底部 一帯	自持位、相持 位を含む	良好	5YR7/4C前 後	5YR4灰	体は短く小気泡に立ち 上る。	(底基部が工具による凹凸の 痕跡によるもの)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	70 G	BMR65灰陶 器	筒	-	3.4	5.4 1.4	1.4底基～底 部	自持位を含む	良好	N/S灰	N/S灰	織成状 付は短く、直 線状による断面	(体部織成部による 部切欠きで)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	71 G	BMR66灰陶 器	筒	-	7.0	1.4 1.4	1.4底基～底 部	自持位を含む	良好	2.5YR7/4C後 K	5YR4灰	体は短く、直線状による 断面	(体部織成部による 部切欠きで)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	72 G	BMR67灰陶 器	筒	-	5.8	1.4 1.4	1.4底基～底 部	自持位を含む	良好	5YR7/4Cに近い K	5YR4灰	体は短く、直線状による 断面	(体部織成部による 部切欠きで)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	73 G	BMR68灰陶 器	筒	-	4.5	1.4 1.4	1.4底基～底 部	自持位を含む	良好	5YR4/3に近い K	5YR6灰	体は短く、直線状による 断面	(体部織成部による 部切欠きで)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	74 G	BMR69灰陶 器	筒	-	5.3	1.4 1.4	1.4底基～底 部	自持位を含む	良好	7.5YR7/4C-5C 灰	5YR6灰	体は短く、直線状による 断面	(体部織成部による 部切欠きで)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	75 G	BMR70灰陶 器	筒	-	2.5	1.4 1.4	1.4底基～底 部	相持位を含む	良好	5YR6/6灰	5YR6/6灰	相持位は斜めにし、織成 部は直線状である。	(相持位斜め 部による断面)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	76 G	BMR71灰陶 器	筒	-	7.3	1.4 1.4	1.4底基～底 部	相持位を含む	良好	5YR5/6灰	5YR5/6灰	相持位は斜めにし、織成 部は直線状である。	(相持位斜め 部による断面)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	77 G	BMR72灰陶 器	筒	-	3.5	10.0 1.4	1.4底基～底 部	相持位を含む	良好	10YR7/4Cに近い K	10YR7/4C-5C 灰	相持位は斜めにし、織成 部は直線状である。	(相持位斜め 部による断面)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	78 G	BMR73灰陶 器	筒	-	14.0	11.4	1.1底基～4 一帯	自持位、相持 位を含む	良好	5YR5/6灰	5YR5/6灰	相持位は斜めにし、織成 部は直線状である。	(相持位斜め 部による断面)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	79 G	BMR74灰陶 器	筒	-	11.4	5.7	1.1底基～1 一帯	自持位、相持 位を含む	良好	2.5YR4/6灰	2.5YR5/3C-5 灰	相持位は斜めにし、織成 部は直線状である。	(相持位斜め 部による断面)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	80 G	BMR75灰陶 器	筒	-	15.4	11.2	1.1底基～2 一帯	相持位を含む	良好	10YR7/4C-5C 灰	10YR7/4C-5C 灰	相持位は斜めにし、織成 部は直線状である。	(相持位斜め 部による断面)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	81 G	BMR76灰陶 器	筒	-	12.3	6.8	1.1底基～底 部	相持位を含む	良好	7.5YR7/4C-5C 灰	7.5YR7/4C-5C 灰	相持位は斜めにし、織成 部は直線状である。	(相持位斜め 部による断面)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。
34	82 G	BMR77灰陶 器	筒	-	24.0	3.2	1.1底基～1 一帯	相持位を含む	良好	7.5YR4灰	7.5YR4灰	相持位は大きく外反し、折 り返してはねをつける。	(相持位は大きく外反し、折 り返してはねをつける)	片面部 に施釉なし、 外面部 に施釉なし、高台外 面と底基部の一帯に施 釉がある。

回数	造営年	造営場所	構造	造り	相面	屋根	壁	窓	軒下	外側の調	内側の調	上器	城利・利害	外城地盤	内城地盤	参考	
34	83 G	B750 1	直造	焼	22.7	12.5	-1時	-1時	-0.3時	5Y5/4時	5Y5/4時	口開き	頭は外側へ開き、口開き	頭は内側へ開き、口開き	頭は外側へ開き、口開き	頭は内側へ開き、口開き	
34	84 G	B750 2	直造	焼	22.8	6.8	-1時	-1時	-0.4時	5Y5/4時	5Y5/4時	頭は内側へ開き、頭は内側へ開き	頭は内側へ開き、頭は内側へ開き	頭は内側へ開き、頭は内側へ開き	頭は内側へ開き、頭は内側へ開き	頭は内側へ開き、頭は内側へ開き	
35	85 G	B750 3	直造	焼	16.6	3.4	-1時	-1時	-1時	7.5Y4/2時	7.5Y4/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	86 G	B604 3	直造	焼	16.2	3.0	-1時	-1時	-1時	7.5Y5/2時	7.5Y5/2時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	87 G	B750 6	直造	焼	12.4	5.3	-1時	-1時	-0.7時	7.5Y5/4時	7.5Y5/4時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	88 G	B750 7	直造	焼	-	3.5	-1時	-1時	-1時	10Y5/4時	10Y5/4時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	89 G	B750 8	直造	焼	18.8	4.0	-1時	-1時	-0.7時	7.5Y5/1時	7.5Y5/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	90 G	B750 9	直造	焼	17.8	4.3	-1時	-1時	-1時	7.5Y4/0時	7.5Y4/0時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	91 G	B750 10	直造	焼	10.2	3.8	-1時	-1時	-1時	10Y4/1時	10Y4/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	92 G	B750 11	直造	焼	17.6	4.7	-1時	-1時	-1時	10Y5/0時	10Y5/0時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	93 G	B750 12	直造	焼	-	10.3	-1時	-1時	-0.7時	5Y3/2時	5Y4/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	94 G	B750 13	直造	焼	-	8.0	-1時	-1時	-1時	10Y6/2時	10Y6/2時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	95 G	B604 3	直造	焼	-	5.5	-1時	-1時	-0.4時	5Y3/6時	5Y4/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	96 G	B604 4	直造	焼	-	6.6	-1時	-1時	-0.5時	5Y4/1時	5Y4/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	97 G	B604 5	直造	焼	-	7.2	-	-	-	10Y5/1時	10Y5/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	98 G	B750 6	直造	焼	-	4.3	7.4	-1時	-	5Y6/1時	5Y6/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	
35	99 G	B750 7	直造	焼	13.0	6.7	-1時	-1時	-1時	10Y5/1時	10Y5/1時	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	頭は外側へ開き、頭は内側へ開き	

第6表 平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区施設の調査出土遺物(6)

回数	遺物	造形			構成			質地			外観状態			付属品等		参考		
		造形	造り	作り方	構成	造形	構成	質地	形状	組合せ	施土	焼成	外側色調	内側色調	城利・利害			
35	100 G 4	070706 瓦	焼成	-	4.5	頭部～脚部上位 一部	粗鉄粉を含む	良好	5Y5/1灰	5Y5/1灰			(頭部部)手に強く (頭部)手に強く	頭部による引き 頭部による引き	頭部による引き 頭部による引き	頭部による引き 頭部による引き	頭部による引き 頭部による引き	
35	101 G 6	070706 瓦	焼成	-	6.8	脚部上位	粗鉄粉を含む	良好	5Y5/1灰	5Y5/1灰			(頭部部)手に強く (頭部)手に強く	頭部による引き 頭部による引き	頭部による引き 頭部による引き	頭部による引き 頭部による引き	頭部による引き 頭部による引き	
35	102 G 02	070706 瓦	焼成	-	10.0	1.口縁～頭部～一部	粗鉄粉を含む	良好	5Y5/1灰～6Y1灰	5Y5/1灰			1.口縁部はタバコ灰に強く 1.口縁部はタバコ灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
35	103 G 7	070706 瓦	焼成	-	23.8	1.口縁～頭部上部 一部	粗鉄粉を含む	良好	5Y5/7/4/1～5Y5/5 5Y5/5/6粗鉄粉	5Y5/1灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
35	104 G 8	070706 瓦	焼成	-	7.8	5.2	1.口縁～頭部～一部	粗鉄粉を含む	良好	10Y2/1灰	10Y2/1灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き
35	105 G 3	070706 瓦	焼成	-	4.0	頭部～一部	粗鉄粉を含む	良好	5Y5/1灰	5Y5/1灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
35	106 G 7	070706 瓦	焼成	-	5.3	頭部～体部頂上 一部	粗鉄粉を含む	良好	10Y2/1灰～5Y1 灰	7.5Y6/1灰～5Y1 灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
35	107 G 5	070611 瓦	焼成	-	4.9	頭部～体部頂上 一部～一部	粗鉄粉を含む	良好	5Y6/1灰～5Y6/1 灰	7.5Y6/2灰～5Y5/1 灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
35	108 G 7	070706 瓦	焼成	-	2.1	1.体部上位～一部	粗鉄粉を含む	良好	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
36	109 G 6	070706 瓦	焼成	-	3.5	1.体部～一部	粗鉄粉を含む	良好	5Y6/2灰～5Y6/1 灰	5Y6/1灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
36	110 G 9	070706 瓦	焼成	-	6.6	8Y1/1灰～一部	粗鉄粉を含む	良好	5Y5/1灰～6Y1 灰	5Y4/1灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
36	111 G 5	070706 瓦	焼成	-	4.3	7.4 7.3～4 3.4	1.体部下位～底部 粗鉄粉、細鉄粉 含む	良好	5Y7/1灰～白～ 5Y1/灰	5Y6/1灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
36	112 G 1	070706 瓦	焼成	-	8.5	11.2 1.3	1.体部下位～底部 粗鉄粉を含む	良好	2.5Y3/2/2灰	2.5Y3/1灰			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
36	113 G 1	070706 瓦	焼成	-	9.1	1.体部～一部	粗鉄粉を含む	良好	5Y7/1灰～ 6Y1/灰	7.5Y8/6/2粗鉄			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	
37	114 G 0	100611 瓦	焼成	-	1.0	2.3	8.8 14.6灰	自燃鉄粉、粗鉄 粉を含む	良好	7.5Y8/5/1灰	N/G			1.口縁部は瓦灰に強く 1.口縁部は瓦灰に強く	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き	1.口縁部による引き 1.口縁部による引き

第7表 平成18年度僧寺西門跡及び尼寺東区廻施設の調査出土遺物(7)

回数	遺物 番号	遺物 名	種類	断面 形状	断面 直径	壁厚	外表面 形状	内表面 形状	断面 形状	内表面 形状	外表面 形状	内表面 形状
37	115 G 1	J001 直角器	直角	-	1.9	9.0	直角器一端	直角	直角	直角	直角器一端	直角
37	116 G 4	J001 土瓶口	平	-	2.5	10.0	直角器一端	直角	直角	直角	直角器一端	直角
37	117 G 0	J001 直角器	平	19.6	4.0	6.8	直角器一端	直角	直角	N/A	N/A	N/A
37	118 G 1	J001 直角器	平	11.0	3.9	4.4	直角器一端	直角	直角	N/A	N/A	N/A
37	119 G 2	J001 直角器	斜	-	1.3	8.8	直角器一端	直角	直角	N/A	N/A	N/A
37	120 G 1	J001 灰陶罐	圆	-	2.7	5.4	直角器一端	直角	直角	N/A	N/A	N/A
37	121 G 2	J001 灰陶罐	圆	-	1.8	8.0	直角器一端	直角	直角	N/A	N/A	N/A
37	122 G 4	J001 直角器	斜	-	4.2	10.6	直角器一端	直角	直角	N/A	N/A	N/A
37	123 G 0	J001 直角器	圆	-	12.4	7.0	直角器一端	直角	直角	N/A	N/A	N/A
37	124 G 1	J001 土瓶口	平	13.6	3.6	1.0	直角器一端	直角	直角	0.8	7.0	7.0
37	125 G 2	J001 土瓶口	直角	18.4	15.4	15.4	下部直角部分	直角	直角	5YR7/6	5YR7/6	5YR7/6
37	126 G 2	J001 土瓶口	直角	14.7	11.7	11.7	直角	直角	直角	5YR7/6	5YR7/6	5YR7/6
37	127 G 2	J001 土瓶口	直角	16.2	4.1	4.1	下部直角部分	直角	直角	5YR7/8	5YR7/8	5YR7/8
37	128 G 2	J001 土瓶口	直角	-	5.5	-	直角	直角	直角	5YR4/4	5YR4/4	5YR4/4
37	129 G 2	J001 土瓶口	H?	-	3.0	-	直角器一端	直角	直角	N/A	N/A	N/A
37	130 G 2	J001 土瓶口	直角	-	3.5	6.0	直角器一端	直角	直角	5YR5/6	5YR5/6	5YR5/6
37	131 G 1	J001 土瓶口	直角	-	8.0	-	直角器一端	直角	直角	2.5YR5/6	2.5YR5/6	2.5YR5/6
37	132 G 3	J001 直角器	直角	3.5	-	-	直角器一端	直角	直角	5YR6/1	5YR6/1	5YR6/1

第8表 平成18年度贈寺西門跡及び尼寺東区画施設の調査出土遺物(8)

回数	遺跡	遺物	種類	塗り	柄	基部	表面	外側色調	内側の調	縫合・剥離	外傷部位	内傷調査		参考	
												NFS	NFS	NFS	
37	E33 G 2	10901 瓦器	瓦片	-	-	-2.1	8.0	削留一基	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
37	E34 G 2	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
37	E35 G 4	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
37	E36 G 4	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
37	E36 G 4	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
37	E37 G 2	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
38	E38 G 01	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
38	E39 G 1	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
38	E40 G 1	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E41 G 2	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E42 G 7	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E43 G 10	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E44 G 4	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E45 G 5	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E46 G 6	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E47 G 9	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E48 G 4	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E49 G 30	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	
39	E50 G 3	10901 瓦器	瓦片	-	-	-1.6	8.0	116基～割断上位	良好	NFS	NFS	縫合形	縫合はラバーパットによるもの。繊維はまだ残っている。	縫合による傷で	

第9表 平成18年度寺西門跡及び二次東北画施設の調査出土実物(9)

回数	種類	固形物	固形物 番号	細胞 長さ	細胞 幅	肉桂 細胞	實存 部位	實存 部位上 の組織形態	K		細胞 調査	細胞 調査	細胞 調査		
									色調	細胞 形態					
40	151 SB	丸瓦	01	19.0	3.5	無色化地模	瓦当部	白・褐色細胞を含む 褐色細胞を含む	7.5YR17/7	葉状 細胞	葉状	葉状	葉状		
40	152 SB	平瓦	01	18.3	8.6	1.8無色化地模	瓦当部	白・褐色細胞を含む 褐色細细胞を含む	2.5YR9/0	葉状 細胞	葉状	葉状	葉状		
40	153 SB	平瓦	01	11.6	9.0	2.2無色化地模	玉縁	褐色細细胞を含む	5YR18/1~5YR2/1	葉状 細胞	葉状	葉状	葉状		
40	154 SB	平瓦	01	19.4	16.0	1.6	瓦元無色化地模	玉縁～無色化地模	10Y4/1	葉状 細胞	葉状	葉状	葉状		
41	155 SD	丸瓦	01	5.8	5.2	1.5無色化地模	製法状	0.7の褐色、褐色細胞を含む	7.5YR8/8	褐色 細胞	褐色	褐色	褐色		
41	156 SD	丸瓦	01	5.7	8.0	1.7	瓦元無色化地模	玉縁	褐色細细胞を含む	7.5YR5/1	葉状 細胞	葉状	葉状		
41	157 SD	平瓦	01	6.2	9.3	2.2無色化地模	製法部	褐色細细胞を含む	5YR2/4	白	圓薄片	圓薄片	圓薄片		
41	158 SD	平瓦	01	8.6	7.3	1.8	瓦元無色化地模	玉縁	0.2~0.6の褐色、白色細胞	7.5YR3/2	褐色～白	圓薄片	圓薄片		
42	159 P	平瓦	22	17.5	13.0	2.5無色化地模	玉縁	0.3~0.7の褐色、黑色、白色 細胞を含む	7.5YR5/2	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片		
43	160 G	丸瓦	01	19.5	2.1	無色化地模	瓦当部	褐色細细胞を含む	10Y4/1	葉狀 細胞	葉狀	葉狀	葉狀		
43	161 G	0107007	丸瓦	15.0	3.0	無色化地模	瓦当部	褐色細细胞を含む	10YR5/1	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片		
43	162 G	0107001	斜平瓦	2.7	5.4	1.6無色化地模	瓦当部	褐色細细胞を含む	2.5YR1/0	褐色	圓薄片	圓薄片	圓薄片		
43	163 G	0107001	斜平瓦	5.4	5.5	6.1無色化地模	瓦当部	褐色細细胞、黑色細胞を含む	7.5YR6/6	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片		
43	164 G	0107001	丸瓦	13.3	11.2	1.8無色化地模	玉縁～無色化地模	褐色細细胞、黑色細细胞を含む	10YR4/3	褐色	圓薄片	圓薄片	圓薄片		
43	165 G	0107005	丸瓦	15.2	7.6	1.8	瓦元無色化地模	玉縁～無色化地模	褐色、白色細细胞を含む	10YR4/1	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
43	166 G	10614	丸瓦	14.5	14.0	1.8	瓦元無色化地模	玉縁～無色化地模	褐色細细胞を含む	10YR4/1	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
43	167 G	10612	丸瓦	14.7	6.5	2.0	瓦元無色化地模	玉縁～無色化地模	0.2~0.7の褐色、黑色、白色 細细胞を含む	10Y7/1	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	168 G	0107005	丸瓦	12.0	7.5	1.4	無色化地模	玉縁～無色化地模	褐色、白色細细胞を含む	10YR4/2	黃褐色	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	169 G	0107007	丸瓦	9.8	3.7	1.6	無色化地模	玉縁～無色化地模	褐色細细胞を含む	2.5Y/10	褐色	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	170 G	10613	丸瓦	11.7	3.8	2.0	無色化地模	製法部	褐色細细胞を含む	7.5YR6/3	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	171 G	10615	丸瓦	6.5	9.7	1.6	瓦元無色化地模	製法部	白・褐色細细胞を含む	7.5Y/5	褐色	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	172 G	10615	丸瓦	7.4	8.8	2.0	無色化地模	製法部	0.6の褐色、白色細细胞を含む	10YR5/1	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	173 G	106007	丸瓦	8.5	4.8	1.8	無色化地模	製法部	0.4の褐色、褐色細细胞を含む	10YR5/2	黃褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	174 G	106005	丸瓦	7.5	4.8	1.8	瓦元無色化地模	製法部	白・褐色細细胞を含む	10YR5/2	黃褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	175 G	010609	丸瓦	6.8	4.4	1.8	無色化地模	製法部	0.2~0.3の褐色、白色細细胞	7.5YR4/3	褐色	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	176 G	10614.5	丸瓦	19.2	13.2	2.0	無色化地模	製法部	含有	0.2~0.4の褐色、白色 細细胞を含む	2.5Y/2	褐色	圓薄片	圓薄片	圓薄片
44	177 G	10612	丸瓦	6.2	6.4	1.5	無色化地模	玉縁部	褐色、白色細细胞を含む	7.5YR4/4	正方形～四角形	圓薄片	圓薄片	圓薄片	
44	178 G	10614	丸瓦	6.7	4.3	1.3	無色化地模	玉縁部	白・褐色細细胞を含む	7.5YR4/9	褐色～白	圓薄片	圓薄片	圓薄片	

回数	回数	通称	種類	種類	長さ	幅	厚さ	形状	地上		色調	凹面調整	凸面調整
									高さ	幅			
44	179	G	[1061]15	平瓦	4.2	3.7	1.3	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	10Y5/1灰~1灰	6.11	無で	田園、山野調から灰く曲線
44	180	G	[1091]15	平瓦	7.2	4.4	1.2	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.3Y5/1灰~6灰	6.11	無で	田園調から灰く曲線
44	181	G	[1061]5	平瓦	4.4	3.3	2.4	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.5Y8/1灰~6灰~5.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
44	182	G	[1070]2	平瓦	4.9	3.4	1.1	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	10Y1/2灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
44	183	G	[1070]02	平瓦	5.0	5.6	1.7	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	5Y6/1灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
44	184	G	[1070]05	平瓦	5.0	2.6	1.6	瓦元火燒瓦	0.5の輪の形。白色樹脂を含む	7.5Y4/1灰~5.2灰~4.2灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
44	185	G	[1070]7	平瓦	13.8	18.3	2.4	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.3Y7/1灰~5.5灰~3.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
44	186	G	[1070]4	平瓦	13.8	1.4	2.1	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	10Y5/4灰~5.5灰~4.1灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	187	G	[1061]5	平瓦	14.5	11.7	2.2	瓦元火燒瓦	0.5の輪の形。白色樹脂を含む	7.5Y8/0灰~6灰~5.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	188	G	[1061]3	平瓦	13.5	14.8	2.5	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	10Y5/3灰~5.5灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	189	G	[1070]05	平瓦	18.5	9.2	2.4	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.3Y6/0灰~6灰~5.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	190	G	[1061]5	平瓦	14.7	13.2	2.2	瓦元火燒瓦	0.2~0.4の輪の形。白色樹脂を含む	5Y8/7/4灰~5.5灰~4灰灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	191	G	[1061]5	平瓦	15.2	10.9	1.8	瓦元火燒瓦	0.2~0.4の輪の形。白色樹脂を含む	2.5Y6/3灰~5.5灰~4灰灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	192	G	[1070]1	平瓦	14.9	8.8	2.1	瓦元火燒瓦	0.2~0.3の輪の形。白色樹脂を含む	10Y5/4灰~5.5灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	193	G	[1070]6	平瓦	13.2	10.4	2.2	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	10Y6/3灰~5.5灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	194	G	[1070]1	平瓦	15.0	14.8	1.2	瓦元火燒瓦	1.2の輪の形。白色樹脂を含む	5Y7/0灰~4.5灰~3.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	195	G	[1070]8	平瓦	14.1	14.3	2.1	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	2.5Y6/1灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	196	G	[1070]01	平瓦	11.0	7.5	1.9	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	2.5Y5/1灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	197	G	[1061]5	平瓦	11.0	11.2	2.4	瓦元火燒瓦	0.3~1.5の輪の形。白色樹脂を含む	5Y8/1灰~5.5灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
45	198	G	[1070]7	平瓦	8.0	11.9	1.5	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.5Y6/0灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	199	G	[1070]1	平瓦	10.1	8.9	2.0	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	5Y4/1灰~3/2灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	200	G	[1070]09	平瓦	7.8	8.4	1.7	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	10Y8/3灰~4.5灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	201	G	[1070]01	平瓦	7.6	6.0	2.0	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.5Y6/1灰~5.5灰~5.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	202	G	[1070]02	平瓦	7.2	6.0	2.3	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.5Y8/2灰~5.5灰~5.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	203	G	[1061]4	平瓦	17.2	10.5	2.2	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.5Y5/1灰~5.5灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	204	G	[1061]3	平瓦	12.2	1.3	1.8	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	2.5Y6/1灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	205	G	[1070]04	平瓦	13.0	16.8	1.0	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	2.5Y6/0灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	206	G	[1070]4	平瓦	8.0	8.3	2.2	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	7.5Y7/1灰~5.5灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	207	G	[1070]7	平瓦	9.3	6.8	2.2	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	2.5Y4/1灰~3/2灰~4.5灰	6.11	無で	内面調から灰く曲線
46	208	G	[1061]11	平瓦	9.3	8.7	2.2	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	5Y4/1灰~3/2灰~4.5灰	6.11	平行又は丸に彎き	平行又は丸に彎き
46	209	G	[1061]2	平瓦	10.0	16.2	2.3	瓦元火燒瓦	白色樹脂を含む	5Y4/1灰~3/2灰~4.5灰	6.11	平行又は丸に彎き	平行又は丸に彎き

第11表 平成18年度贈寺西門跡及び二次東区施設の調査出土物(1)

A									
回収 箇所	遺物 番号	種類	横幅	長さ	幅	厚さ	焼成	残存	出土
46 210 G	106k12	平瓦	7.3	6.1	2.3	0.6	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/14.1-1/2/3/3.3-3/4/5 5/5W7/6/8
46 211 G	107k06	平瓦	8.5	8.7	1.6	0.6	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/14.1-1/2/3/3.3-3/4/5 5/5W7/6/8
46 212 G	106k12	腰当瓦	12.5	12.7	2.1	0.6	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/14.1-1/2/3/3.3-3/4/5 5/5W7/6/8
47 213 G	106j14	A.瓦	10.5	6.5	1.9	0.6	燒成	赤陶	0.2~0.5の赤色刷毛目 を含む
47 214 G	106l13	平瓦	4.6	4.2	1.5	0.6	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	7.5/5W7/6/8 5/5W7/6/8
48 215 Z	A.R.	17.8	7.1	2.0	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/17.18/19/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 216 Z	A.R.	6.6	4.5	1.8	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 217 Z	A.R.	6.2	6.2	1.5	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 218 Z	A.R.	4.0	4.2	1.5	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 219 Z	A.R.	16.3	9.8	1.9	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 220 Z	A.R.	13.2	12.0	2.2	0.6	赤陶	赤陶	0.3~0.7の赤色刷毛目 を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 221 Z	A.R.	18.3	14.0	2.4	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 222 Z	A.R.	10.4	8.3	2.1	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 223 Z	A.R.	10.4	7.8	1.9	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 224 Z	A.R.	4.9	6.2	1.4	0.6	赤陶	赤陶	白・黒色刷毛目を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8
48 225 Z	A.R.	10.2	11.2	1.7	0.6	赤陶	赤陶	0.3~0.7の赤色刷毛目 を含む	101/18/20/21/22/23 5/5W7/6/8

第12表 平成18年度暫時西門跡及び二東区施設の調査出土遺物(12)

回収 箇所	遺物 番号	種類	種類	名称	長さ	幅	厚さ	遺物	参考
49 226 G	106k07	金属製品	金属製品		8.3	3.0	1.8		73.4
49 227 G	106k14	金属製品	金属製品		13.5	2.2	0.1		38.5
49 228 G	106k15	金属製品	金具製品	釘	14.9	2.0	1.8		258.0
49 229 G	106k12	金属製品	金具製品		6.2	2.5	1.9		49.3
49 230 G	106k12	金属製品	金具製品	鉗子	13.8	3.5	3.0		123.0
49 231 G	106k12	石製品	打製作斧		9.1	4.3	1.4		70.0
49 232 G	106k14	石製品	打製作斧		7.5	4.1	1.4		42.0
49 233 G	106k15	石製品	石製品		4.6	2.6	2.3		26.0
49 234 G	106f11	石製品	編み物?		11.9	6.1	2.1		218.0
49 235 G	106f11	石製品	打製作斧		12.5	5.2	1.3		78.1
49 236 G	107m01	石製品	編み物石		13.3	7.4	4.7		580.2
49 237 Z		石製品	敲き石		26.6	7.9	6.7		205.4
49 238 G	106d15	土製品	土製品		7.2	5.1	4.3		72.9
49 239 G	106d15	土製品	土製品		7.2	5.2	4.3		114.1
49 240 G	106k15	土製品	土製品	羽口	5.0	外径 5.2	内径 1.9		23.8
49 241 G	107j08	土製品	土製品		3.0	2.3	0.9		8.4

第13表 平成18年度暫時西門跡及び二東区施設の調査出土遺物(13)

## 2 平成 19 年度尼寺南東域の調査出土遺物

回数	遺構	区分	種類	器形	口径	11径	11深	底径	残存	断上	地城	上部		内面色調	威持・形態	外周調節	内面調節	備考
												直径	高さ					
63	242	SD	01	土師器 壺	25.6	25.3	8.6	口径1/4 体深 直壁斜面を含む	0.2~0.3mm 直壁	11深	5YR6/6灰褐色	5YR5/6灰褐色	中空に最大穴を持つ形の 直壁斜面より後も調整 直壁が立ち上がり、頭部は 「くの字」状に外れる	(頭部)直削り(口付部側面の 直壁)直削り後も調整 (直壁部側面の直壁)				
63	243	SK	01	土師器 壺?	-	1.4	5.0	底部	直壁、相鉢を含む	良好	2.5YR4/6灰褐色	2.5YR4/6灰褐色	直付	直付	直削り?			
63	244	SK	01	土師器 壺	1.5	6.0	底部1/2	直壁、相鉢を含む	良好	直付	直壁	直壁成形	付け高台	(直合部側面の直壁) 直付部切妻の後部直壁	直削り 黒色鳥羽			
63	245	Ty	04	土師器 壺	4.0	-	-	直壁～隔壁	直壁、相鉢を含む	良好	5YR5/8灰褐色	5YR4/2灰褐色	隔壁の傾き直壁	直壁				
63	246	Ty	03	土師器 壺?	2.3	3.2	完存	1体部～底部 直壁、相鉢を含む	良好	5YR6/4灰褐色	5YR6/4灰褐色	直壁 1.4mm	7.5YR6/4灰褐色 1.4mm	小さな底部より立ち上がり 直壁	直削り?			
63	247	G	2	JB801 灰塵器 直	-	1.9	16.0	天井直15	直壁かの直壁 直壁を含む	良好	5YR5/4灰褐色	NA灰～ 1.4mm	直壁成形	直壁部は直く傾 する	(天井部下)直削り	直壁による直壁		
63	248	G	6	JB800 灰塵器 扁	-	2.6	12.5	底部1/4	直壁かの直壁 直壁を含む	良好	7.5YR5/2灰褐色	7.5YR6/3灰褐色	直付	直付	(直合部側面の直壁) 直付部切妻の直壁	直壁による直壁		
63	249	G	5	JB801 灰塵器 扁	-3.2	7.6	底部1/4	直壁、相鉢を含む	良好	10YR7/5灰白	10YR7/1灰白	直壁成形	付け高台	(直合部下)直削り	直壁による直壁			
63	250	G	7	JB801 土師器 宽	19.8	4.9	4.0	口縁直15	直壁、相鉢を含む	良好	5YR5/6灰褐色	5YR5/3灰褐色	直壁 1.4mm	7.5YR5/4灰褐色 1.4mm	直壁斜面より頭部は 「くの字」状に外れる	(直合部側面の直壁) 直付部切妻の直壁		
63	251	G	2	JB801 灰塵器 宽	-4.3	-	-	口縁～底 直壁を含む	直壁かの直壁 直壁を含む	良好	5YR5/2灰褐色～ NA灰	5YR7/5灰褐色～ NA灰	直壁成形	付け高台	(直合部下)直削り	直壁による直壁		
63	252	G	2	JB801 灰塵器 宽	14.4	8.5	-	口縁～体直15	直壁かの直壁 直壁を含む	良好	5YR5/3に近い	5YR4/2灰褐色	直壁成形	直壁による直壁				
64	253	G	5	JB801 宝瓶器 直	-	4.0	-	外底部～側上部 直壁を含む	直壁斜面を含む	良好	5YR4灰	5YR4灰	直壁成形	直壁による直壁				
64	254	G	2	JB801 土師器 宽	-	0.9	-	底部直	直壁斜面を含む	良好	7.5YR5/4灰褐色 1.4mm	7.5YR5/4灰褐色 1.4mm	直付	直付	(直合部側面の直壁) 直付部切妻の直壁	直壁による直壁		
64	255	G	8	JB801 土師器 Ⅲ	10.8	2.7	4.8	口縁直～底 直壁	直壁斜面を含む	良好	10YR7/2に近い	10YR7/3に近い	直壁成形	平底より少し 立ち上がり直壁	(直合部側面の直壁) 直付部切妻の直壁	直壁による直壁		
64	256	G	3	JB801 土師器 Ⅲ	-	1.2	4.0	底部完全 直壁	直壁斜面を含む	良好	7.5YR7/4に近い	7.5YR7/4に近い	直壁成形	直壁による直壁	(直合部側面の直壁) 直付部切妻の直壁	直壁による直壁		

第 14 表 平成 19 年度尼寺南東域の調査出土遺物(1)

回数	品名	通称	種類	規格	量	外観	内面	被膜	内面の調査	外観調査	参考		
64	237 G	J0841	土壌器	升	14.5	4.8	6.0	口縁～体部1/2、 底部1/2 形態を含む い角	良好	7.5YR5/4±2.5 1.4角	繊維状形 大粒気泡の底 から外側して立ち上がる 繊維による織	(底面～体部)化粧板による 織で(底面～化粧板の底)瓦片 黒色色斑	
64	238 G	J0841	土壌器	升	12.5	3.4	5.8	口縁～体部1/3 底部を含む い角	良好	7.5YR7/4±2.5 1.4角	繊維状形 大粒気泡の底 に凹凸して立ち上がる 繊維による織	黑色色斑	
64	239 G	J0841	土壌器	升	13.8	3.6	6.2	口縁～体部～一部、 型は、相手を 合せ	良好	7.5YR5/3±2.5 1.4角	繊維状形 平坦より凹 に凹凸して立ち上がる 繊維による織	(底面～体部)化粧板による 織で(底面～化粧板の底)瓦片 黒色色斑	
64	240 G	J0841	土壌器	升	15.2	5.6	5.4	口縁～底、 体部～ 形態を含む い角	良好	7.5YR5/4±2.5 1.4角	繊維状形 平坦より凹 に凹凸して立ち上がる 繊維による織	(底面～体部)化粧板による 織で(底面～化粧板の底)瓦片 黒色色斑	
64	241 G	J0841	土壌器	升	13.6	3.7	6.5±3.4	0.2～0.3の縫隙、 形態を含む い角	良好	7.5YR6/4±2.5 1.4角	繊維状形 平坦より凹 し、わずかに斜面して 上から口縁を含む 繊維による織	瓦片 黑色色斑	
64	242 G	J0841	土壌器	升	-	1.6	7.8	尾高丸形 合せ	良好	7.5YR6/6±6 1.4角	繊維状形 付け高台 柱孔切口の後部調節 柱孔	瓦片 黑色色斑	
64	243 G	J0841	土壌器	升	-	1.7	5.7	底部1/2 形態を含む い角	良好	N5/5灰 5Y5/5灰	繊維状形 平坦 (底面～化粧板の底)瓦片 柱孔切口	柱孔による織で 柱孔による織で	
64	244 G	J0841	土壌器	升	-	1.8	9.3	底部1/3 形態を含む い角	0.2の縫 1.4の相手を 合せ	良好	2.5GY5/1±2 9.1～7.9K	繊維状形 付け高台 柱孔切口の後部調節 柱孔	柱孔による織で (底面～化粧板の底)瓦片 柱孔
64	245 G	J0841	土壌器	升	-	1.4	9.8	底部1/6 形態を含む い角	良好	N5/5灰 5Y5/5灰	繊維状形 付け高台 (底面～化粧板の底)瓦片 柱孔切口	柱孔による織で 柱孔による織で	
64	246 G	J0841	灰釉陶	升	15.2	4.7	-11輪1.6	口縁～底 形態を含む い角	良好	7.5YR6/1灰 7.5YR6/1灰	繊維状形 外側上部 柱孔による織で	外側上部 柱孔による織で	
65	267 G	J0841	土壌器	昇?	-	4.0	7.0	底部完全 形態を含む い角	良好	5YR6/6±6 7.5YR7/6±6	繊維状形 (底面～ 柱孔)切口の後部 柱孔	柱孔による織で 柱孔	
65	268 G	J0841	土壌器	小量	-	2.0	6.4	底部完全 形態を含む い角	良好	7.5YR6/5±6~ 7.5YR7/2±6	繊維状形 平坦より立ち上 (底面～化粧板)に立る織 柱孔	柱孔による織で	
65	269 G	J0841	小型 壇	升	2.0	5.3	底部1/4	器身、石英、粗 砂の相手を含む い角	良好	7.5YR3/2±6 1.4角	繊維状形 平底より立ち上 柱孔	柱孔による織で	
65	270 G	J0841	土壌器	昇?	-	3.4	6.0	底部完全 形態を含む い角	良好	7.5YR6/4±2.5 1.4角	繊維状形 平底より立ち上 (底面～化粧板)に立る織 柱孔	柱孔による織で	
65	271 SB	01	直筒器	實	-	3.0	10.5	口縁～頭部 形態を含む い角	良好	5Y4/4灰 5Y4/4灰	口縁による織で 頭部は所持なし 柱孔	平行又 柱孔による織で	

第15表 平成19年度尼寺南東城の調査出土物(2)

回数	通称	標名	種類	大きさ	輪	特徴	乾燥	湿土	色調	門面特徴		内部特徴	参考
										高さ	幅		
66	272 SK	01	丸瓦	11.5	13.7	2.0	圓柱状地塊	玉様～錐形状	0.2~0.3の褐色。褐色輪部有 色含む	7.576/1輪×~10/RS1輪	6/1	(未確認) 茶葉で 泡で	円筒體から膨張する
66	273 P	12	平瓦	7.7	10.8	2.0	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.3の褐色。白・褐色相 交織を含む	10/RS1輪×~7/2にぶる青葉	6/1	「木」の跡× 押し寄せ	丸筒體で
67	274 G	J08607	籽丸瓦	19.6					褐色輪部を含む	J0YR2/1輪			
67	275 G	J08615	丸瓦	8.3	4.3	1.7	圓柱状地塊	玉様	白色輪部を含む	J0YR1/7.1輪		右引の後退縮で	
67	276 G	J08613	平瓦	12.6	13.3	2.0	圓柱状地塊	玉様	石灰・白・黑色輪部を含む	J0YR7/3にぶる黄緑～2/1葉		左引の後退縮で	圓筒體から膨張する
67	277 G	J08613	平瓦	8.1	8.0	1.8	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.4の褐色。白色輪部 を含む	J0YR5/1輪×~7/5に葉		圓筒體外工作による物で 泡で	圓筒體から膨張する
67	278 G	J08614	平瓦	7.5	6.5	2.0	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。褐色輪部 を含む	J0YR5/1輪×~4/1葉			圓筒體から膨張する
67	279 G	J08614	平瓦	8.7	6.0	1.3	圓柱状地塊	玉様	白色輪部を含む	J0YR4/輪×~7/9葉	6/1	圓筒體、圓筒體側面 で	圓筒體から膨張する
67	280 G	J08613	平瓦	8.3	5.8	1.6	圓柱状地塊	玉様	白・褐色輪部を含む	J0YR4/輪×~7/9葉	6/1		圓筒體から膨張する
67	281 G	J08614	平瓦	6.3	4.6	2.0	圓柱状地塊	玉様	褐色輪部を含む	J0YR6/1葉			圓筒體から膨張する
67	282 G	J08614	平瓦	9.6	5.3	1.8	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の白・褐色。	J0YR4/3にぶる黃緑～5/1葉×	6/1		圓筒體から膨張する
67	283 G	J08606	平瓦	5.5	8.0	2.2	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の白・褐色。	J0YR4/4にぶる黃緑～10/RS6	6/1		圓筒體から膨張する
67	284 G	J08601	平瓦	4.4	8.3	2.2	圓柱状地塊	玉様	褐色輪部を含む	J0YR4/1葉×~5/3カリーボ	6/1	葉で	圓筒體から膨張する
67	285 G	J08615	丸瓦	9.0	8.5	3.0	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色相 交織を含む	J0YR7/4にぶる葉×~7/8に葉×	6/1	右引の後退縮で	圓筒體から膨張する
68	286 G	J08612	籽丸瓦	18.0					褐色輪部を含む	J0YR5/2輪×~4/1葉			
68	287 G	J08613	丸瓦	11.3	7.4	1.8	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色 輪部を含む	J0YR6/2輪×~4/1葉	6/1		圓筒體から膨張する
68	288 G	J08613	丸瓦	11.7	10.0	2.5	圓柱状地塊	玉様	白色輪部を含む	J0YR1/7.1輪			圓筒體から膨張する
68	289 G	J08611	丸瓦	14.2	11.5	1.7	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色 輪部を含む	J0YR6/1葉			圓筒體から膨張する
68	290 G	J08613	丸瓦	7.2	8.1	1.7	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色 輪部を含む	J0YR1/7.1輪			圓筒體から膨張する
68	291 G	J08612	丸瓦	9.2	6.5	1.8	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色 輪部を含む	J0YR6/2輪×~4/1葉	6/1		圓筒體から膨張する
68	292 G	J08612	平瓦	7.5	8.0	2.3	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色 輪部を含む	J0YR5/1葉×~10/5.1葉	6/1	圓筒體、圓筒體側面 で	圓筒體から膨張する
68	293 G	J08612	平瓦	7.6	7.2	2.2	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色 輪部を含む	2.5(YR1/輪×~7/9葉 ×~7/9葉)	6/1	(未確認) 茶葉で 泡で	圓筒體から膨張する
68	294 G	J08613	平瓦	8.0	6.4	1.6	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の白・褐色。	10/4/葉			圓筒體から膨張する
68	295 G	J08612	平瓦	7.6	5.7	2.3	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の白・褐色。	J0YR6/2輪×葉	6/1		圓筒體から膨張する
68	296 G	J08613	平瓦	6.0	5.5	2.1	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色 輪部を含む	J0YR6/2輪×~10/YR6/2輪	6/1		圓筒體から膨張する
68	297 G	J08612	平瓦	5.9	6.5	2.0	圓柱状地塊	玉様	0.2~0.5の褐色。白・褐色 輪部を含む	J0YR6/2輪×~10/YR6/2輪	6/1		圓筒體から膨張する

第17表 平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物(3)

図版	遺物	種類	番号	長	幅	厚さ	地城	属性	出土	色調	内面調査	備考
67-277	G	J0813	丸瓦	7.2	8.1	1.7	簡化炎 焼成	玉碌～剥落 状器	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR 7/13	毛目	四隅、凸出部から剥落する
67-278	G	J0812	丸瓦	9.2	6.5	1.8	簡化炎 焼成	粗面状器	白・褐色粗砂粒を含む	7.5YR 7/24E端	毛目	
67-279	G	J08e12	平瓦	7.5	8	2.3	還元炎 焼成	凸端部	白・褐色粗砂粒を含む	7.5Y5/1灰～10Y5/1灰	毛目	剥落り 植で
67-280	G	J0812	平瓦	7.6	7.2	2.2	還元炎 焼成	凸端部	白色粗砂粒を含む	2.5G Y5/1灰オーブ灰～ 5.1オリーブ灰	毛目	四隅剥かれて浅く剥落する
67-281	G	J0813	平瓦	8	6.4	1.8	還元炎 焼成	粗面状器	白色粗砂粒を含む	10Y4/4灰	毛目	四隅剥かれて浅く剥落する
67-282	G	J08e12	平瓦	7.6	5.7	2.3	還元炎 焼成	粗面状器	白色粗砂粒を含む	10Y6/1灰～10Y R6/2B灰	毛目	四隅剥かれて浅く剥落する
67-283	G	J0813	平瓦	6	5.5	2.1	簡化炎 焼成	凸端部	白色粗砂粒を含む	7.5Y R1/2黒褐～4/6褐	毛目	四隅剥かれて浅く剥落する
67-284	G	J0812	平瓦	5.9	6.5	2	簡化炎 焼成	粗面状器	0.9の褐色 0.1の褐色 白色粗砂粒を含む	10Y 6/1灰～10Y R6/2	毛目	四隅剥かれて浅く剥落する

第18表 平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物(4)

図版	遺物	種類	番号	名称	長さ	幅	厚さ	重量	備考
69	G	I08108	石製品	石鏡		1.9	1.3	0.3	0.84 黒曜石
69	G	I08n15	土製品	土製円盤	直径 4.3		0.8	10.2	
70	G	J08113	銅鏡	元豐通宝	直径 2.4		0.1	3.0	

第19表 平成19年度尼寺南東域の調査出土遺物(5)

### 3 平成20年度尼寺廻西城の調査出土遺物

回数	遺構	上層						参考					
		回復あり 種類	あり 種類	種類	埋蔵	11番 置き	置き	風景	外見色調	風景・形態	外見調査		
81-3017	土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	11番	良好	良好	白色 白身はかの田形 乾燥食入	7.5YR 5/4K	褐色底形	被覆部は短く、(天井下位)側面より擦 擦地による擦で		
81-3028X	01 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	15.6	1.3	-	瓶底1/6	NwN/灰	褐色底形	被覆部は短く、(天井下位)側面より擦 擦地による擦で		
81-3037	01 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	3.2	7.4/5	7.体部下位～底部 金切付、瓶69E	良好	5YR5/4/1灰褐	褐色底形	付け高台の底部 より立ち上がる		
81-3037	01 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	1.8	6.6	底部1/6	良好、相鉢を含む	7.5YR4/1灰褐	褐色底形	付け高台 より立ち上がる		
81-3047	02 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	1.7	12.1	底部1/4	良好	10YR6/2L-5C 土壤質	褐色底形	付け高台 より立ち上がる		
81-3057	04 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	3.1	-	11体～1体上部	良好	7.5YR4/4L-5C 土壤質	褐色底形	付け高台 より立ち上がる		
81-3067	04 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	23.3	3.3	-	口縁1/10	良好	7.5YR5/4/1灰 褐色	褐色底形	付け高台 より立ち上がる	
81-3077	05 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	11.0	2.4	5.5	底部～体部1/2 瓶底2作	良好	5YR5/4/1灰 褐色	褐色底形	人気臭味の底部 から外側して立ち上がる	
81-3087	05 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	12.0	2.8	-	口縁1/5	良好	7.5YR4/1灰褐	褐色底形	人気臭味の底部 から外側して立ち上がる	
81-3097	05 土壌器 砂	乳頭器 磁	-	瓶	13.7	3.0	-	口縁1/7	良好	7.5YR7/0灰 褐色	褐色底形	人気臭味の底部 から外側して立ち上がる	
81-3107	06 土壌器 磁	乳頭器 磁	-	瓶	33.0	16.8	-	口縁～別部1/3	良好、相鉢を含む	良好	7.5YR7/0灰 褐色	褐色底形	人気臭味の底部 から外側して立ち上がる
81-311G	1100	陶器 直	-	瓶	15.4	1.9	-	11底1/6	良好	7.5YR7/0灰 褐色	褐色底形	人気臭味の底部 から外側して立ち上がる	
81-312G	0	110n 灰釉陶 直	-	瓶	20.6	3.9	-	11底1/6	良好	10YR5/4/1灰 褐色	褐色底形	人気臭味の底部 から外側して立ち上がる	
81-313G	H10e 灰釉陶 直	-	-	瓶	1.6	5.2	1.体部～底部	相鉢を含む	良好	5YR5/2灰 褐色	褐色底形	人気臭味の底部 から外側して立ち上がる	
81-314G	110n 灰釉陶 直	-	-	瓶	1.5	4.4	底部2作	相鉢を含む	良好	5YR8/2灰白	褐色底形	付け高台 より立ち上がる	
81-315G	1100 脚器 直	-	-	瓶	1.4	9.3	底部1/2	相鉢を含む	良好	白	褐色底形	付け高台 より立ち上がる	
81-316G	110e 硬質 漆	-	-	瓶	2.4	4.5	底部1/2	相鉢を含む	良好	白	褐色底形	被覆部は外傾して いる	
81-317G	8 土壌器 砂	-	-	瓶	12.0	4.0	-	口縁1/7	良好	10YR6/2L-5 土壤質	褐色底形	被覆部は外傾して いる	
81-318G	110e 土壌器 砂	-	-	瓶	1.3	6.0	底部1/2	相鉢、相鉢を含む 含む	良好	7.5YR6/4 土壤質	褐色底形	被覆部は外傾して いる	

第20表 平成20年度に守南西城の調査出上遺物(2)

回数	遺物 種類	遺物 番号	種類	遺物 番号	種類	遺物 番号	種類	遺物 番号	種類	遺物 番号	内面の調 査	外面の調 査	属性・形質	外側調査	内側調査	
												内面 直角	内面 斜角	外面 直角	外面 斜角	内面の調 査
81	319 G	110g	土壜器	H6	13.8	4.8	口縁～底部1/3	直筒	良好	7.5YR6/7W6	直	丸足より全体高さく内向し て立ち上がり、直筒	(直筒)直筒状の腰で 直筒による腰で黒色色斑	丸足	直筒	
81	320 G	110g	土壜器	H6	11.0	5.3	5.8	口縁～底部1/4	直筒	粗60mmを含む	7.5YR5/4C1-E	直	直筒～底部1/2	直筒～底部1/2	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3
81	321 G	110g	土壜器	H6	3.2	6	体部下～底部	直筒	良好	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/4	直筒～底部1/4	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3	
81	322 G	110g	灰釉陶	H6	12.4	6.7	4.7	口縁～底部1/2	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/4	直筒～底部1/4	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3
81	323 G	110g	灰釉陶	H6	9.5	3.9	-	口縁～底部1/3	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/4	直筒～底部1/4	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3
81	324 G	110g	灰釉陶	H6	13.8	3.1	-	口縁～底部1/10	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/4	直筒～底部1/4	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3
81	325 G	110g	灰釉陶	H6	15.2	3.5	-	口縁～底部1/7	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/4	直筒～底部1/4	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3
82	326 G	8	土壜器	直	10.8	5.8	-	口縁～底部1/2	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/4	直筒～底部1/4	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3
83	327 G	10	縦器	直	8.1	5.4	-	口縁～底部1/4	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/4	直筒～底部1/4	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3
83	328 G	9	土壜器	直H6	3.6	15.2	15mmを含む	直筒	良好	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/5	直筒～底部1/5	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3	
83	329 G	110g	土壜器	直H6	-	2.1	16.8	16mmを含む	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/6	直筒～底部1/6	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3
83	330 G	110g	土壜器	直H6	4.5	-	鋼柱1/2	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～底部1/6	直筒～底部1/6	直筒状～底部1/3	直筒状～底部1/3	
83	331 G	110g	土壜器	直	17.6	9.3	-	口縁～脚上部	直筒	石質、直筒、良好	7.5YR4/3H4-E	直	直筒～脚上部	直筒～脚上部	直筒状～脚上部	直筒状～脚上部
83	332 G	110g	土壜器	直	25.4	3.7	-	口縁～底部1/10	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～脚上部	直筒～脚上部	直筒状～脚上部	直筒状～脚上部
83	333 G	8	土壜器	小型	11.8	4.2	-	口縁～底部1/4	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～脚上部	直筒～脚上部	直筒状～脚上部	直筒状～脚上部
83	334 G	110g	土壜器	直	19.4	2.4	-	口縁～脚上部	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～脚上部	直筒～脚上部	直筒状～脚上部	直筒状～脚上部
83	335 G	110g	土壜器	直	-	3.0	11.8	23mmを含む	直筒	白色は白	10YR6/2H4-E	直	直筒～脚上部	直筒～脚上部	直筒状～脚上部	直筒状～脚上部
83	336 G	6	土壜器	直	-	4.4	5.6	体部～底部1/2	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～脚上部	直筒～脚上部	直筒状～脚上部	直筒状～脚上部
83	337 G	110g	土壜器	直	-	6.4	-	体部～直	直筒	粗60mmを含む	10YR6/2H4-E	直	直筒～脚上部	直筒～脚上部	直筒状～脚上部	直筒状～脚上部
83	338 G	110g	灰釉陶	直	-	10.4	11.4	16mmを含む	直筒	粗60mmを含む	10YR6/1H4	直	直筒～脚上部	直筒～脚上部	直筒状～脚上部	直筒状～脚上部

回数	通称	説明	種類	規格	11番	12番	13番	現存	歴史	地上	外表面色	内面調整	参考
83	339 G	110g	土瓶器	手釜	-	2.2	-	脚部一箇	墨目、粗砂粒を含む	5YR5/6M1/4	7.5YR4/2M2/4	脚位の施で	
83	340 G	110h	土瓶器	中口	33.6	5.1	24.1	脚部1/4	粗砂粒を含む	10YR5/2M1/5 10YR2/1M	10YR4/2M2/4	脚位の施で	
83	341 G	110h	墨文土瓶	手釜	-	2.3	7.4	底部1/2	石系、墨目、粗砂粒を含む	5YR6/6M	5YR5/6M2/4	直面に木の施で	
83	342 G	110d	手生土瓶	口	11.7	2.5	-	11縁一箇	石系、石系6Mを含む	5YR5/2M2/4	5YR5/6M2/4	直面の施で	
83	343 G	110G	手生土瓶	口	13.8	5.2	-	11縁一箇	石系、墨目、粗砂粒を含む	5YR5/4M1/5 1M	7.5YR6/1M1/5 1M	直面の施で	
83	344 G	110G	縦目	口	3.8	1.7	-	-	良好	-	10YR5/3M1/5 1M	直面の施で	

第21表 平成20年度尼寺南西城の調査出土遺物(3)

回数	通称	種類	規格	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	焼成	残存	粘土	K	内面調整	参考
84	345 Tr	01	平瓦	8.2	8.5	2.4	墨目火燒地	瓦端部	5YR4/2M1/4～10YR5/4M	瓦目の焼付あり	焼き口	瓦面から施される
84	346 Tr	01	平瓦	9.2	6.6	2.1	墨目火燒地	瓦端部	7.5YR6/1M1/5～6M1/5	瓦の焼付あり	瓦面から施される	
84	347 Tr	02	平瓦	8.4	3.7	2.0	墨目火燒地	瓦端部	10YR4/1M2/4	瓦の焼付あり	瓦面から施される	
85	348 Tr	04	平瓦	14.0	14.5	2.5	墨目火燒地	瓦端部	7.5YR7/3M1/5～6M1/5	瓦の焼付あり	瓦面から施される	
85	349 G	110h8	手丸瓦	18.0	-	-	墨目火燒地	瓦端部	5YR5/6M2/4	瓦の焼付あり	瓦の焼付あり	
85	350 G	110h8b	手丸瓦	14.0	17.0	3.5	墨目火燒地	瓦端部	7.5YR5/4M1/5～6M1/5	瓦の焼付あり	瓦の焼付あり	
85	351 G	110h8b	手丸瓦	7.8	6.2	1.5	墨目火燒地	瓦端部	5YR4/6M2/4	瓦の焼付あり	瓦の焼付あり	
85	352 G	110h8	手丸瓦	15.3	7.7	2.1	墨目火燒地	体部端部	10YR5/3M1/5～6M1/5	瓦の焼付あり	瓦の焼付あり	

第22表 平成20年度尼寺南西城の調査出土遺物(4)

図版	番号	種類	遺構 番号	種類	名称	長さ	幅	厚さ	重量	備考
86	353	土製品	II0g09	羽口		6.5	外径 6.0	内径 2.0	91.9	
86	354 G	石製品	II0g09	織み物石?		13.3	6.7	3.8	430.1	安山岩
86	355 G	石製品	II0f08	敲き石		23.2	7.0	5.8	1630.2	四鍊岩
87	356	銅鏡	II0k09	元豐通宝	直径 2.4		0.1	3.2		
87	357 S X 01	銅鏡		寳永通宝	直径 2.1		0.1	2.1		

第23表 平成20年度尼守南西城の調査出土遺物(5)

## 第四章 考察

### 第1節 僧寺西門跡の調査成果について

平成18年に実施された僧寺跡西側と尼寺東側の築地塀跡(ついじべいあと)の確認調査により、僧寺西門跡と推定される掘立柱建物跡が確認された。この建物跡は金堂跡の真西に所在し、僧寺築地塀のほぼ中間に位置していること、西方の門の外より一段高い場所に建てられていることなどから西門跡と推定された。西門跡は桁行(けたゆき)が5.1m(17尺)、梁行(はりゆき)が2.7m(9尺)の規模で、桁行の中間には礎石があったものと推測され、その上に親柱(おやばしら)が立つと推定された。この前後には掘立の控柱(ひかえばしら)跡が確認され、控柱が4本の四脚門(しきゃくもん)であることが判明した。親柱の間には門扉(もんび)が付き、開閉していたと推定された。

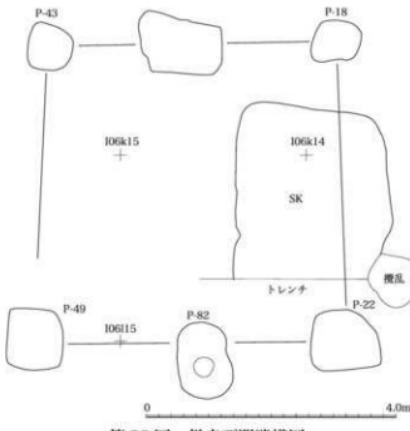
さらにこの西門の西側1.8m(6尺)の箇所には、柱穴が2個並列して同じ桁行で確認され、廂付(ひさしつき)の門であることが確認された。この西門は親柱を除いて礎石が用いられておらず、また周辺から出土する瓦量は極めて少量のため檜皮葺(ひわだぶき)や板葺、屋根の棟だけに熨斗瓦(のしがわら)を用いて葺いた熨斗棟(のしむね)などの可能性が考えられた。この西門跡の検出により、僧寺の西側の出入り口が明確になり、さらに僧寺西築地塀の位置がこれまでの想定ラインより西側に5m振れていたことが確認された。

僧寺跡と尼寺跡の中間地点には、国分遺跡群の調査で検出された8世紀後半には幅が約6m、9世紀には幅が約9mの南北に通じる両側に側溝を有した道路状遺構(註1)が設置され、僧寺跡の南側に想定される東山道に合流していた可能性が推測されていた。しかし、この地点は後世の改変が著しく、今回の調査では明確な道路状遺構は確認されなかった。信濃国分寺の僧寺跡と尼寺跡の築地塀の間の直線距離は約40mあり、両寺は極めて近接している。武藏国分寺跡(東京都国分寺市)の調査事例のように、道路(東山道武藏路)が僧寺・尼寺の中間地点に設置される事例があり、信濃国分寺跡でも今後僧寺・尼寺の中間地点から道路状遺構が検出される可能性が考えられる。

なお、国分寺の西門跡の検出例としては、上総国分寺跡(千葉県市原市に所在。桁行3間(10.8m)、梁行2間(5.7m)の八脚門を確認)、肥前国分寺跡(佐賀県佐賀市に所在。基壇の西北隅部分を確認)、豊後国分寺跡(大分県大分市に所在。大形柱穴を出土)などが知られている。(註2) 中門・南大門以外の門の調査事例は少なく、本事例は貴重な成果と考えられる。

廂付の門は平城宮第二次朝堂院南門、岩手県胆沢城政庁南門などが知られている。こうした廂の存在により広い空間が確保でき、門が祭儀における役人・僧などの着座の場として使われ、門が儀礼空間としても重要な役割を果たしていたことが指摘(註3)されている。

特に門の中央部には、焼土・炭化物を含んだ約50cm×40cmの大きさの浅い窪みが検出され、その中央から8世紀代の土御器皿が出土し、地鎮祭祀(じちんさいし)の痕跡と考えられた。焼土や炭化物が出土したことから穴を掘った後に火を焚いて地鎮祭を行



第88図 僧寺西門遺構図

つたとみられ、門から入る災厄や不浄、土地の穢(けが)れなどを焼いて祓う意味があったと推測される。

古代の地鎮祭跡については、福岡県太宰府市の大宰府政府の中門基壇跡から短頸壺が出土し鎮壇(ちんだん)遺構とみられている。また奈良県大和郡山市の平城京の宅地跡などから、地鎮祭跡と推定される遺構が出土している。平成19年には藤原宮大極殿院南門西回廊跡の下方から60cm四方の穴に安置された須恵器の平瓶(へいへい)が出土し、富本鏡9点、水晶9点が内部から確認され、地鎮祭跡遺構とみられている。日本書紀の持統天皇6(692)年の条には「藤原の宮地を鎮め祭らしむ」と記述され、この記載と関連した遺構と推測され、藤原宮の平安・長久を祈願したものと考えられている。(註4)

平成20年には京都市の花園大学構内から火を用いて地鎮祭を行ったとみられる遺構が出土している。(註5)この地点は平安京大内裏跡西方の貴族の屋敷とみられる桁行7間を超える9世紀の建物跡で、地鎮祭に関係した遺物が出土している。直径約45cmの穴を浅く掘って、火を焚いた後に須恵器長頸壺などを安置し、地鎮祭を行ったと推定されており、この信濃国分寺僧寺西門跡の地鎮祭跡遺構との共通性が推測される。

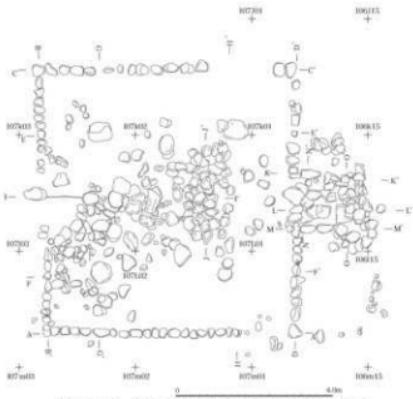
## 第2節 西門西側の礎石建物跡について

僧寺西門跡の西側に隣接して礎石建物跡が出土した。建物跡とみられる遺構の四周を径約20cmから40cm程度の川原石や割石の石列で囲み、東側には出入口とみられる突出した石列が認められた。この方形の石列は一辺に20個から25個程度の川原石や割石を内側に面を揃えて設置し、長さは北辺6.84m、東辺7.20m、南辺6.72m、西辺7.20mで、突出部の長さは東西1.80m、南北1.80mであった。この方形石列の内部には当初からの礎石とみられる径が約50cmから80cmの平石が3個確認され、東南隅にも1箇所推定された。これらの礎石間の距離は3.84mであった。この方形石列の内部には120点余の川原石が集積され、廃棄された状態で検出された。これらの川原石は平石が多く、この建物や周辺建物の礎石や石積みに使用されたと推測された。

この建物の用途については、一つには方三間の宝形造か寄棟造・入母屋造で、周間に切目縁を廻らした小規模な仏堂の可能性が推測される。建物周囲の方形石列は基壇縁石とみられ、突出部の石列は乱石積み階段の基礎部分と推測された。なお、千曲市の五輪堂遺跡からは同様な方形石列の遺構が出土し、中世の三間堂の可能性が指摘(註6)されている。この方形石列の規模は6.8m×6.7mで、南側の突出部は1.5m×0.8mあり、この礎石建物跡とはほぼ同様の大きさである。

県内では中世の三間堂でこれらと同規模の小堂がみられる。下伊那郡大鹿村の福徳寺本堂(室町時代前期・重要文化財)は、入母屋造の方三間堂で、三間の建物の一辺は4.85m、基壇の縁石の一辺の長さは7.53mあり、ほぼ同規模の小堂である。(註7・文末の「長野県内の中世の主な小仏堂一覧」参照)

この礎石建物跡は、東側の出入口とみられる突出部が西門跡の扉部分と約1.1mの幅で東西方向に重複しており、西門の通路をちょうど塞ぐ形に礎石建物が建てられていることから、これらの遺構が同時期のものでないことは明白であった。このため西門の機能が停止したと考えられる、承平8(938)年の平将門と平貞盛の合戦により兵火にかかるて信濃国分寺伽藍が一部焼失したと伝えられる時期以降、



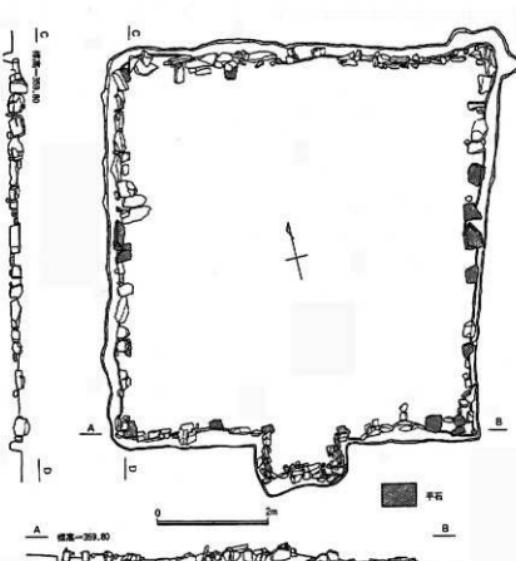
第89図 僧寺西門跡西の礎石建物遺構図

平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構と推測され、両者の建物の存続時期にはそれほどの隔たりは無いと推測された。

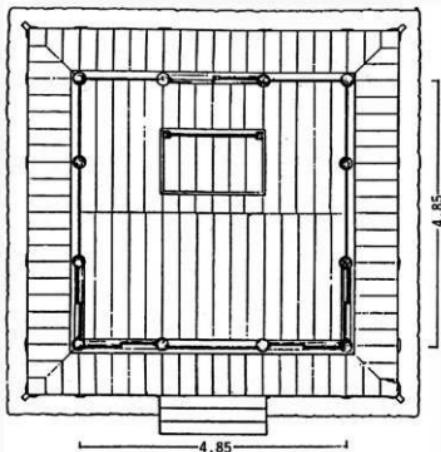
ところで、この礎石建物跡の西辺の礎石列の中央内側には、東西0.7m、南北1.3mの半円形の形に焼土が認められ、石を用いて竈を築き、火を焚いた遺構と推測された。この礎石建物跡が平安時代後期から中世にかけての方三間の仏堂跡とすると、竈跡はこの仏堂が廃絶した後に、その礎石や縁石などの石材を利用して竈を築いて、煮炊などのために火を焚いた可能性が考えられる。

また、この建物の用途のもう一つの可能性としては、建物の内部に竈を築いた湯屋（ゆや）の遺構と考えられる。この湯屋遺構としては、京都府向日市の長岡京跡の宝菩提院庵寺の湯屋遺構（註8）がある。この遺構は平安時代前期に願徳寺に造られた湯屋と推定されている。湯屋は湯を沸かして入浴し、垢（あか）などを落とした場所である。古代では風呂は蒸し風呂をさしていたとみられているが、寺院では仏教儀式に基づいて湯を沸かし、僧侶や庶民が入浴していたと推定されている。中世の湯屋には文献などから釜場（湯を沸かす室）、浴室（湯を浴びる室）、前室（脱衣所で法要も行われた）があったことが知らされている。

この宝菩提院湯屋遺構では、直径1.7mの半円形をした竈があり、鉄釜で湯を沸かしていたとみられている。その周囲（2.3m×3.0mの範囲）には方形に扁平な川原石が敷詰められ、西端に焚口があつたとみられている。竈の北側にはさらに石敷がなされ、中央付近には幅約20cm程度の排水溝が確認された。また遺構には覆屋（おおいや）があつたことが確認され、この建物は東西4間（2.1m～2.7m）、南北2間（2.7m）の身舎（もや）で、廻付であった可能性が推測されている。柱穴は11個検出され、0.8m四方の方形の柱穴であった。この東

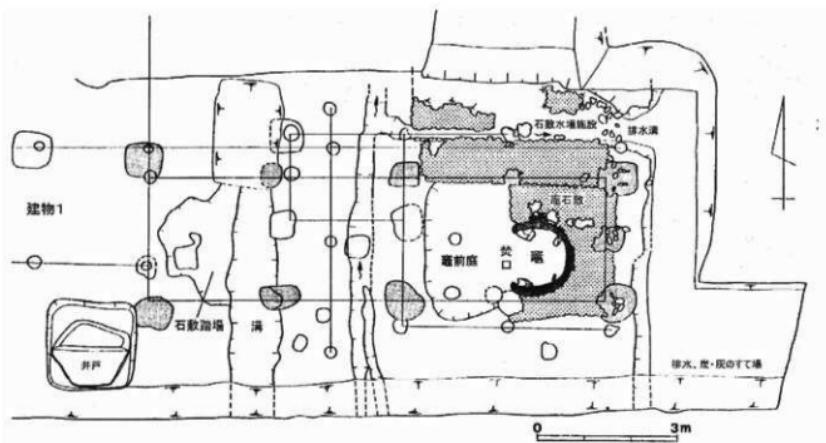


第90図 千曲市五輪堂遺跡堂跡遺構図（「五輪堂遺跡」より）

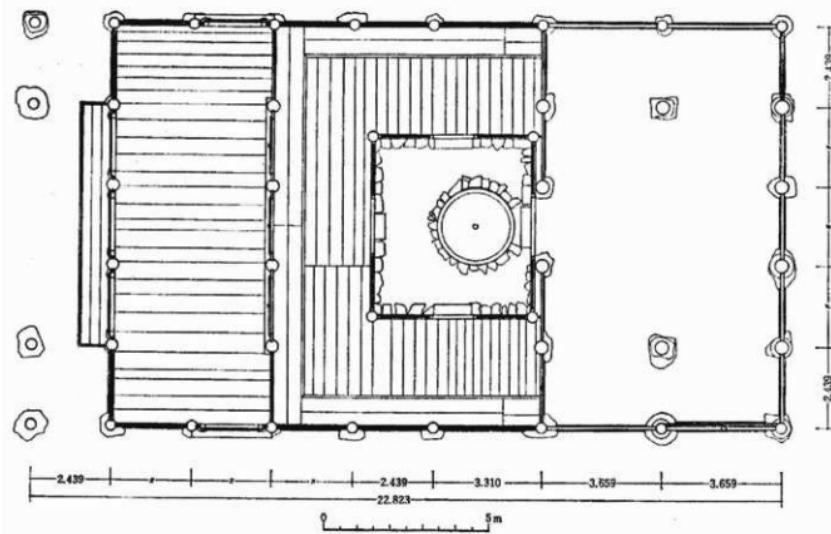


第91図 大鹿村福徳寺本堂平面図

（『長野県の国宝・重要文化財－建造物編－』より）



第92図 長岡京市宝菩提院廃寺の湯屋遺構図（「長岡京跡右京第755・762次調査現地説明会資料」より）



第93図 東大寺大湯屋平面図（『国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事報告書』より）

西棟の掘立柱建物の内部に大型の竈が1基、石敷、排水溝などの施設が検出され、隣接して井戸跡も確認され、湯屋の可能性が極めて高いと推定されている。この湯屋遺構は出土した土師器壺・皿や瓦から、平安時代前期の9世紀末から10世紀前半頃まで存続していたとみられている。

また山口県防府市の阿弥陀寺の湯屋遺構は、湯屋を解体調査して、近世・中世の湯屋遺構が確認された。この調査の結果、近世には2基の釜が据えられ、中世には竈1基の遺構が出土している。また現存する湯屋としては、東大寺の大湯屋（註9）がある。この東大寺の湯屋は鎌倉時代の延慶元（1239）年に建てられ、応永15（1408）年に大きく改修されている。湯屋には釜場・浴場・前室があり、釜で湯を沸かして入浴したとみられている。

この信濃国分寺跡出土の礎石建物跡については、明確な出土遺物が無く、この竈跡も礎石建物に当初から設置されたものかどうかは不明確である。竈跡とみられる焼土や石を用いた遺構が西辺中央の内部に1基検出されたが、周辺には石敷、排水溝、井戸跡などの湯屋の遺構は確認できない。このため現時点では、湯屋跡と確定することはできず、この礎石建物跡が仏堂跡か湯屋跡の可能性があることを指摘するにとどめておきたい。

No	名 称	所 在 地	建築構造(時期)	建物規模	備 考
1	中禪寺薬師堂	上田市西前山	宝形造・茅葺 (鎌倉時代初期)	3間×3間 6.75m四方	平安時代後期の様式を残すが床下の足固貫から時期を推定
2	福徳寺本堂	下伊那郡大鹿村大河原	入母屋造・柿葺 (室町時代前期)	3間×3間 4.85m四方	信濃宮と称された宗良親王との関連が推定されている
3	淨光寺薬師堂	上高井郡小布施町雁田	入母屋造・茅葺 (室町時代中期)	3間×4間	応永15（1408）年の墨書きが残る
4	盛蓮寺觀音堂	大町市社	寄棟造・元茅葺 (室町時代後期)	3間×3間 5.475m四方	寺の古文書に文明2（1467）年の建立と伝える
5	法住寺虚空藏堂	上田市東内	入母屋造・柿葺 (室町時代後期)	3間×4間	文明18（1486）年に再建の棟札が残る
6	松尾寺本堂	安曇野市有明	寄棟造・元羽葺	3間×3間	大永8（1528）年に仁科氏の中興開基と伝える
7	遠照寺釈迦堂	伊那市高遠町山室	入母屋造・現在 銅版葺（室町時代後期）	3間×3間	仏壇に天文7（1538）年の墨書きがあり、「大仏様」の建築手法がみられる
8	智識寺大御堂	千曲市八坂	寄棟造・茅葺 (室町時代後期)	3間×4間	和様を基に、組物・木鼻に禪宗様の手法が残る
9	西光寺阿弥陀堂	上田市富士山	入母屋造・茅葺 (室町時代後期)	3間×3間 5.4×7.2m	禪宗様の手法を多用し、16世紀前期頃とみられる

第24表 長野県内の中世の主な小仏堂一覧（県宝の西光寺阿弥陀堂を除き他は重要文化財）

### 第3節 九九算の文字瓦について

僧寺西門跡東側付近からは「七九六十三」の九九算のヘラ書き文字が出土して、注目された。この文字瓦は縦11.0cm、横11.3cmの大きさの平瓦で、凸面には斜状平行印き目、凹面には布目痕が残存し、その形状から8世紀後半に位置付けられた。文字は凹面に細く鋭利な書体で「七九六十三」と刻書され、二字目の「九」を除いて筆順は現在と同一である。比較的熟達した書体で、文字の意味を理解して、九九算を瓦の焼成前に、製作した瓦工などが習書として刻書したと推測された。こうした九九算を瓦にヘラ書きした資料としては、奈良県桜井市の山田寺跡で「九々八十一、八九七十二」、明日香村の奥山久米寺で「九九八十一、八九七十二」の瓦が出土（註10）し、いずれも7世紀後半のもので瓦工の習書とみられている。

九九算は中国すでに殷代（紀元前15世紀から紀元前11世紀）の甲骨文字にみられ、わが国には7世紀後半に浸透したと推測されている。万葉集の山部赤人の歌（卷6-926）に「わご大君は・・・朝狩に十六（鹿猪・しし）履み起こし」と十六と書いて四四（鹿猪）と読ませている。また卷13-3330の歌には「八十一里」と書いて

「くくり」と読ませ、九九算による戯書とされている。

(註 11)

九九算を記した木簡は藤原京跡、平城京跡、平安京跡をはじめ各地でみられ、千曲市の屋代遺跡群からも九九算の墨書(木簡 81 号・116 号・117 号の 3 点)が認められている。当時の九九算は、出土した木簡や瓦、源為憲が天禄元(970)年に藤原為光の子の教科書として編纂した事典である『口遊』(くちずきみ)などの史料から「九九八十一」から始められたとされている。九九算は暗算で即座に計算することができ、知識の無い一般の人々には神秘性をもつ不思議な術と當時はみられていたという。

この西門跡付近出土の「七九六十三」の刻書の平瓦の上部は欠損しているが、そこに「九九八十一」「八九七十二」の九九算の刻書があった可能性が推測される。瓦に九九算が習書された事例は前述のように少なく、本資料は九九算の瓦への習書として貴重な事例と考えられる。



第 94 図 僧寺西門跡付近出土九九算刻書平瓦

## 註

- 1 上田市教育委員会 2002 年『国分遺跡群』
- 2 角田文衛編 1987 年『新修 国分寺の研究 第五巻下 西海道』吉川弘文館
- 3 山中敏史 2003 年『VI-7 門』『古代の官衙遺跡』奈良文化財研究所
- 4 毎日新聞社 2007 年『藤原宮跡 最古の鎮壇具出土』(2007 年 11 月 30 日付毎日新聞記事)
- 5 花園大学発掘調査スタッフ 2008 年『花園大学 発掘日誌』(2008 年 2 月 7 日付ブログ記事)
- 6 矢島宏雄 1982 年『五輪堂遺跡』『長野県史考古資料編 全一巻(二)主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会
- 7 太田博太郎監修 1987 年『長野県の国宝・重要文化財一建造物編一』郷土出版社
- 8 (財)向日市埋蔵文化財センター 2003 年『長岡京跡右京第 755・762 次調査現地説明会資料 宝善提院廃寺の湯屋遺構』
- 9 東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事事務所編 1938 年『国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事報告書』
- 10 金子裕之 1996 年『歴史発掘 12 木簡は語る』講談社
- 11 佐竹昭広他 2002 年『萬葉集 三』新日本古典文学大系 岩波書店

# 写 真 図 版





PL.62 平成 18 年度調査区全景 (写真上が北)



PL.63 平成 18 年度北調査区全景 (写真上が北)

(2)



PL.64 平成18年度調査区(南から)



PL.65 平成18年度調査区全景(西から)

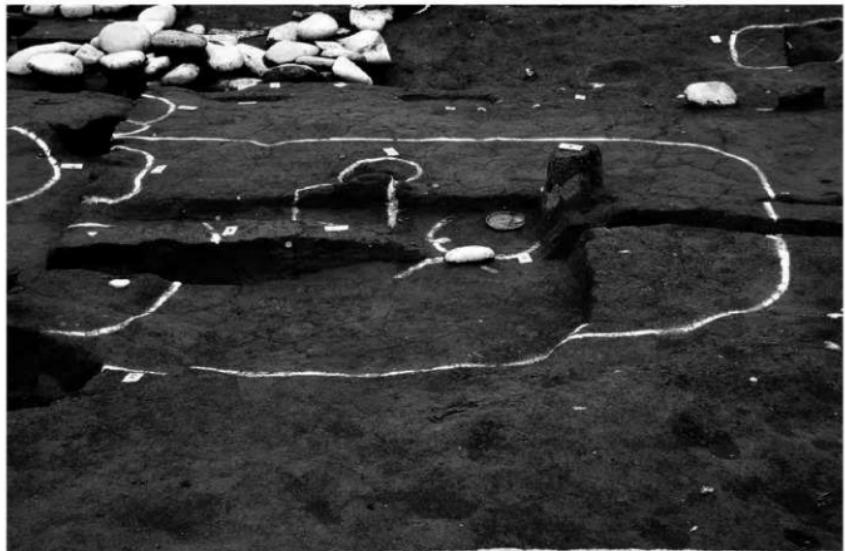


PL.66 平成18年度北調査区僧寺西門跡(写真上が北)



PL.67 平成18年度北調査区僧寺西門跡(西から)

(4)



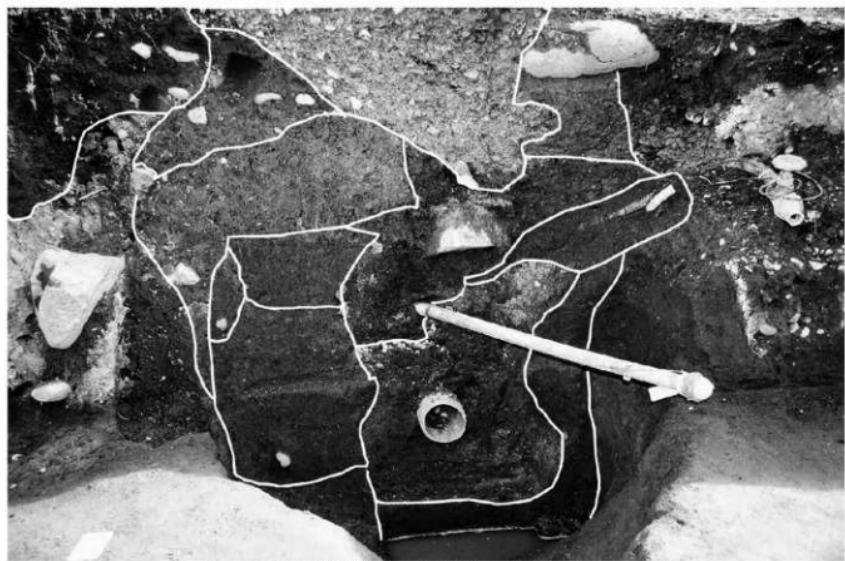
PL.68 平成18年度北調査区僧寺西門祭祀跡(東から・楕円形のプラン)



PL.69 平成18年度北調査区僧寺西門祭祀跡(南から・楕円形のプラン)

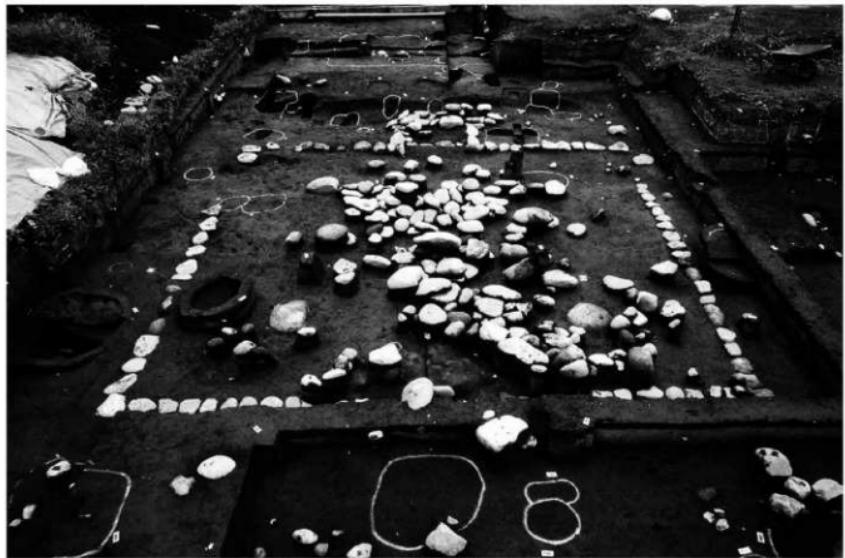


PL.70 平成18年度北調査区僧寺西門跡北東控柱セクション（北から）



PL.71 平成18年度北調査区僧寺西門跡南東控柱セクション（北から）

(6)



PL.72 平成18年度北調査区礎石建物跡(西から)



PL.73 平成18年度北調査区礎石建物跡(東から)



PL.74 平成18年度北調査区礎石建物跡(南から)



PL.75 平成18年度北調査区礎石建物跡東側凸部(写真上が東)

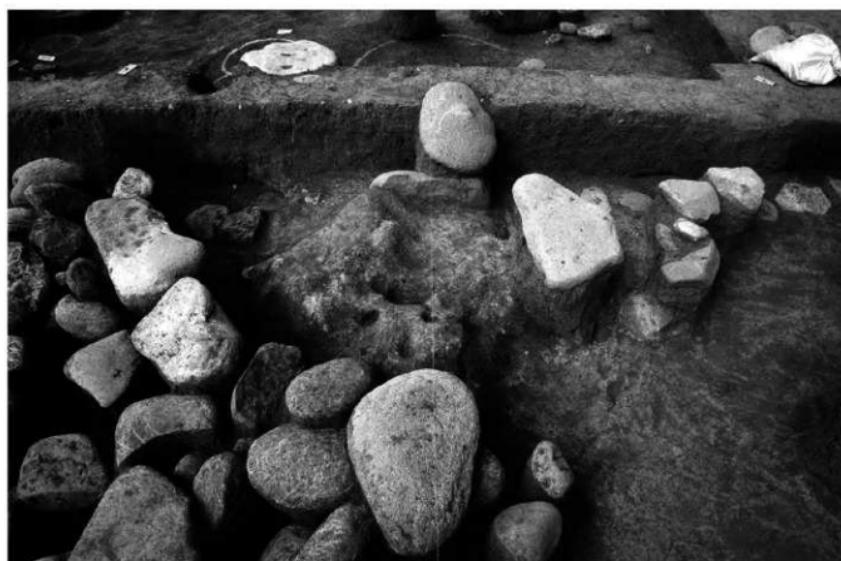
(8)



PL.76 平成18年度北調査区基礎建物跡東側凸部(西から)



PL.77 平成18年度北調査区基礎建物跡東側凸部(南から)



PL.78 平成18年度北調査区礎石建物跡西側火廻(東から)



PL.79 平成18年度北調査区礎石建物跡西側火廻(西から)

(10)



PL.80 平成18年度北調査区礎石建物跡西側火廻(南から)



PL.81 平成18年度北調査区礎石建物跡西側火廻(北から)



PL.82 平成18年度北調査区從前築地跡想定ライン（南から・造成土下に西下がりの硬化面）



PL.83 平成18年度北調査区從前築地跡想定ライン（北西から・造成土下に西下がりの硬化面）

(12)



PL.84 平成18年度北調査区西門跡表土剥直後（北から・白線のライフライン敷設跡周辺から硬化面）



PL.85 平成18年度北調査区西門跡硬化面（北から・ライフライン敷設跡周辺から硬化面）



PL.86 平成18年度南調査区尼寺築地堀想定ライン(東から・画面奥に明黄褐色の客土)



PL.87 平成18年度南調査区尼寺築地堀想定ライン(南から・画面奥に明黄褐色の客土)

(14)



PL.88 平成18年度南調査区尼寺築地堀想定ライン(西から・明黄褐色の客土断ち割り)



PL.89 平成18年度南調査区尼寺築地堀想定ライン(東から・明黄褐色の客土断ち割り)

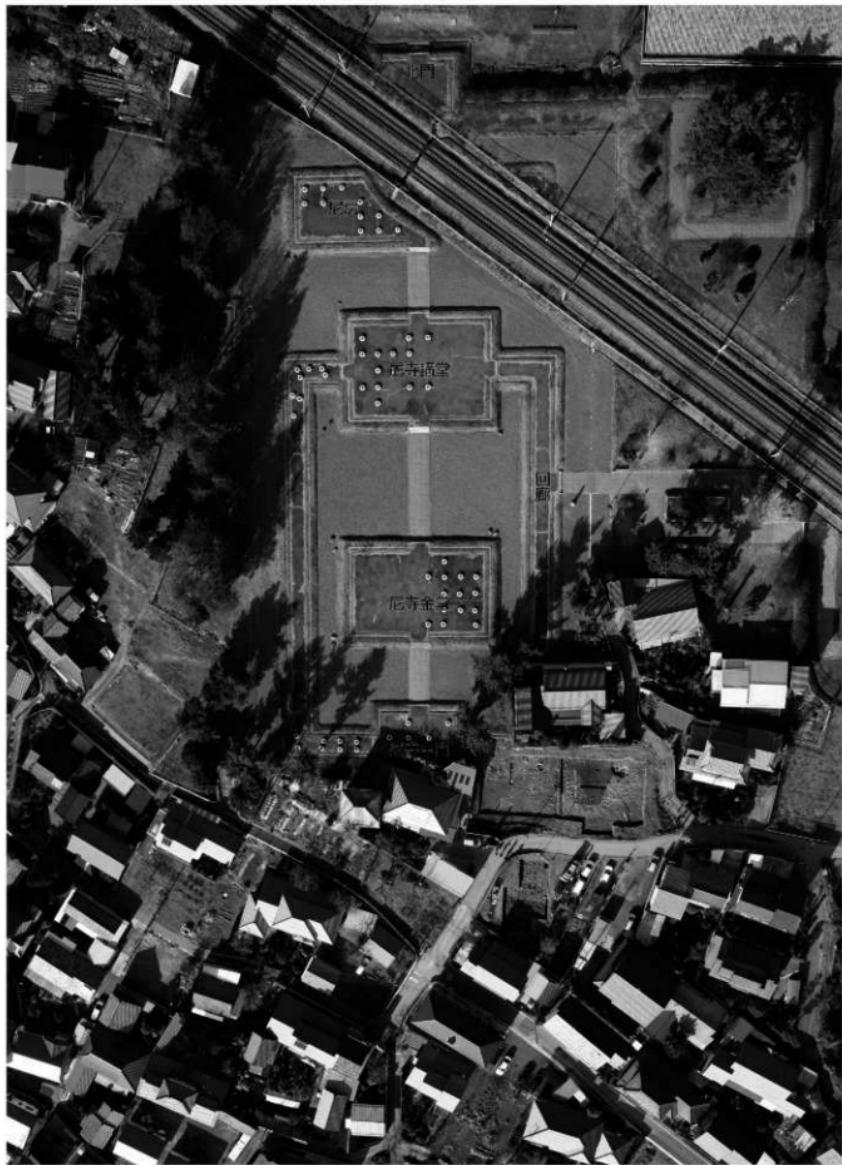


PL.90 平成18年度南調査区溝跡検出状況(南から・平安期の住居址にきられている)



PL.91 平成18年度南調査区溝跡セクション(北から)

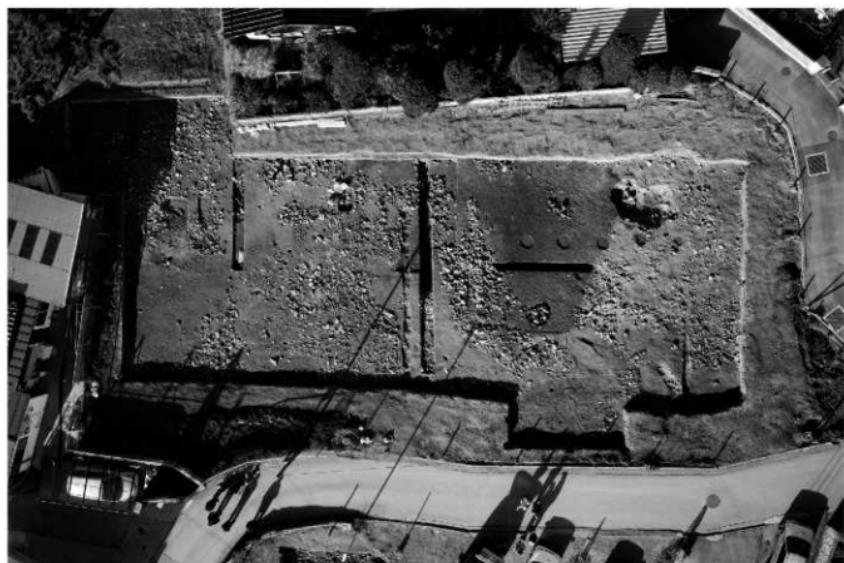
(1)



PL.92 平成19年度尼寺航空写真(写真上が北)



PL.93 平成19年度調査区全景(写真上が北)



PL.94 平成19年度北調査区全景(写真上が北)



PL.95 平成19年度南調査区全景(写真上が東)



PL.96 平成19年度南調査区検出の石列(南東から)



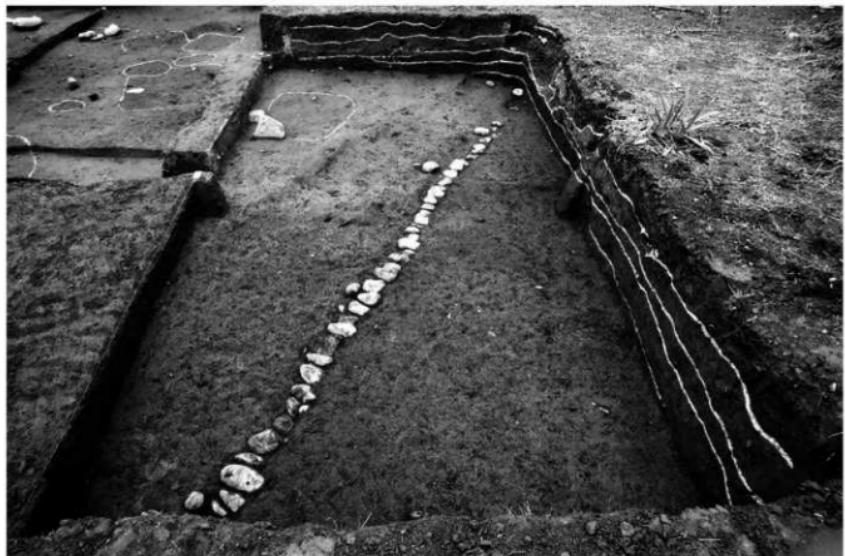
PL.97 平成19年度調査区全景(南から)



PL.98 平成19年度調査区全景(北から)



PL.99 平成19年度南調査区石列検出状況(東から)



PL.100 平成19年度南調査区石列検出状況(西から)



PL.101 平成19年度南調査区石列トレンチ掘削状況（南から）



PL.102 平成19年度南調査区石列トレンチ掘削状況（北から）



PL.103 平成19年度北調査区湿地状遺構検出状況（北から・中央の石列は暗渠排水）



PL.104 平成19年度北調査区中門東回廊想定部検出状況（東から）



PL.105 平成 20 年度調査区全景 (写真上が北)



PL.106 平成20年度西調査区全景(写真上が西)



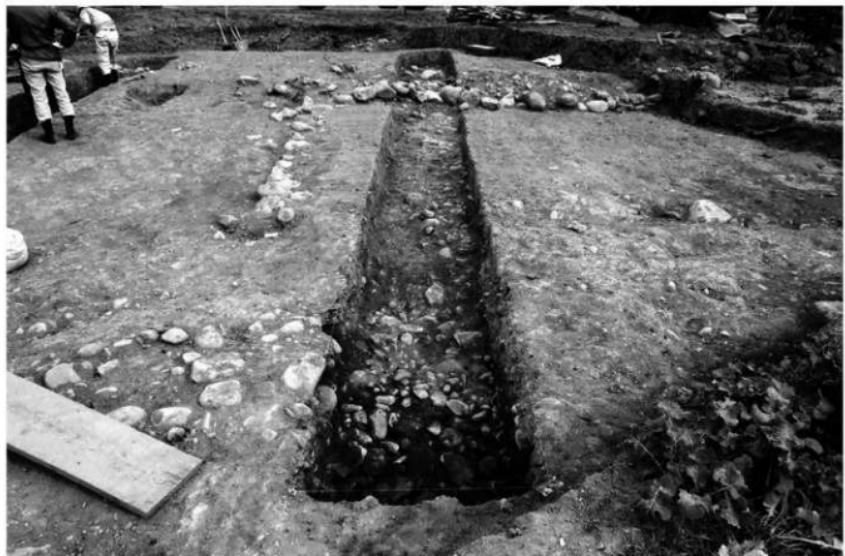
PL.107 平成20年度東調査区(写真上が北)



PL.108 平成20年度西調査区微段丘石垣(南東から)



PL.109 平成20年度西調査区微段丘石垣西端(北西から)



PL.110 平成20年度東調査区 Tr-01(南西から)



PL.111 平成20年度東調査区 Tr-01(北東から)



PL.112 平成20年度西調査区着手前(南から・石垣が微段丘のライン)



PL.113 平成20年度西調査区表土剥ぎ後(南から・石垣の下部が残る)



PL.114 平成20年度西調査区石垣下部(東から)



PL.115 平成20年度西調査区石垣下部(南西から)



PL.116 平成 20 年度西調査区石垣裏の状況（北西から）



PL.117 平成 20 年度西調査区 Tr-03 セクション（東から）



PL.118 平成20年度西調査区北西部集石(南西から)



PL.119 平成20年度西調査区北西部集石(北西から)



PL.120 平成20年度西調査区北西部集石（北東から）



PL.121 平成20年度西調査区北西部集石部分除去（北西から）



PL.122 平成20年度西調査区井戸跡(北から)



PL.123 平成20年度西調査区竪穴住居跡,P-05,P-06(北西から)



03

19  
(1)

04



20



10



23



17



65



78



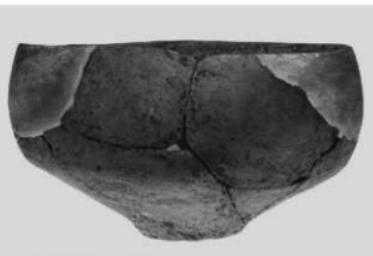
114



80



117



81



125



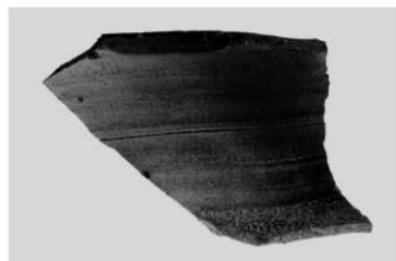
103



242



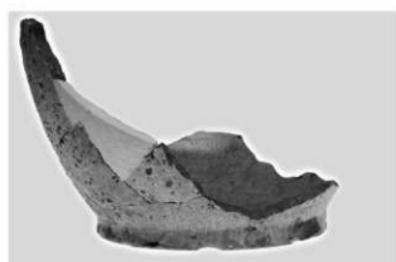
261

340  
(3)

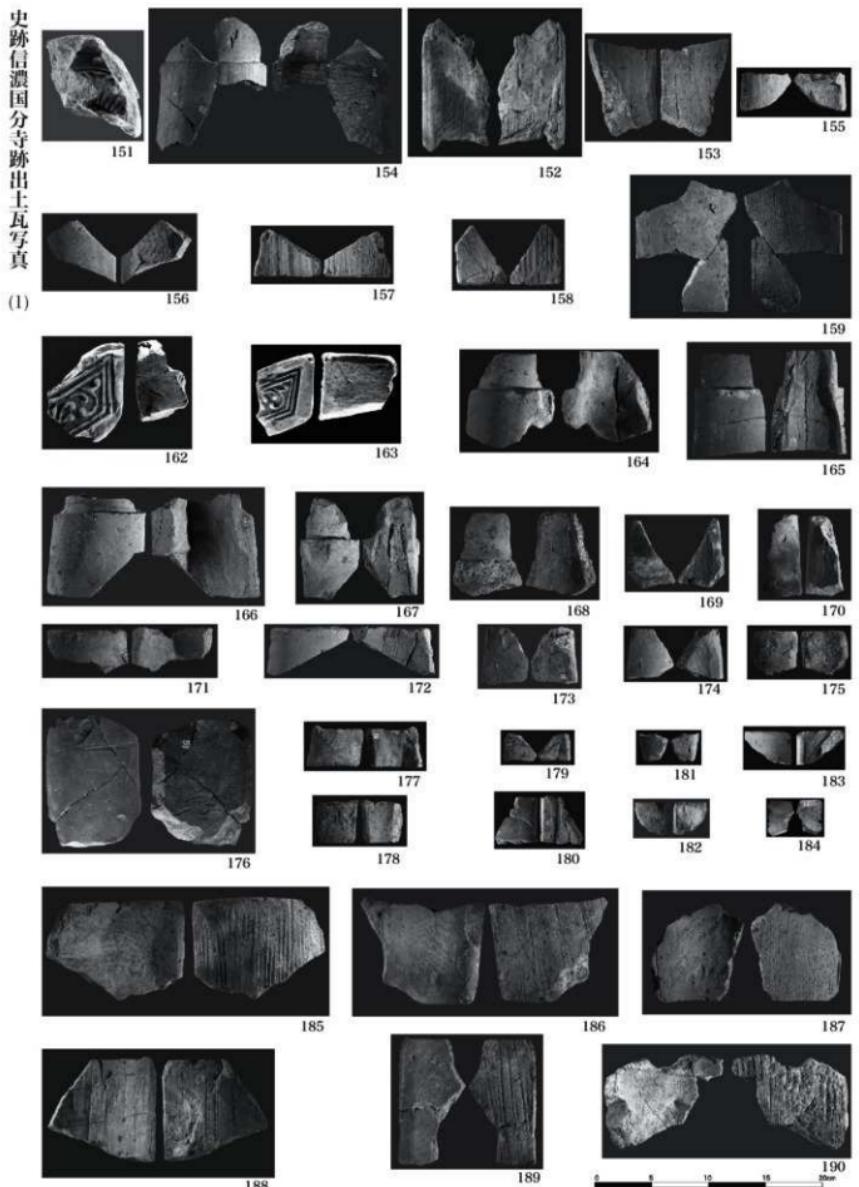
271

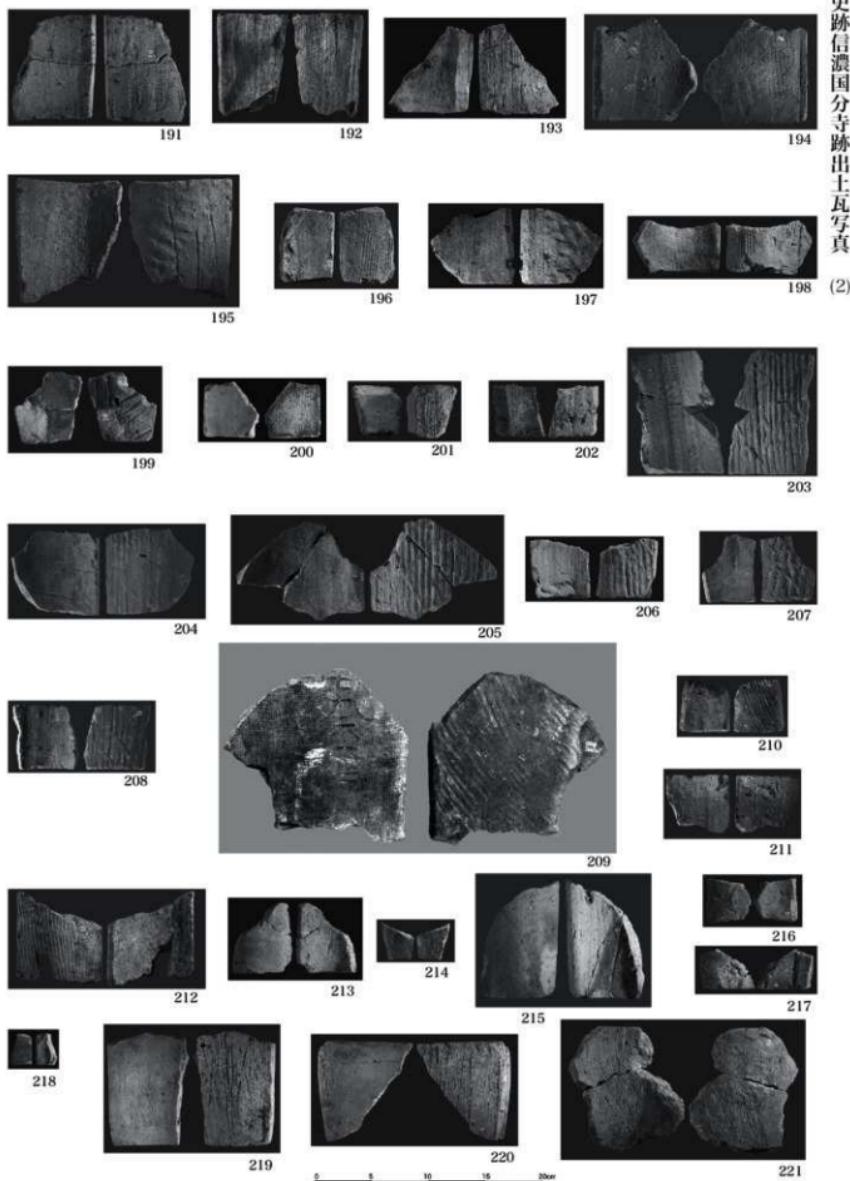


322



338





史跡信濃国分寺跡出土瓦写真



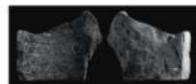
222



223



224



225

0 5 10 15 20cm

(3)

## 報告書抄録

ふりがな	しせきしなのこくぶんじあと						
書名	史跡信濃國分寺跡						
副書名	平成18(2006)年度～平成21(2009)年度記念物保存修理事業に伴う史跡信濃國分寺跡発掘調査報告書						
シリーズ名	上田市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第108集						
編著者名	中沢聰士						
編集機関	上田市教育委員会						
所在地	〒386-0025 長野県上田市天神二丁目4番55号 TEL0268(23)6361						
発行年月日	西暦2010年3月25日						
所取遺跡名	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
信濃國分寺跡	上田市大字信濃國分寺仁王堂 1100,11011102,1103, 1159,1160,1191,1201, 1202 (枝番省略)	20203	36° 22' 50"	138° 16' 24"	平成18年6月 15日～ 平成20年12月 25日	3,000 m <sup>2</sup>	記念物保存 修理事業

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
信濃國分寺跡	寺院	古代及び古墳時代後期～中世	礎石瓦礫物跡 堅穴式住居址 掘立柱住居址 ビット	土器・須恵器・ 布目瓦・灰陶陶器・ 綠釉陶器・磁器	僧寺西門跡発定

上田市文化財調査報告書第108集

## 史跡信濃国分寺跡

平成18(2006)年度～平成21(2009)年度記念物保存  
修理事業に伴う史跡信濃国分寺跡発掘調査報告書

発行日 平成22(2010)年3月25日

発 行 上田市・上田市教育委員会

長野県上田市天神二丁目4番55号 TEL0268(23)6361

印 刷 中沢印刷株式会社